八千代町埋蔵文化財調査報告書　4

太　田　古　墳

１９８９

茨城県八千代町教育委員会

太　田　古　墳

１９８９

茨城県八千代町教育委員会

序

先年，町の水道事業工事中，太田集落内で石棺が発見されました。古墳として予想もしていなかった場所でありますが，発掘調査を行いこのたびその報告書がまとまり，ここに出版のはこびとなったことは誠に喜びに耐えません。

本町では，既に数多くの発掘や町内に現存する古文書並びに文化財等を整理して町史の編さん事業に着手し，昭和63年には通史編に続いて資料編２巻も完成出版したところであります。

今後，更に新たに発見されるであろう資料や埋蔵文化財等については，随時調査を行いつつ町史の補完を続けなければなりません。

このたびの太田出土の石棺調査は，その一つとして大きな意義を有するものであります。筑波大学教授 岩崎卓也氏はじめ調査にたづさわられた方々に心から感謝を申し上げます。

平成元年３月

八千代町長　　宮　本　邦　朋

発行にあたり

太田古墳の発掘調査は，昭和62年３月３日から３月23日にかけて実施されました。調査のきっかけとなったのは，昭和61年11月14日，八千代町広域水道事業の配管工事中，請負業者の有限会社広瀬設備が発見したのにはじまります。町教育委員会に報告を頂いたこと，文化財についての深いご理解に対して謝意を表します。

当古墳は報告書にもあるように，洪積台地の東端の舌状地に位置しています。当地域は古くから農業生産も盛んであり，自然に恵まれた環境のなかで，当時としては高い水準の生活であったことを偲ばせています。本古墳からは沢山の遺物が発見されましたが，銅鏡の発見は当町の調査では，はじめてのものと思われます。この貴重な遺物はかけがえのない文化財として，民俗資料館に保管展示して行く所存です。

ここに調査研究・報告書の発刊をみることができたのも宮本町長さん，議会の皆さんの文化財に対する深いご理解によるものと感謝申し上げます。発掘調査・報告書作成にあたられた筑波大学教授 岩崎卓也氏，ならびに筑波大学生諸君のお骨折りに深甚な敬意を表します。

平成元年３月

八千代町教育委員会教育長　　鈴　木　義　次

例　　言

1．本報告書は、茨城県結城郡八千代町大字太田字関場58番地に所在する太田古墳の発掘調査結果を収録したものである。

2．この調査ならびに報告書の作成は、八千代町教育委員会の委託を受けた岩崎卓也の指導のもと、筑波大学考古学コースの学生の手で行なった。

3．報告書の記述は、その一部を各執筆者の文意をまげない範囲内で岩崎が加筆、統一をはかったが、その文責を明示すべくそれぞれの文末に執筆者名を記入した。

4．本書に収録した写真は主として滝沢　誠・谷中　隆が撮影し、実測図類の整理とレトースには調査参加者のほか、考古学研究会の白根義久・仲山路子・那須利治が協力した。

5．出土遺物のうち鉄製品の保存処理に関しては、茨城県立歴史館阿久津久氏に依頼し、人骨については聖マリアンナ医科大学森本岩太郎氏に鑑定を依頼し、玉稿をいただいた。またX線写真の撮影は、筑波大学保健管理センター沢田作平氏に依頼した。

6．調査にあたっては、太田地区住民の方々、とくに大久保正男氏ならびに地権者である広瀬　静氏に御厚情を賜った。

7．調査ならびに報告書の作成においては、下記の方々に御助言、御協力をいただいた。
　白石典之・滝沢　誠・西野　元・山田昌久(50音順)

調査団の構成

代　表　岩崎卓也（筑波大学教授）

赤堀　徹・國井弘紀・東　憲章・松内賢二郎・谷中　隆（筑波大学生）

事務局

鈴木　義次（八千代町教育委員会教育長）

田辺　賢治（八千代町教育委員会　社会教育課長）

水垣　　進（八千代町教育委員会　社会教育課主任）

相田　敏美（八千代町教育委員会　社会教育課主事）

小川美代子（八千代町教育委員会　社会教育課主事）

鮎川　定之（八千代町教育委員会　派遣社会教育主事）

染野健十郎（八千代町教育委員会　社会教育指導員）

目　　次

序　　八千代町長　宮本邦朋

発行にあたり　　八千代町教育委員会教育長　鈴木義次

はじめに

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．自然環境 …… 1

2．歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　太田古墳の調査

1．調査の経過 …… 6

2．調査の成果 …… 10

（1）遺　構 …… 10

a．墳丘　b．埋葬施設

（2）遺物の出土状態 …… 15

（3）出土遺物 …… 17

a．銅鏡　b．金環　c．玉類　d．直刀

e．鉄鏃　f．刀子　g．埴輪

第Ⅲ章　考　察

1．鏡について …… 37

2．追葬について …… 39

3．太田古墳の年代について …… 41

後　論 …… 43

付　篇　太田古墳出土人骨について　森本岩太郎 …… 46

文　献 …… 50

挿図目次

第１図　太田古墳付近の地形と遺跡分布 …… 4
第２図　太田古墳付近地形図 …… 11
第３図　土層断面図 …… 12
第４図　主体部実測図Ⅰ …… 13
第５図　主体部実測図Ⅱ …… 14
第６図　遺物出土状態 …… 16
第７図　銅鏡拓影および断面図 …… 18
第８図　金環実測図 …… 18
第９図　玉類実測図Ⅰ …… 19
第10図　玉類実測図Ⅱ（土製丸玉、ガラス製丸玉、ガラス製小玉） …… 20
第11図　玉類実測図Ⅲ（ガラス製小玉） …… 21
第12図　玉類実測図Ⅳ（ガラス製小玉） …… 22
第13図　直刀実測図Ⅰ …… 26
第14図　直刀実測図Ⅱ …… 27
第15図　鉄鏃実測図Ⅰ …… 28
第16図　鉄鏃実測図Ⅱ …… 29
第17図　鉄鏃実測図Ⅲ …… 30
第18図　鉄鏃実測図Ⅳ …… 31
第19図　刀子実測図 …… 35
第20図　トレンチ内出土埴輪拓影 …… 35
第21図　太田古墳出土鏡に文様の類似する鈴鏡と、小孔を有する鏡 …… 38

付篇１
写真１　各人骨の歯 …… 47
写真２　（ａ）・（ｃ）両男性の上顎前歯唇側面 …… 49

表目次

第１表　勾玉計測表 …… 23
第２表　管玉計測表 …… 23
第３表　土製丸玉計測表 …… 23
第４表　ガラス製丸玉計測表 …… 23
第５表　ガラス製小玉計測表 …… 23
第６表　鉄鏃計測表 …… 32

図版目次

図版１　古墳周辺航空写真

図版２　１．遺跡の遠景

　　２．遺跡の近景

図版３　１．石棺の全景

　　２．石棺内への土砂流入状況

図版４　遺物出土状況

図版５　１．石棺北東部の遺物

　　２．石棺北東部の遺物（拡大）

　　３．玉類の出土状況

　　４．１号人骨（下顎骨）

図版６　１．５号人骨の集積状況

　　２．５号人骨下の鉄鏃（ｂ群）

　　３．南東長側壁際の遺物

　　４．鉄鏃出土状況（ｃ群）

図版７　１．南東長側壁の接合部（粘土除去前）

　　２．南東長側壁の接合部（粘土除去後）

　　３．石棺北隅の接合部（粘土除去前）

　　４．石棺北隅の接合部（粘土除去後）

図版８　１．土壙内埋土の断面

　　２．棺身の状況（北東から）

図版９　１．棺身の状況（南から）

　　２．棺身の状況（南東から）

図版10　１．銅鏡

　　２．銅鏡（Ｘ線写真）

図版11　１．金環

　　２．勾玉

図版12　玉類

図版13　直刀と鐔

図版14　１．直刀及び刀子

　　２．直刀及び刀子（Ｘ線写真）

図版15　１．鉄鏃（１・２ａ群，３～10ｂ群）

　　２．鉄鏃（Ｘ線写真）

図版16　１．鉄鏃（ｃ群）

　　２．鉄鏃（Ｘ線写真）

図版17　１．円筒埴輪片

はじめに

八千代町は鬼怒川と飯沼川との間に広がる緑豊かな大地で，第４紀層から形成され上古から村落が点在していたところです。町のほぼ中央には鬼怒川に注ぐ山川が南流し，これを境として東側はおもに沖積地となっており，広大な水田が開けている。また西側は洪積層の火山灰土が堆積した常総台地に属し，町の主要な産物である白菜やメロンなどの畑地が台地の大部分を占めており，その周囲には平地林や冬の強い西風を防ぐための屋敷林を持つ農家が散在しているなど，純農村的な景観が見られる。しかし最近は交通の便も良くなり，いろいろな面で大都市との交流が増してきており、首都圏からの企業の進出などもあり，近郊農村的な性格が強められつつある地域でもあります。

さて今回発掘調査が行われた太田古墳の周辺は，台地の上であるためその大半が野菜類を栽培する畑地や宅地となっており，その周囲の低地は水田として利用されています。当古墳は畑地として使用されていたところから発見されたもので遺跡台帳にも記録されていなかったが，土地所有者である広瀬静氏によれば，20年程前までは若干の盛り上がりがあったらしい。その後農作業の不便から削平したが，耕作に際し地中に板石らしきもののあることは確認していたという。

発見は昭和61年11月，町営水道敷設工事に伴う掘削中のことで，工事請負業者の有限会社広瀬設備から教育委員会に連絡された。さっそく係員が現地に向かい今後の対応策について協議するとともに，その地名から太田古墳と名付けた。

発掘調査は，筑波大学研究生の谷中隆氏の紹介によって，筑波大学歴史人類学系教授岩崎卓也氏を調査主任とする発掘調査団が組織され，本格的な調査は昭和62年３月に実施された。調査によりその墳丘は確認できなかったものの，古墳の主体部である石棺内から５体分の人骨と豊富な副葬品が検出され，それらの検討から本古墳が古墳時代後期に築造されたものであることが判明しました。

現在町内には県指定文化財１件，町指定文化財16件があり，古墳は５基指定されています。また町の南部にあたるところには，現在は数基残されているだけとなっているものの，往古には10数基からなる古墳群であった仁江戸古墳群や城山古墳群が存在しているなど，町内には数多くの文化財があります。太田古墳から出土した遺物については，町の貴重な文化財として保管展示していく予定ですが，これら既知のあるいは今後発見されるであろう文化財に対しても何らかの形で後世に残すよう整備・保全を進めていかなければならないでしょう。

ここに太田古墳の報告書が刊行されるにあたり，筑波大学教授岩崎卓也氏はじめ関係各位に対し，心から敬意と感謝を申し上げるとともに，この報告が当地域の歴史を語るうえで少しでも役に立つことができればと願うものであります。

（事務局）

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．自然環境

太田古墳がある茨城県結城郡八千代町は関東平野のほぼ中央，茨城県南西部に位置する人口約24,700人の町である。町の東には，栃木県北西部の日光連峰に源を発する鬼怒川が南流しており，周辺に肥沃な沖積地を形成している。南西にも飯沼川沖積地があり，この二つの沖積地の間は洪積台地である結城台地となっている。結城台地の標高は結城市付近で約40m，八千代町北西部の塩本地区で29m，町域のほぼ中央で26.6m，南西部の平塚地区付近で21mと，北から南に向かって高度を減じている。但しこれは一定の傾斜で低くなるのではなく，2～3mの緩斜面をもって段丘状に低くなるのである。また，この台地は鬼怒川や飯沼川などの河川によって樹枝状に開析され，6～8mの断崖状を呈するところも特に南部においては顕著に見られるが，多くの場合その縁辺部は緩やかな斜面となっている。

さて，本古墳は八千代町のほぼ中央部，西方から舌状に突出した台地の先端に位置し，行政区画の上では大字太田字関場58番地となっている。この台地は幅200m，比高3m程で，北縁部は急斜面となっているものの，南縁および先端部は比較的なだらかで，古墳周辺は東に向かって緩やかに傾斜した地形となっている。

（谷中　隆）

2．歴史的環境

八千代町域には，先土器時代から歴史時代に至る，数多くの遺跡が残されている。遺跡の多くは分布調査などによって確認されたもので，発掘調査が行なわれた遺跡はごくわずかである。

先土器時代，あるいは縄文・弥生時代の遺跡は，前述の鬼怒川や飯沼川ならびにその支流が開析した樹枝状に入り込む谷田に面した台地の縁辺部，あるいは鬼怒川によって形成された自然堤防上に多く分布している。

数少ない先土器時代の遺跡は，いずれも沖積地に面した台地の縁辺に立地している。縄文時代の遺跡の分布を見ると鬼怒川沖積地に面した台地縁辺部および自然堤防上と，飯沼川開析谷縁辺部の二地域に大別できる。しかし遺跡数などの点では，飯沼川周辺の方が卓越しているといった状況が見受けられる。この傾向は弥生時代の遺跡の分布でさらに明確になる。すなわちこの時代に形成された遺跡は鬼怒川沿いでは町域南東部の仁江戸地区を除いてほとんど見られず，飯沼川周辺に集中

している。

古墳時代集落もやはりそうした遺跡分布のあり方を受け継いでおり，飯沼川開析谷周辺に数多く分布している。おそらく鬼怒川の沖積地を利用する力量がまだ整っていなかったのだろう。

古墳の分布においても同様の傾向が見られる。１基を除いていずれの古墳も沖積地あるいは開析谷に面した台地縁辺部に立地しており，38基が存在したとされているが，現存するものは15基である。以下主な古墳について概観してみたい。

鬼怒川西岸域には11基が存在している。そのうち７基は町域南東部の仁江戸地区に仁江戸古墳群として確認されているもので，他の４基はそれぞれ単独に存在している。

浅間神社古墳は鬼怒川右岸の低地に立地している円墳で，径約20ｍ，高さ約５ｍを測る。

西大山赤城山古墳は東側に沖積地を臨む台地縁辺部に立地している。円墳で墳丘は半分ほどが削平されているが，径20ｍ，高さ５ｍ程度と推定される。

菅谷天神塚古墳は，北側に沖積地を臨む台地上に立地する径約40ｍ，高さ約５ｍの円墳である。墳頂部は削平されているものと思われ，径約18ｍの平坦部となっている。復原高約6ｍで、現在墳頂には天神社が祭られている。

宿古墳は北東側に沖積地を臨む台地縁辺部に立地している。墳丘は道路によって大部分が削平されているが，円墳で径20ｍ，高さ２～３ｍ程度の墳丘を有していたものと思われる。周辺から円筒埴輪の破片が出土している。

仁江戸古墳群は鬼怒川右岸台地上の，主に北縁部寄りに立地している。はじめ13基の古墳からなっていたが，現存するものは円墳６基，前方後円墳１基の計７基である。唯一の前方後円墳である香取神社古墳は，北へ突出した舌状台地の先端部に立地する古墳で，前方部を北に向けている。墳丘は全長約72ｍ，後円部径約45ｍ，後円部高約6.25ｍ，前方部高約２ｍで，焼成前底部穿孔の壺形埴輪が墳丘周辺から採集されており，古墳時代前期末葉頃の築造と考えられる。

円墳は墳丘の大部分が削平されているものも見受けられるが，径20～30ｍ程度の規模を有する古墳が主体を占めるようである。築造時期については不明であるものの，墳丘周辺などから採集された埴輪から，削平されてしまった古墳もふくめて，古墳時代後期に属するものが多いと思われる。

なお，仁江戸古墳群からは昭和32年に，古墳の主体部と考えられる石棺が発見されている。石棺は現表土下から発見され，棺内から３体の人骨と直刀・刀子・鉄鏃などの副葬品が出土している。やはり後期に属する古墳で，人骨を除く遺物は現存している。

飯沼川沖積地に面した台地上には現在４基が存在している。

蕗田塚山古墳は，飯沼川開析谷の東岸台地上に立地する前方後円墳で，墳丘の規模は全長約20ｍ，後円部径約10ｍ，後円部高約４ｍ，前方部幅約12ｍである。

秋葉神社古墳は，飯沼川開析谷西岸の台地先端部に立地する墳丘長約30ｍの前方後円墳である。明治25年に主体部と考えられる石棺が発見され，その際に記述された「古墳発掘再御届」によれば，石棺のほか人骨２体，大刀２，槍１，刀子２が出土したことが記録されている。出土した遺物は現

存しないが，人骨は古墳北側に埋め戻され，石棺の用材の一部が石碑として立てられている。またこの古墳の周辺には他に数基の古墳が存在したとされているが，現在は削平のためか確認することはできない。

城山古墳群は飯沼川開析谷東岸の台地上に立地する。以前は13基の円墳のみで構成される古墳群であったらしいが，現存する古墳は２基である。いずれも円墳で径約10ｍ程度の規模を有するものである。この古墳群は現在までに何度か発掘されており，石棺，人骨，直刀，あるいは短甲（？）をつけた武人などの人物・馬・鳥・犬などの形象埴輪や円筒埴輪が出土したとされている。しかし現存する遺物は少なく，人物埴輪の胴部と円筒埴輪数点があるのみである。また当古墳群から出土したとされる男子立像埴輪が，現在大和文華館に所蔵されている。

昭和51年には古墳群中の栗山矢尻古墳の発掘調査がなされている。報告書によれば栗山矢尻古墳は径約24ｍの円墳で幅約２ｍ，深さ約0.3ｍの周湟を有し，現表土下に主体部である箱式石棺を構築している。石棺には雲母片岩の板石を使用し，床石６枚，長側壁各３枚，短側壁各1枚，蓋石６枚で構成されており，石棺の周囲は白色粘土によって被覆されていた。規模は内法で長さ1.9ｍ，幅0.5ｍ，高さ0.5ｍで，石棺内からは2体分の人骨が，石棺の一端にまとまった状態で出土している。なお，石棺は現在中央公民館南側に復元されている。

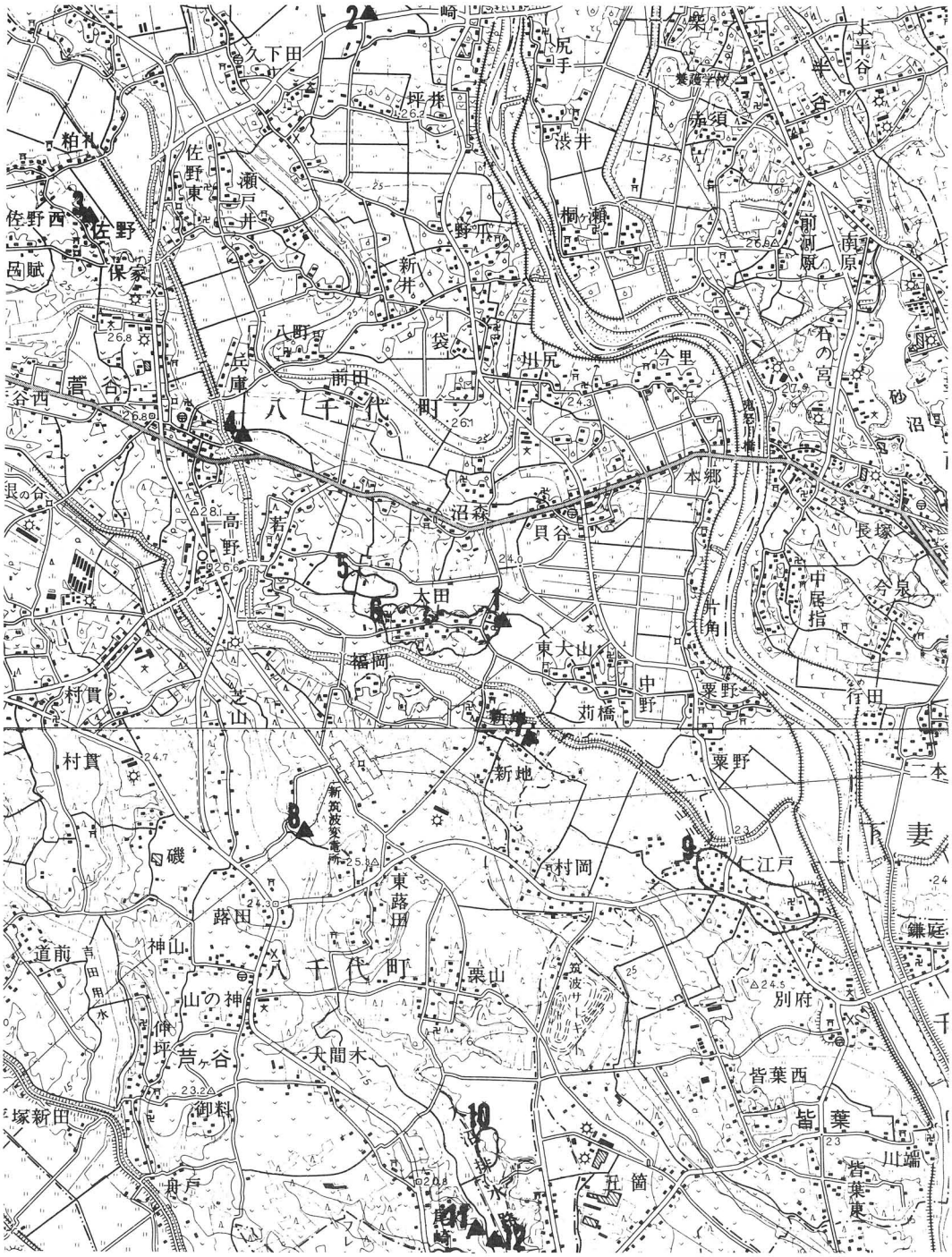
以上，八千代町内の主要な古墳についてみてきたが，発掘調査されたものは少なく，墳丘の規模や築造時期など不明な点が多い。ただし数少ない発掘調査などから，主体部である石棺を墳頂部ではなく地表下深く埋設している例がいくつか見られる。茨城県，あるいは千葉県北部などにはこのような古墳が古墳時代後期においてよく見られるから，町内に分布するこのような古墳も例外ではないと言えよう。また仁江戸古墳群中の香取神社古墳は焼成前底部穿孔の壺形埴輪が採集されている点で注目すべき古墳であるが，他の古墳と同様古墳群中の他の古墳や鬼怒川水系に存在する主要な古墳との関係の中で考えていくべきであろう。

さて，古墳時代，あるいはそれ以前において，遺跡の分布などの点で飯沼川開析谷周辺が卓越した状況を示していることはすでに述べたが，この地域においてはその後も注目すべき遺跡がいくつか見られる。

尾崎前山製鉄遺跡は台地平坦部から南面する斜面にかけて存在し，台地の前面と側面は飯沼川の開析谷によって挟まれている。発掘調査の結果，製鉄炉３基，付属施設として木炭置場，粘土置場，作業場及び住居４軒（うち１軒は鍛冶工房跡）が明らかにされており，９世紀代のものと推定されている。またこの遺跡の西側には築造時期は明らかではないものの，「牧」の構築物の一部と思われる土塁が長さ約２㎞にわたって存在している。

太田古墳が立地している太田地区周辺では，歴史時代の遺跡として中世から近世にかけての城跡が確認されている。

太田古墳が立地している台地の，沖積地を挟んで北側に位置する台地上には15世紀から16世紀末頃まで存在したと考えられる和歌（島）城跡があり，また太田古墳が立地している舌状台地上



第１図　太田古墳付近の地形と遺跡分布（１:50,000）

１．太田古墳　２．浅間神社古墳　３．赤城山古墳　４．天神塚古墳　５．和歌（島）城跡　６．太田城跡　７．宿古墳　８．塚山古墳　９．仁江戸古墳群　10．城山古墳群　11．尾崎前山遺跡　12．秋葉神社古墳

には16世紀末頃から数十年間のみ存在したとされる太田城跡がある。和歌（島）城跡は1983年に，範囲確認のための調査がなされており、ある程度その概要を知ることができる。また、大田城跡も1987年に土塁ならびに城の一部が調査されている。太田城跡のある台地上は住宅が密集しており，城に関連する遺構は多くはないが，それでも部分的に土塁や堀が見られ、とくに城の中心と思われるところでは比較的良い状態で遺存している。調査が行われたのはその中心部からやや離れた，現在愛宕神社の境内となっているところで，土塁の構造が明らかになるとともに，それに付随する空堀があることが知られた。しかし，建物の遺構などは全く検出されず，調査自体部分的なものであるため，その詳細を明らかにするには至っていない。

（谷中　隆）

第II章　太田古墳の調査

1．調査の経過

太田古墳の発掘調査は，昭和62年３月３日より３月23日にかけて行った。以下，日付を追って調査の経過を記すことにする。

３月３日（火）　朝９時，八千代町教育委員会の方々とともに，石棺が発見された地点に到着，仮供養を行う。同地点に墳丘はまったく存在せず，付近は宅地及び作畑となっている。石棺の蓋石は，水道工事でこれが発見された際にすでに露出してしまっており，その状況は容易に把握できる。蓋石は３枚の板石と２つのやや小さな石片によって構築されているが，北東側の一枚を除いてはいずれも原位置を動いているようである。蓋石の石材は，すべて雲母片岩である。石棺の周囲には墓壙の上端らしき掘り込みが認められた。石棺の西側には水道工事の際のものと思われる幅30cmほどの溝が掘られているが，これより西側は宅地および道路のため発掘することは不可能なこともあり，これを20cm拡張してトレンチ状にし，墓壙内の土層観察を行うこととした。また墳丘の規模と墳形を探るため，石棺の長軸方向と平行に北東トレンチを設定する。

石棺周辺において土師器や埴輪の小破片がいくつか見られるが，本古墳に伴うものであるかどうかは不明である。

３月４日（水）　朝から地形測量を行い，午後２時頃に完了する。現地表面は標高25.50～25.75ｍを測り，西から東へと軽微な傾斜を持つ地形となっている。完成した地形図を検討するが，やはり墳丘，周湟などの痕跡は読み取れない。その後主体部である石棺の中心を基準に発掘区を設定，墓壙の確認を進める。しかし西側土層断面を取り込む形で発掘区を設定したため，不規則な形状となってしまっている。

西側土層断面に現れた土層からは，石棺の構築に際しローム面を掘り込んでいることが明瞭に確認されているが，その他に二次的な掘り込みがあることが推察された。おそらくは追葬を行った際のものであろうと推測されるが，その掘り込みの範囲は未だ明確ではない。蓋石上面は白色粘土で被覆されていたようであるが，耕作のためかその痕跡がたどれるに過ぎない。蓋石の周囲にも多量の白色粘土が認められる。

３月５日（木）　昨日設定した主体部発掘区内での墓壙確認の作業を続ける。その後発掘区内のセクション面の清掃を行い，土層図を作成する。北東トレンチの発掘も開始する。

昨日推定された二次的な掘り込みが蓋石南側において確認された。この掘り込みの上端は，三枚の蓋石のうち東側の二枚の接続部分で石棺に接して消滅しており，その範囲はちょうど西側の二枚

の蓋石を取り外せるものであることが想定された。さらに他の掘り込みや攪乱が見られるかどうかを確かめるため，土層を今一度注意深く検討する。掘り込みは他には見られず，攪乱も見られなかった。北東トレンチにおいて埴輪片がいくつか出土しているものの，周湟と思われるような落ち込みなどは確認されていない。

3月6日（金）　主体部発掘区での土層図完成後，全面的に蓋石上面までの発掘を行い，午後には完了する。墓壙の平面形は隅丸方形で，水道工事によるものの他には大きな攪乱もなく明瞭に確認できる。追葬のためと思われる二次的掘り込みも石棺西側に確認されている。石棺周辺は白色粘土による目張りがなされているが，二次的掘り込みの範囲内においては特に多量の粘土が使用されているようである。

3月7日（土）　主体部発掘区内を清掃し写真撮影を行った後，蓋石及び掘り方を実測する。二次的掘り込み内には黒褐色土が充塡されている。北東トレンチは完掘。しかし周湟と思われる落ち込みなどは結局確認できなかった。

午後，新たに南東，東及び北トレンチを設定し，墳丘の規模及び墳形の確認作業を続けるが，雪のため中断することとなってしまった。

3月9日（月）　蓋石及び掘り方の実測が終了後，蓋石をすべて取り除く。北東側の二石の繋ぎ目を埋めるように置かれている小さな二石はともかく，主要な三枚の蓋石は櫓組みチェーンを使用しなければと考えていたが，それほど重くはなく，人力で移動させることが可能であった。石棺内面はすべて赤彩されており，雨水が冠水したようではあったが，赤色は鮮やかに残っている。蓋石内面も色が褪せてはいるが，所々に赤彩の跡が遺存しており，本来は全面に塗布されていた可能性もある。石棺内には多量の土砂が流入しており，副葬品はまったく確認できないが，北東端には頭蓋骨らしき人骨が見られた。

まずその土砂を取り除くことから始めるが，土が湿っており作業は余りはかどらない。南西短側壁は工事の際に欠かれており，石棺内にその破片がかなり入っていた。盗掘を受けているかどうかは今のところ不明である。

各トレンチの作業も同時に進めているが，いまだ古墳の周湟にあたるような遺構は確認されていない。

3月10日（火）　石棺内に流入した土砂の除去を続ける。石棺南隅においてまず棒状の鉄製品を多数確認，鉄鏃であろうと思われる。その北東側，南東長側壁際で側壁に寄り掛かるように直刀および刀子が確認された。玉類も石棺の中央東寄りの位置から出土している。人骨は主に石棺の北東寄りにみられるがそのほとんどが小破片であり，どの部位の骨かもまったく判別できない。骨自体の出土位置も散乱した状態を示しており，土砂の流入によって攪乱されているものと思われる。遺存状態は非常に悪く，骨粉となってしまっている部分も多い。

3月11日（水）　降雪のため各トレンチでの作業を休止し，主体部発掘区全体をテントで覆い石棺内の作業を進める。しかし溶けた雪の石棺への流入を防ぐのに苦労し，寒さとあいまって作業は

遅々として進まない。

午後からは発掘作業を諦め，室内で出土した土器の洗浄や図面整理を行う。

3月12日（木）　石棺内の土砂の除去を続ける。石棺北東側においては人骨が多数散乱した状態で検出されており，思うように作業が進まない。

確認された多くの遺物は，そのほぼすべてが雲母片岩の板石数枚で構成される床石直上に位置しており，ほぼ原位置を保っているものと思われる。石棺西側の鉄鏃周辺に有機物が遺存しているのを確認した。

墳丘の規模と形態を探るため合計四本のトレンチを設定，発掘を行ったが結局何も見出すことができず，今日埋め戻す。

3月13日（金）　石棺内の発掘作業を継続する。頭骨と思われる人骨や金環，さらに歯の数などから被葬者は複数であることが予想された。歯は石棺北東寄りを中心に多数出土しているが，中には赤色顔料がかかっているものもあり，頭骨の周辺に赤色顔料をまいたものかとも思われる。

午後は雨のため作業を中止した。

3月14日（土）　人骨を実測後，採りあげを始める。人骨はそのほとんどが粉化してしまっており，採りあげには充分に注意を払う。人骨出土位置は床面直上のものもあるが，攪乱のためか床面から浮いた状態で出土している骨も多い。玉類は石棺中央東寄りの一か所に集中している。ガラス製小玉も多数副葬されているため，石棺内からの排土はすべて篩にかけることにする。

3月15日（日）　人骨の採りあげを続け，さらにその周囲の土を除去，副葬品の検出を進める。午後には石棺内の遺物はすべて露呈することができたため，写真撮影のために石棺内の清掃を行う。石棺北東端において，すでに粉化してその形状を留めていないものの頭骨と思われる人骨を三個体確認，歯も相当数出土しており埋葬された人骨は，三体あるいはそれ以上であったことが推定される。

石棺北東端の頭骨三個体のうち，赤色顔料の付着した歯がいくつか出土していた中央の頭骨付近，径約23cmほどの範囲で赤色顔料が確認された。さらに作業を進めるうち，同地点の床面直上から鏡背を上にした銅鏡一面が発見され，調査員を驚嘆させた。鏡背の表面は腐食がかなり進行しており，文様等は判別できない。鏡の周辺には僅かながら布類が認められたが，他の木質などの有機物は検出できなかった。

3月16日（月）　石棺内の清掃，写真撮影を行い，その後遺物の実測を開始する。午後には実測終了，遺物の取り上げを始める。直刀は遺存状態が非常に良く，取り上げは容易であったが，銅鏡および矢柄の残存した鉄鏃の取り上げにはより慎重を期した。

3月17日（火）　遺物の取り上げを継続する。鉄鏃の鋒はそのほとんどが南西を向いている。石棺南西側において確認されていた有機物は，一部の鉄鏃下からも石棺床面に密着した状態で検出された。

遺物の取り上げは午後に終了する。その後石棺内を清掃，写真撮影を行う。

3月18日（水）　石棺の実測を開始。同時に墓壙の発掘を始める。墓壙の発掘に当たっては，墓壙を6区の小発掘区に分割し発掘を進める。まず北東及び南西の2区を掘り下げ，掘り方の詳細を確認する作業に入る。

掘り下げに伴い，墓壙は2段に掘り込まれていることが判明した。また墓壙内埋土の下層には薄い雲母片岩の礫層が存在している。石棺構築の際石材を加工した時にできた石屑であろうか。掘り方の埋土中から粘土は検出されなかったが，石材の接続部分には多量の白色粘土が目張りに使用されている。

3月19日（木）　石棺の実測及び掘り方の発掘を継続する。北東及び南西地区の発掘は完了，セクション面の清掃を行い土層図を作成する。同時に残る地区の掘り下げを行い，夕刻には墓壙床面までの発掘を完了する。掘り方は昨日確認された通り2段になっている部分が多い。

3月20日（金）　夜半から朝にかけて雨が降ったため，10時過ぎに発掘区内を清掃，写真撮影を行う。午後に掘り方の平面図を作成し，その後石棺の棺材をすべて除去，床石下の状態の確認作業に入る。

床石下は平坦なローム面となっている。床石の周囲は側壁を立てるために溝状に掘られており，ちょうど石棺床面となるところのみを掘り残したような状況である。

今日で発掘調査はほぼ完了する。

3月23日（月）　町教育委員会の方々に協力していただき，八千代町役場のユニック付トラックを使用して石棺の棺材を引き上げ，町立歴史民俗資料館に運ぶ。その後主体部発掘区の埋め戻しを行い，すべての発掘作業が完了する。

20日間の短いながらも密度の濃い発掘調査であった。

（谷中　隆）

2．調査の成果

（1）遺　構

a．墳丘（第2・3図，図版2）

本古墳の墳丘は後世の耕作や宅地造成，あるいは道路の敷設などによりすべて削平され，現在はまったく認められない。そこで主体部を起点に放射状に幅1mのトレンチを4本設け，古墳の形状および規模の確認を行ったが，周湟などの本古墳に関連する遺構はまったく発見することができなかった。旧表土面と考えられる土層も西トレンチを含め，いずれのトレンチにおいても確認できなかった。このため墳丘の形状・規模はまったく把握されていない。

なお，調査区の覆土中から埴輪片が若干出土しているがいずれも小破片であり，本古墳に伴うものであるかは不明である。

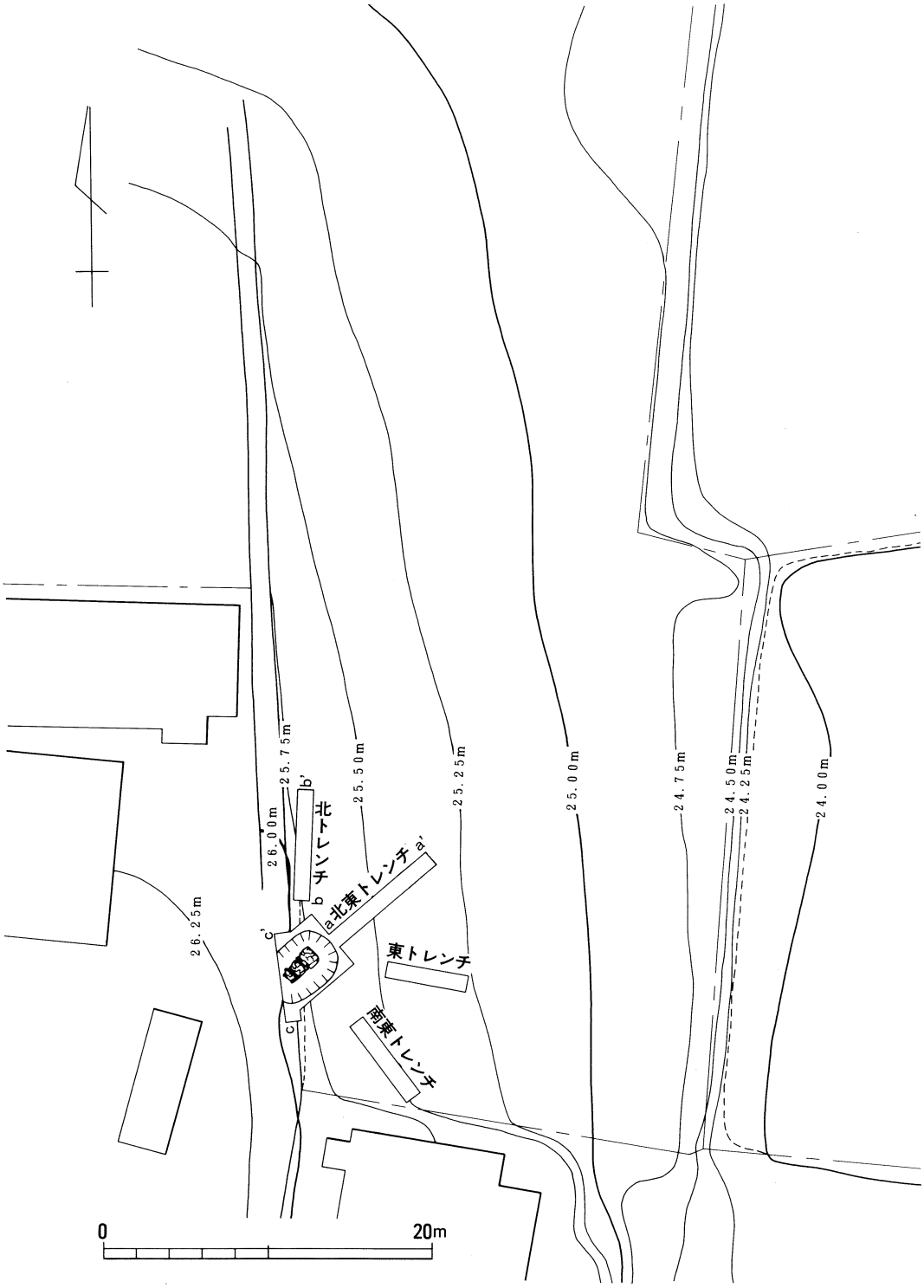
b．埋葬施設（第4・5図，図版3・7～9）

本古墳の主体部は主軸をN47°Eにとる箱式石棺で，地山を掘り込んで構築されている。墓壙の上部は発見以前から耕作の為に失われていたようであり，墓壙の掘り込み面は定かではない。また，墓壙の西側の一部が調査区域外であるうえ，攪乱もあるため，その全容は知りえないが，確認面での平面形は石棺の主軸方向に長い楕円形を呈し，長さ458cm（推定），幅335cmを測る。墓壙の掘り込みは直線的ではなく，途中から角度を変えて掘り込まれており，明確な段を有する部分もある。墓壙の深さは確認面から103cm程度で，壙底部は長さ352cm，幅230cmを測り，やや不整な長方形を呈する。壙底部には壁体を埋め込むための溝状の掘り込みが幅22～50cm，深さ9～20cmで長方形に認められる。

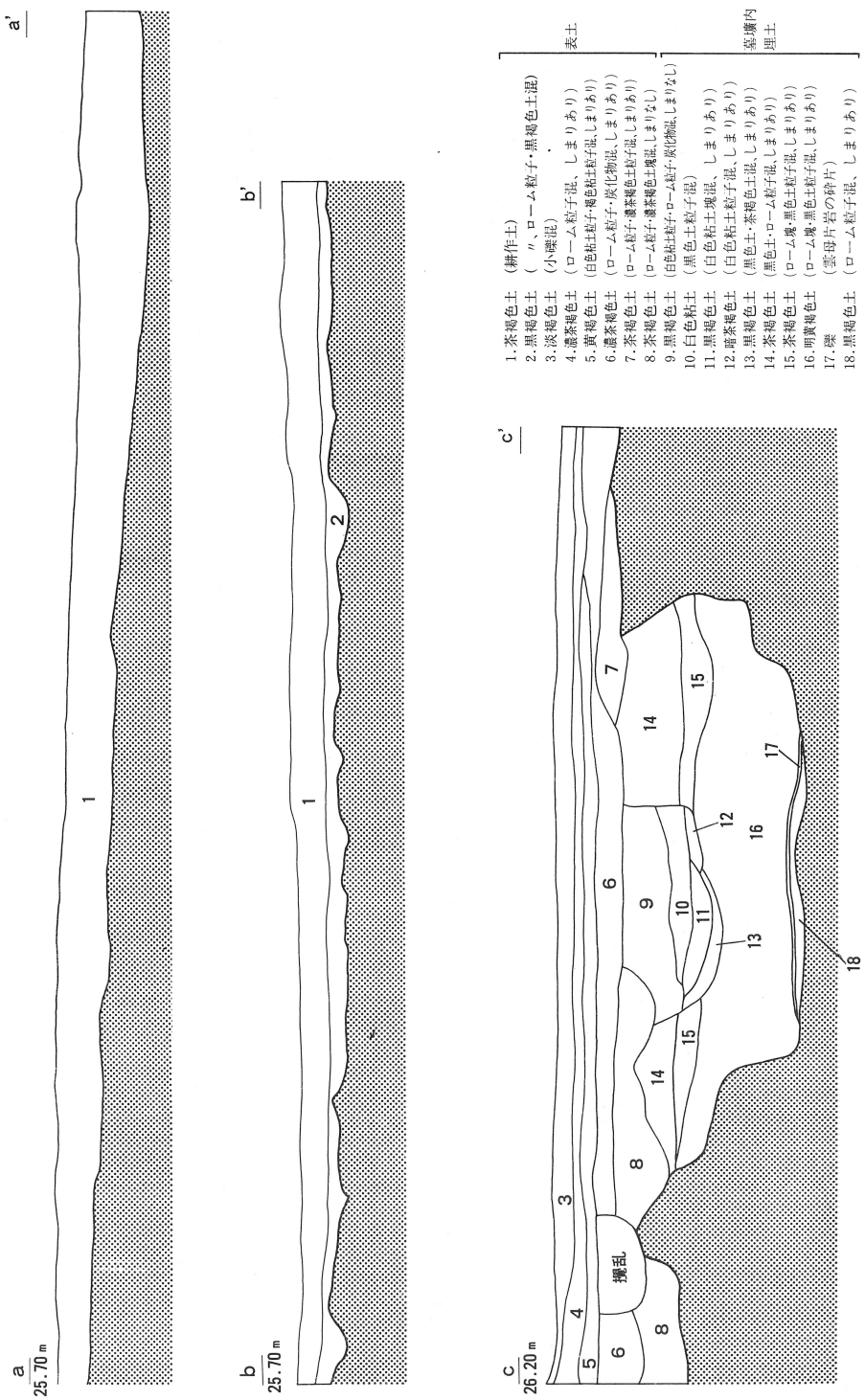
石棺の規模は，外法で上端の長さ216cm，下端の長さ246cmで，幅は北東短側壁付近で90cm，南西短側壁付近で71cmを測る。内法では石棺上端で長さ202cm，幅は北東短側壁付近で68cm，南西短側壁付近で55cm，床面で長さ216cm，幅は北東短側壁付近で72cm，南西短側壁付近で64cmを測り，西側がやや狭い形状となっている。石棺の深さは北東側で64cm，南西側で65cmを測る。

棺材にはすべて雲母片岩の板石が使用されており，南東および北西の長側壁が各2枚，北東および南西の短側壁が各1枚，床石4枚，蓋石4枚で石棺が構成されている。北東側の短側壁は89×73cm，南西側の短側壁は83×63cmを測るもので，長側壁に挟まれる形で立てられている。南東ならびに北西の長側壁はいずれも巨大な一枚石が使用され，南西側に比較的小さな板石を一枚づつ配している。短側壁，長側壁とも土圧のためか，やや内傾した状態であった。床石には4枚の板石が使用されており，床石と側壁との隙間には雲母片岩の破片が敷かれている。

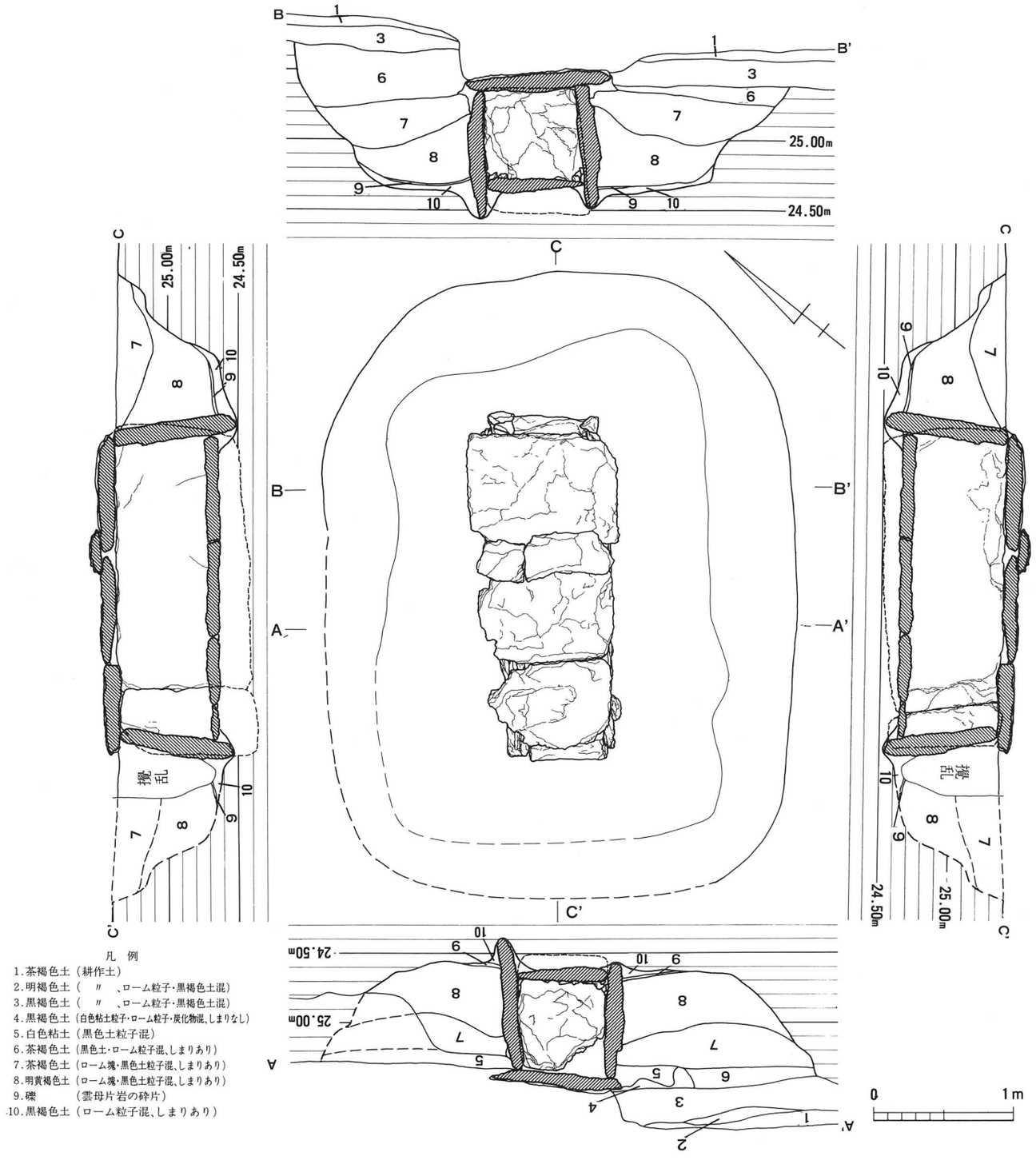
長側壁と短側壁の接合部および長側壁の壁体の接合部には目張りのために白色粘土が貼られているが，南東長側壁の壁体接合部および南東長側壁と南西短側壁との接合部では雲母片岩の小片が使用されており，壁体の強化を図ったものと考えられる。



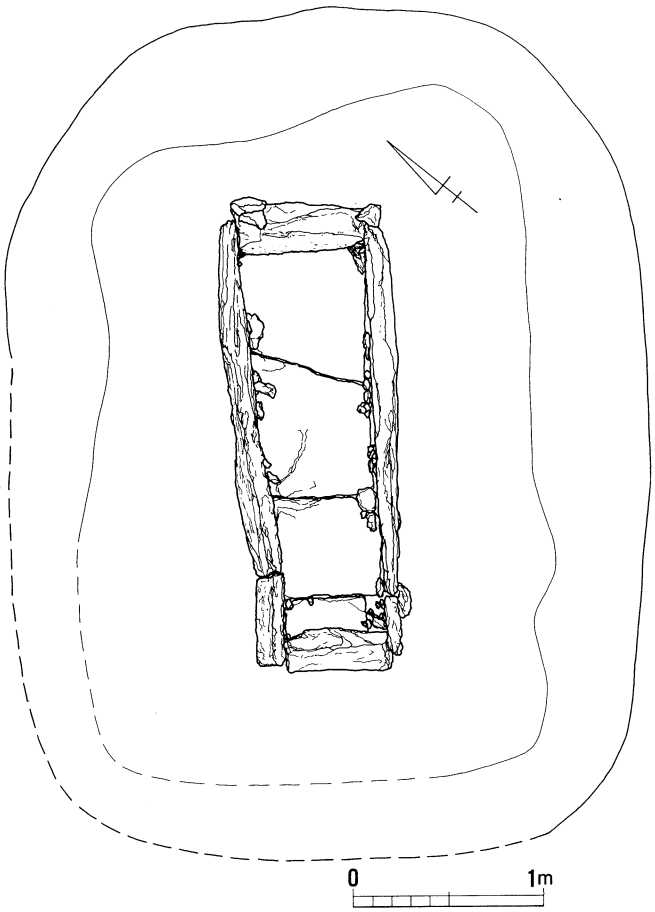
第２図　太田古墳付近地形図（１:400）



第3図　土層断面図（1：40）



第４図　主体部実測図Ⅰ（１:40）



第５図　主体部実測図Ⅱ（１:40）

裏込めは，白色粘土，雲母片岩の破砕礫，ローム・ブロックなどが互層をなす。裏込めの最下層土は側壁下の溝状の掘り込み内に入り込んでおり，さらにこの層上には雲母片岩の破砕礫が薄い層をなしていることから，側壁を立てる際に側壁の安定を図るためにこの最下層土が入れられ，側壁の整形が行われたものと思われる。

蓋石は大型の板石３枚と小振りな板石１枚で構成されている。北東側のものが最大で，南西側のものほど小さい板石を使用している。１枚の小振りな板石は北東と中央の蓋石の接合部に置かれ，２つに割れていた。蓋石全体には白色粘土が貼られており，とくに蓋石の接合部及び蓋石と側壁の合わせめには厚く貼られ，雲母片岩の小片が隙間に入れられている。

また，側壁及び蓋石の内面は赤彩（ベンガラを使用）されていることが確認された。赤彩は長側壁，短側壁ともほぼ全面にわたってみられ，床石から下の部分においても認められた。蓋石も内面全体に赤彩がみられることから，側壁及び蓋石には予め赤彩しておき，その後石棺を構築したものと思われる。

なお，墓壙内の土層観察から，二次的な掘り込みがあることが明らかとなった。掘り込みは主体部西側土層断面（c－c′）ならびに石棺周辺南西寄りの位置で確認されたものであるが，西側の一部が未調査区域となっており，また石棺上の埋土がほとんど存在しないことからその全容を知ることはできない。主体部西側土層断面（c－c′）には，墓壙のほぼ中央に確認面からの深さ56cm，幅123cm程度の掘り込みが確認されている。掘り込み内には黒褐色土，茶褐色土，白色粘土などの層がみられ，とくに白色粘土層は掘り込みの下の部分に多量に認められる。石棺周辺ではそれほど明確ではないものの，西側土層断面に見られた白色粘土層と思われる土層が石棺の長側壁に沿って見られている。南東長側壁沿いでは，側壁の外側58cm程度の位置に掘り込みの上端が確認されており，石棺南西側から直線的に伸び，側壁の北東端から85cm程の位置で長側壁に接している。石棺長側壁の上面から10cm程下の位置まで掘り込まれており，確認面からの深さは約19cmである。北西長側壁沿いでは側

壁の外側40cm程の位置に掘り込みの上端が確認され，側壁の北東端から74cm程の位置で長側壁に接しており，掘り込みの両上端間の幅は確認面で174cm程度である。

以上の所見を総合してみると，この掘り込みは長さ2.5m（推定），幅約174cm，深さ56cm程度の規模を有し，その範囲は３枚の蓋石のうち南西側の２枚と小振りな板石１枚におよぶものである。この掘り込みは後世の盗掘や攪乱のあととは考えられないから，追葬に関係するものとみる方が穏当であろう。つまり，初葬後一定期間経過してこの掘り込みがなされ，南西側の２枚と小振りな板石１枚を取り外し追葬を行ったと考えられるのである。ただし，この掘り込みより小規模なものがそれ以前にあったことは充分に想定できるから，この掘り込みから追葬が一回だけだったと断定することはできない。

（２）遺物の出土状態（第６図，図版４～６）

本古墳の調査では各トレンチから埴輪片などの遺物が検出されているが，いずれも表土中の出土であり，本古墳に伴うものか明らかではない。そのため，ここでは石棺内から出土した遺物についてのみ記述することとする。

主体部内の遺物は，石棺西寄りの部分を除けばほぼ全面にわたって出土している。うち人骨は計５体分が納められていた。北東短側壁際には１～４号人骨の頭骨が並べられており，これらの人骨の頭位は北東であったことが知られる。しかしその他の部位に旧状を留めていると思われるものは皆無であった。いずれの頭骨も骨粉化してしまっており，歯の存在からそれと判別できるといった状態であった。

１号人骨は南東長側壁寄りの一体で，頭骨のみが確認された。下顎骨は粉化しておらず，比較的遺存状態は良好である。歯には部分的に赤色顔料が認められ，死後顔面に赤色顔料が施されたことが推測される。下顎骨から北東へ５cm程のところには，被葬者の着装品と考えられる金環一対が13cm程度の間隔をもって検出された。

２号人骨は１号人骨と３号人骨の中間，石棺ほぼ中央の一体で，頭骨のみが確認されている。１号人骨より北東寄りにずれていた。歯に部分的に赤色顔料が認められており，１号人骨同様死後顔面に赤色顔料が施されたものと思われ，頭骨を中心に長さ24cm，幅16cmの範囲で赤色顔料が確認されている。

頭骨南西寄りからは銅鏡１面が鏡背を上にした状態で，床面直上から検出された。銅鏡の表面からは布片がわずかに検出されている。

3号人骨および4号人骨は北西長側壁寄りの二体で，２号人骨よりもやや北東寄りにずれた北東短側壁寄りのほぼ同じ位置からそれぞれ頭骨と歯のみが確認された。頭骨はいずれも粉化していたため，検出時には一体分と考えられていたが，歯の鑑定の結果二体分であることが判明したものである。頭骨の南西側には金環一対と玉類が検出されたが，これがどちらの人骨に伴うものであるかは

特定しがたい。金環は10cm程の間隔をもって検出された。玉類は金環から20cm程南西の位置に，15×20cm程度の範囲に集中した状態で確認された。内訳は瑪瑙製勾玉12，翡翠製勾玉２，碧玉製勾玉１，碧玉製管玉６，土製丸玉２，ガラス製丸玉20，ガラス製小玉201である。ガラス製小玉はその多くが床面にごく近い位置で検出されているのに対し，勾玉，管玉，ガラス製丸玉は比較的高い位置から検出された。

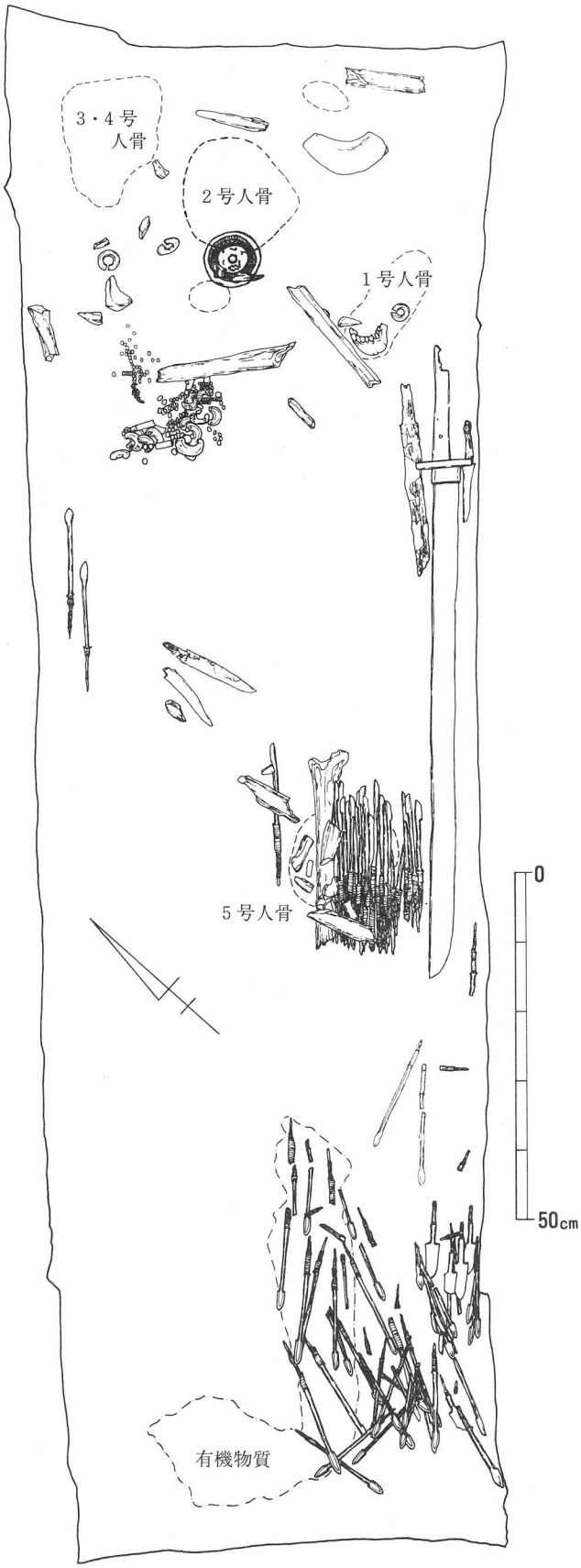
５号人骨は石棺のほぼ中央，南東長側壁寄りの鏃束上および鏃束の北東側から，骨片と歯の集積として発見された。一塊の集積状況を示していたが人骨の数は少なく，また部位の同定も不可能である。歯の鑑定の結果一体分であることが判明したものである。

装身具以外の副葬品は，数本の鉄鏃・刀子を除き，南東長側壁側に沿って配置されていた。

南東長側壁際北東寄りには直刀２，鹿角装刀子１が柄部を揃えるように遺存しており，これらの副葬品の直下には長さ７cm，幅４cm，厚さ２cm程度の雲母片岩の小片が数個置かれていた。なお，直刀の茎部周辺から若干の布片が確認された。

石棺の中央やや北寄りには，刀子２が遺存していた。出土位置からすれば，２号もしくは３・４号人骨に伴うものと考えることも可能であるが，限定することはできない。

鉄鏃は３群に分かれて出土している。



第６図　遺物出土状態（１:10）

北西長側壁際北東寄りからは，２本の鉄鏃が鋒を北東に向け，側壁とほぼ平行に遺存していた。鉄鏃の直下には長さ10cm，厚さ３cm程度の雲母片岩の小片が数個置かれている。また側壁沿いに，50cm程南西の位置までにも床石直上に片岩の小片が置かれていることから，矢はこれらの石の上に置かれたものと思われる。

南東長側壁際ほぼ中央には，側壁と平行に鋒を北東に向けた鉄鏃38点が遺存していた。矢一束が置かれたものであろう。

南東長側壁際南西寄りには，鉄鏃65点が遺存していた。乱雑な状況が看取されるが，鋒の方向はほぼ南西を向いている。北西寄りの部分では，何らかの有機物質が床面に癒着したような状態で確認されており，鉄鏃の下にも入り込んでいた。この物質は，あるいは胡籙のような矢筒が遺存したものと考えることもできよう。

人骨は石棺のほぼ中央から北東側において多く見いだされたが，いずれの人骨も遺存度が悪く，骨片となったものや粉化してしまったものがほとんどである。しかも，石棺発見当初の南西短側壁の欠損による土砂の流入のために攪乱されており，その多くが床面からやや浮いた状態で出土している。墓壙内埋土の土層観察から，少なくとも一回の追葬があったことが確認されており，追葬時において初葬時の人骨の改変がなされたとも考えられるが，いずれにしても床面から浮いた状態で出土した人骨に関しては，土砂の流入によって移動していると考えるのが穏当であろう。人骨が石棺の北東寄りに多く確認されているのもそのためと考えられる。

５号人骨は石棺のほぼ中央南西長側壁寄りの位置から，鉄鏃の上およびその北東側に集積した状況で確認されているが，これは明らかに人為的なものと見られよう。おそらくは追葬時における人骨の片付け行為によるものと思われる。

３・４号人骨は，その頭骨が相互に混在しており，どちらかの人骨が追葬されたものと考えることもできよう。

（谷中　隆）

（３）出土遺物

本古墳からは，３号人骨の頸部付近から勾玉15，管玉６，土製丸玉２，ガラス製丸玉20，ガラス製小玉201，２号人骨の頭部から銅鏡１，１号人骨及び３号人骨の頭部から金環各２計４，直刀２，刀子３，鉄鏃105などが出土している。以下，各々について詳述する。

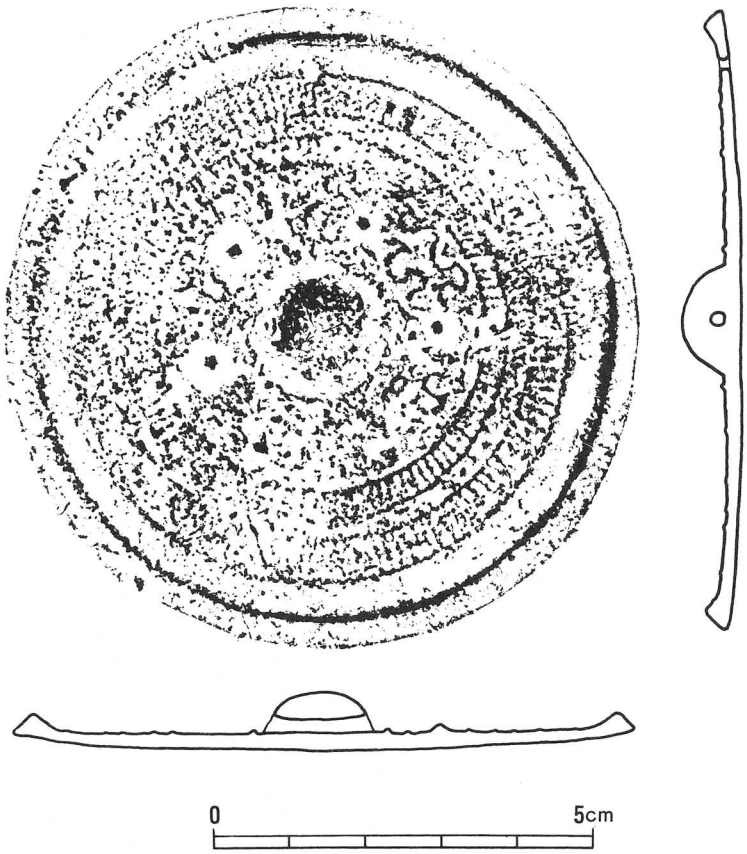
ａ．銅鏡（第７図，図版10）

石棺北東部寄り，２号人骨の頭骨下ほぼ床面直上より鏡背を上にした状態で出土した。面径8.25cm，鈕径1.52cm，鈕高0.78cm，縁厚0.29～0.34cmを測り，鏡面には0.25cm程度の反りが認められる。重さは85.47ｇで、表面は全体に錆化が進んでおり，部分的に鏡を包んでいたと思われる織物が銹着していた。

鏡背の文様構成を外区から見ると，斜縁を挟んで0.78cm内側の位置から櫛歯文帯，複波文帯，櫛

歯文帯と続く。内側の櫛歯文帯と内区との間には斜面等の区切りはなく，そのまま内区へとつながる。内区は６個の乳で区画されるが並びは均等ではなく，６乳を結ぶ線は少々不正確な六角形となっている。それぞれの乳からは５本のＳ字状に屈曲する線文が放射状に発し，中には隣接する乳から発した線文とつながるものもある。鈕の周囲には一重の円圏が囲み，いわゆる円座鈕を形づくっている。鈕の周辺には紐と思われるものが遺存していた。鏡背の一部には赤色顔料の付着が見られるが，これは２号人骨の頭骨にみられたものが付着したのかもしれない。

なお，外区の櫛歯文帯の外側、鈕孔と直交する位置には径0.1cm程の小孔が存在する。おそらく紐を通して吊るしたことがあったのだろう。



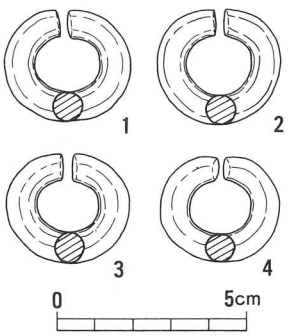
第７図　銅鏡拓影および断面図（１：１）

錫の含有量も少ないうえ鋳上りもあまり良好とは言えず，湯冷えによるのか６個の乳のうちの１個は高さも低く，その周辺の線文も明瞭ではない。

（仲山　路子）

ｂ．金環（第８図，図版11）

金環は1号および3・4号人骨の頭骨付近から各１対計４点が確認されている。すべて青銅製であり，大きさ・形状ともいずれも似通っている。本来金で被覆されていたと思われるが，３・４に部分的に認められるほかにはほとんど遺存しておらず，表面は全体に錆化が進んでいる。



第８図　金環実測図（１：２）

１および２は１号人骨の頭骨付近で検出されたものである。１は南東長側壁寄りのもので，長径3.27cm，短径2.89cm，重さは26.91ｇで断面は0.75×0.76cmを測り真円に近い形状を呈する。

２は長径3.28cm，短径2.97cm，重さは26.27ｇで断面は0.77×0.79cmを測り，やはり真円に近い形状を呈する。

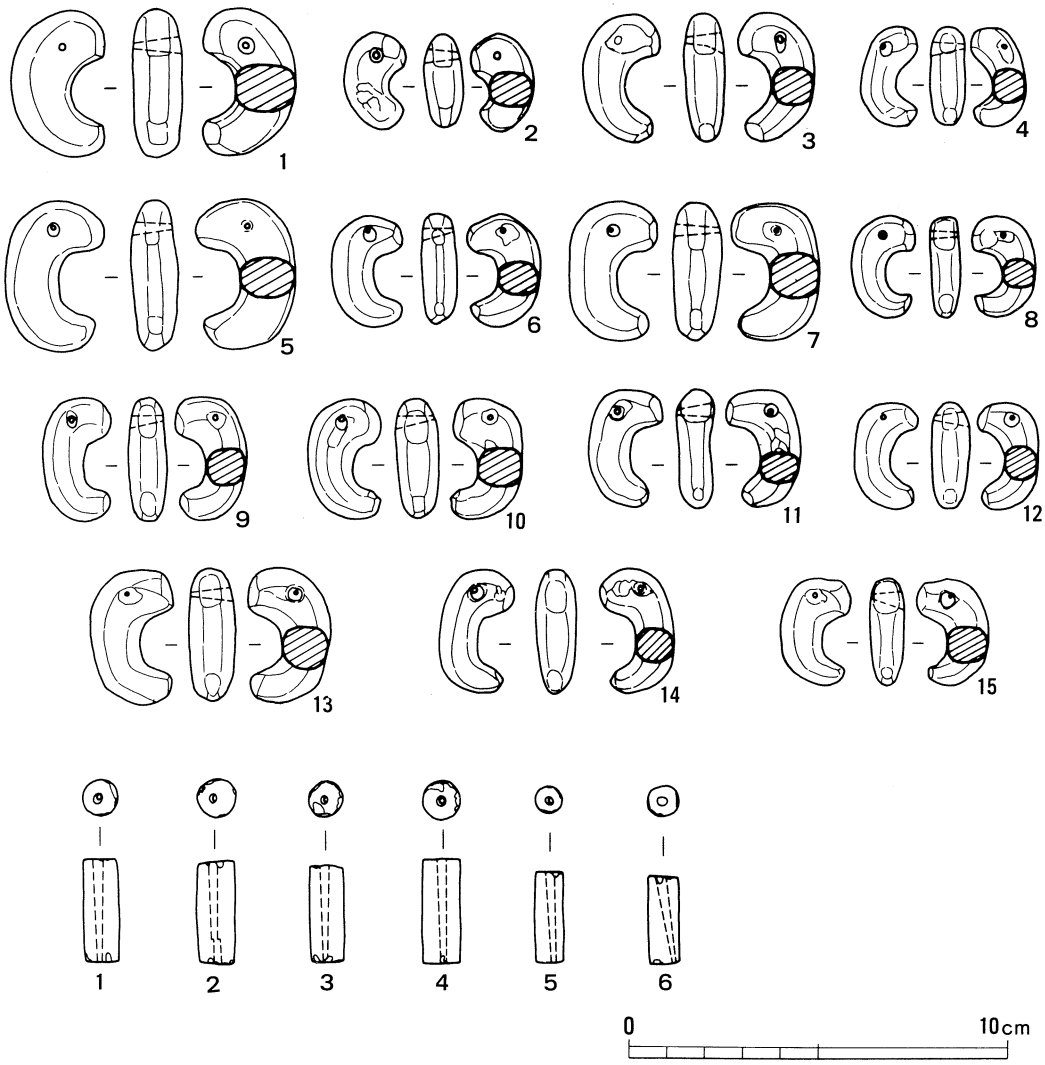
３および４は３・４号人骨の頭骨付近で検出されたもので，４が北

西長側壁寄りに出土したものである。３は長径3.23cm，短径2.90cm，重さ27.07ｇで断面は0.78×0.77cmを測る。

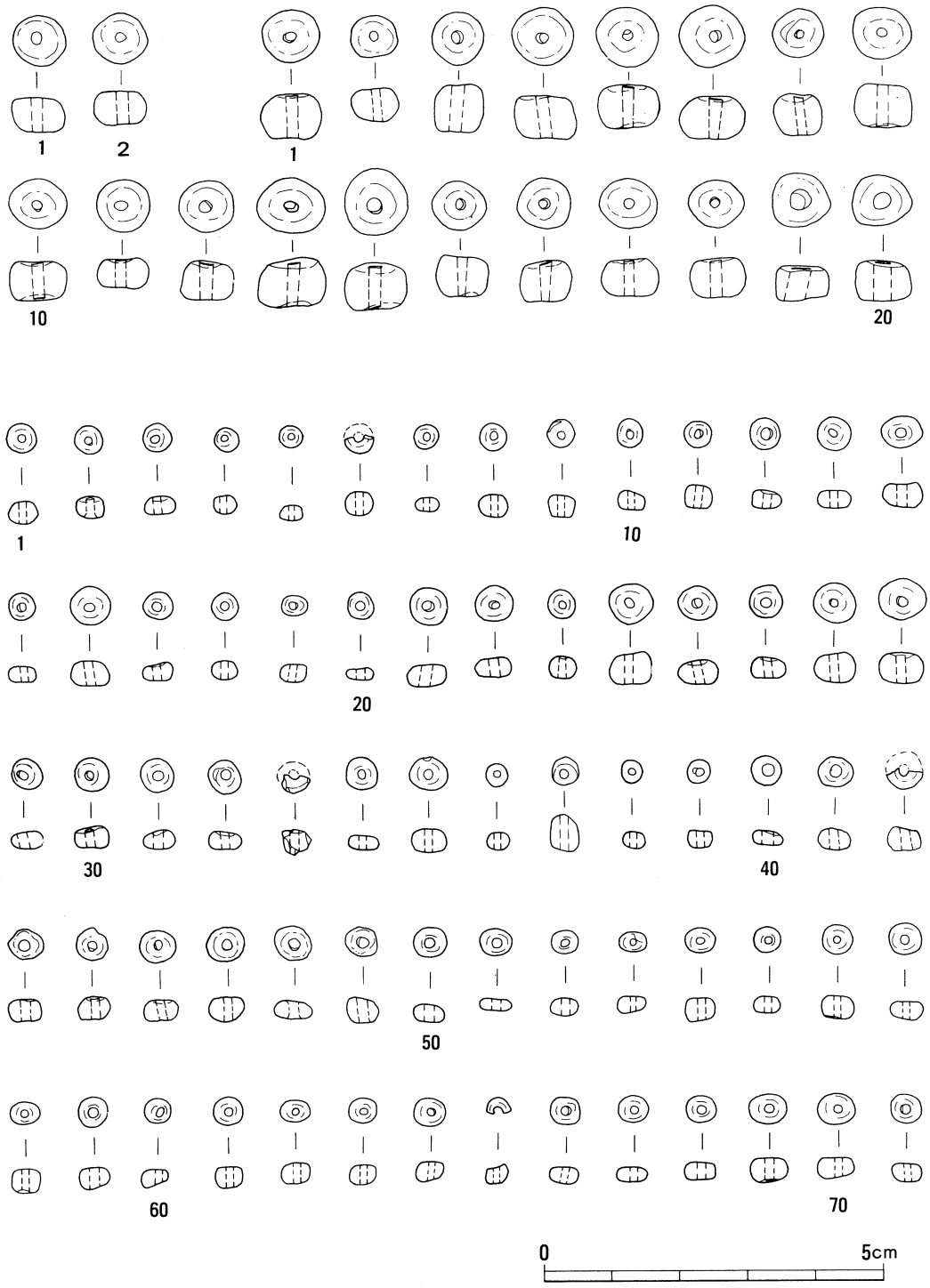
４は長径3.13cm，短径2.78cm，重さ25.94ｇで断面は0.75×0.78cmを測り，３と同様真円に近い形状を呈する。（谷中　隆）

ｃ．玉類（第９～12図，第１～５表，図版11・12）

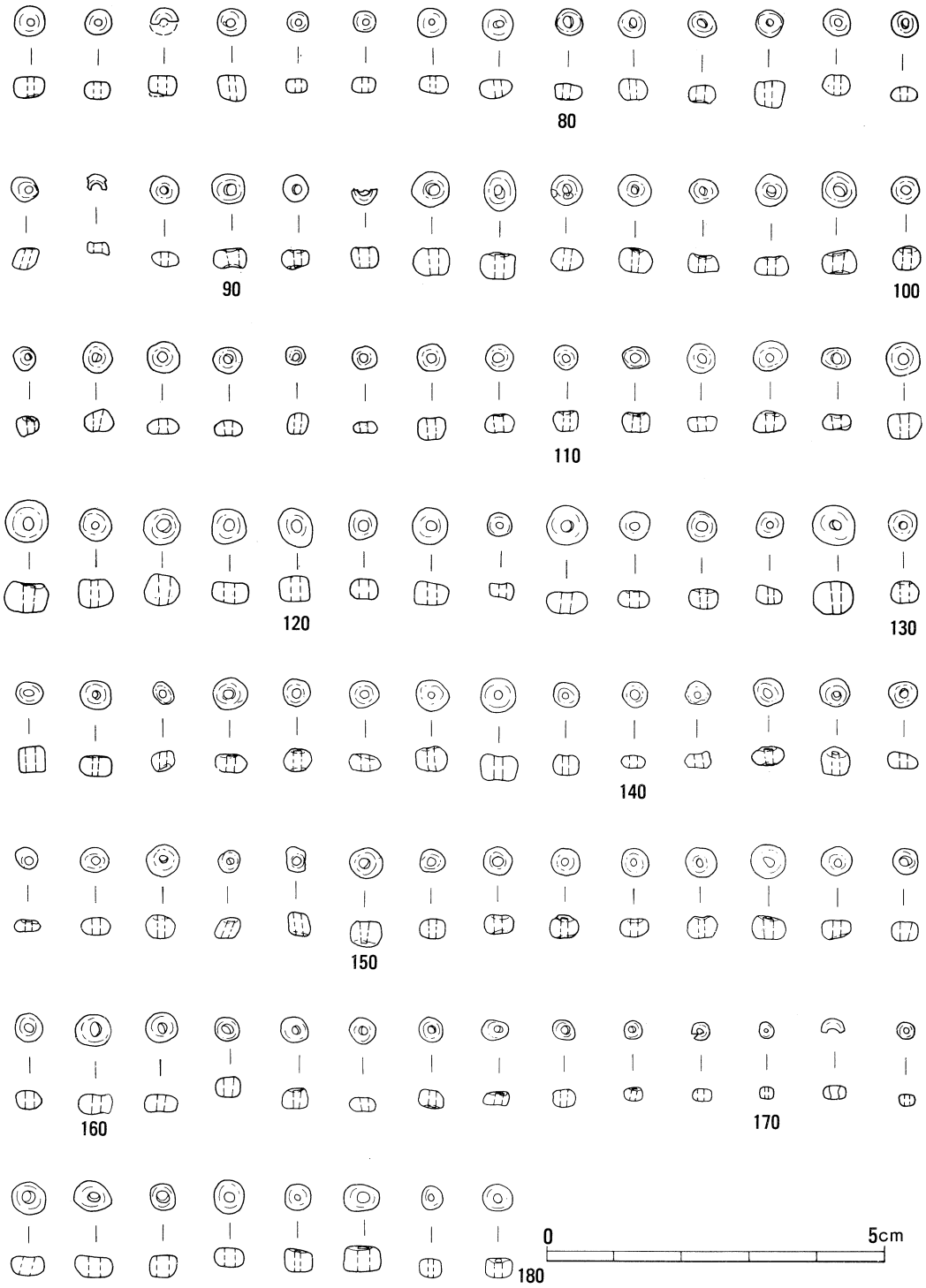
勾玉15個，管玉６個，土製丸玉２個，ガラス製丸玉20個（破片を含む），ガラス製小玉201個（破片を含む）がある。すべて３号人骨の頸部付近から集中して出土している。玉類の洗浄には超音波



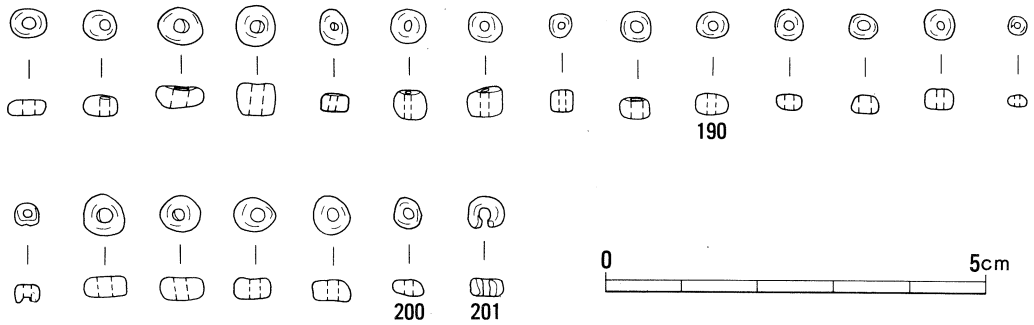
第９図　玉類実測図Ⅰ（１：２）



第10図　玉類実測図Ⅱ（上左：土製丸玉、上：ガラス製丸玉、下：ガラス製小玉）
（ガラス製丸玉９欠、ガラス製小玉42欠）（１：１）



第11図　玉類実測図Ⅲ（ガラス製小玉）（85、109、127欠）（１：１）



第12図　玉類実測図Ⅳ（ガラス製小玉）（１：１）

洗浄機を使用したが，ガラス製小玉および土製丸玉については，破損する恐れがあるため洗浄は短時間に留めた。

勾玉（第９図１～15，第１表）

瑪瑙製12個，翡翠製２個，碧玉製１個がある。穿孔はすべて片面から行われており，右側面からの穿孔と左側面からのものとは相半ばしている。瑪瑙製勾玉は白瑪瑙製（13・14）と赤瑪瑙製（４・６・８・９・15）とに大別できるが，白の中に赤が部分的に入っているものも少なくない。瑪瑙製の多くはいわゆる「コ」の字勾玉と呼ばれるものである。

碧玉製管玉（第９図１～６，第２表）

すべて濃緑色の碧玉製である。穿孔は２を除いて片面からなされており、表面は丁寧に研磨されている。長さは比較的揃っている。

土製丸玉（第10図１・２，第３表）

漆を思わせる黒色樹脂？を塗布したもので，表面は滑らかに整形されている。大きさは両者ともほぼ同様で，雲母を主体とした砂粒が混入している。

ガラス製丸玉（第10図１～20，第４表）

ほとんどの丸玉から孔の方向と平行の気泡列が確認されたことから，管状のガラスを切断して製作する，いわゆる「管切法」で作られていることがわかる。コバルト発色による群青と紺で，透明度はさほど高くない。平均値はそれぞれ直径0.867cm，厚さ0.606cm，重さ0.59ｇである。

ガラス製小玉（第10～12図１～201，第５表）

ガラス製丸玉と同様，管切法で製作されたと考えられる。コバルト発色による群青，青，紺などが主であるが，その他にも銅で発色したと思われる緑系統の色や黄色（58）があり，さらに透明度の差異がここに加わるので，多種多様なものとなる。平均値はそれぞれ直径0.441cm，厚さ0.290cm，重さ0.07ｇである。なお玉類の厚さ，長さ（勾玉は巾）を合計し，総長を想定すると112.065 cmとなる。

（國井　弘紀）

第１表　勾玉計測表

番号	材質	最大長 (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	穿孔方向	備　　考
1	翡翠	3.845	2.415	1.235	20.03	片側	
2	翡翠	2.400	1.545	0.910	5.48	片側	
3	碧玉	3.340	1.975	0.975	7.82	片側	
4	瑪瑙	2.565	1.450	0.800	3.84	片側	
5	瑪瑙	3.930	2.515	1.120	14.38	片側	
6	瑪瑙	2.840	1.810	0.840	5.67	片側	コの字形
7	瑪瑙	3.600	2.250	1.140	11.69	片側	コの字形
8	瑪瑙	2.605	1.555	0.700	3.78	片側	コの字形
9	瑪瑙	3.185	1.395	0.880	6.31	片側	コの字形
10	瑪瑙	3.115	1.915	0.990	8.14	片側	コの字形
11	瑪瑙	3.000	1.800	0.755	5.72	片側	コの字形
12	瑪瑙	2.770	1.565	0.915	4.79	片側	コの字形
13	瑪瑙	3.445	2.105	1.060	9.74	片側	コの字形
14	瑪瑙	3.235	1.285	0.875	6.34	片側	コの字形
15	瑪瑙	2.775	1.745	0.825	5.41	片側	コの字形

第２表　管玉計測表

番号	材質	長さ (cm)	直径 (cm)	質量 (g)	穿孔方向	備　　考
1	碧玉	2.735	0.930	4.49	片側	
2	碧玉	2.685	1.045	5.40	両側	
3	碧玉	2.530	0.905	4.03	片側	
4	碧玉	2.750	1.015	5.44	片側	
5	碧玉	2.400	0.760	2.51	片側	
6	碧玉	2.320	0.855	3.14	片側	穿孔方向が斜め

第３表　土製丸玉計測表

番号	色調	直径 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	備　　考
1	黒色	0.765	0.480	0.30	石英, 長石を含む
2	黒色	0.800	0.480	0.33	石英, 長石を含む

第４表　ガラス製丸玉計測表

番号	色調	直径 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	気泡	気泡列	備考
1	うす群青・半透明	0.860	0.675	0.68	有	有	
2	うす群青・半透明	0.765	0.545	0.43	有	有	
3	群青・半透明	0.765	0.700	0.61	有	有	
4	群青・半透明	0.940	0.660	0.74	有	有	
5	群青・半透明	0.880	0.655	0.72	有	有	
6	うす群青・半透明	0.990	0.610	0.78	有	有	
7	群青・半透明	0.770	0.620	0.49	有	有	
8	紺・半透明	0.880	0.645	0.68	有	有	
9	群青・半透明	—	—	0.47	有	—	破損
10	紺・半透明	0.845	0.630	0.57	有	有	
11	紺・半透明	0.786	0.455	0.40	有	有	
12	うす群青・半透明	0.830	0.530	0.50	有	有	
13	紺・半透明	1.005	0.720	0.92	有	有	
14	群青・半透明	0.975	0.660	0.83	有	有	
15	極うす群青・半透明	0.825	0.660	0.47	有	有	
16	うす群青・半透明	0.795	0.550	0.50	有	有	
17	うす群青・半透明	0.860	0.520	0.51	有	有	
18	群青・半透明	0.800	0.600	0.49	有	有	
19	群青・半透明	0.830	0.485	0.50	有	有	
20	群青・半透明	0.880	0.590	0.53	有	有	

第５表　ガラス製小玉計測表

番号	色調	直径 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	気泡	気泡列	備考
1	うす青緑・半透明	0.475	0.335	0.10	有	有	
2	群青・半透明	0.430	0.330	0.08	有	有	
3	群青・透明	0.455	0.275	0.09	有	有	
4	うす青・半透明	0.385	0.265	0.04	有	有	
5	うす青・半透明	0.355	0.225	0.03	有	有	
6	群書・半透明	0.415	0.360	0.09	有	有	
7	群青・透明	0.380	0.215	0.04	有	有	
8	うす群青・半透明	0.410	0.310	0.07	有	有	
9	うす群青・半透明	0.415	0.335	0.08	有	有	
10	うす群青・透明	0.420	0.275	0.04	有	有	
11	群青・半透明	0.405	0.365	0.08	有	有	

12	うす青緑・透明	0.470	0.255	0.04	有	有	
13	うす群青・半透明	0.485	0.270	0.09	有	有	
14	青・透明	0.590	0.385	0.14	有	有	
15	うす青・透明	0.405	0.225	0.04	有	有	
16	帯緑青・透明	0.585	0.375	0.17	有	有	
17	うす青・半透明	0.415	0.275	0.03	有	有	
18	群青・透明	0.400	0.270	0.05	有	有	
19	うす群青・透明	0.410	0.265	0000	有	有	
20	うす群青・透明	0.405	0.195	0.05	有	有	
21	青・透明	0.535	0.320	0.13	有	有	
22	帯緑青・透明	0.510	0.305	0.12	有	有	
23	群青・半透明	0.405	0.320	0.06	有	有	
24	青・透明	0.640	0.460	0.25	有	有	
25	青・透明	0.565	0.340	0.13	有	有	
26	青・透明	0.500	0.295	0.09	有	有	
27	帯緑青・透明	0.635	0.470	0.23	有	有	
28	青・透明	0.665	0.475	0.24	有	有	
29	帯緑青・透明	0.470	0.275	0.06	有	有	
30	青・透明	0.500	0.335	0.10	有	有	
31	帯緑青・透明	0.500	0.285	0.11	有	有	
32	青・透明	0.520	0.280	0.11	有	有	
33	うす青・透明	—	0.340?	0.06	有	—	破損
34	群青・半透明	0.445	0.210	0.05	有	有	破損
35	青・透明	0.580	0.345	0.14	有	有	
36	うす群青・半透明	0.365	0.275	0.05	有	有	
37	青・透明	0.425	0.400	0.10	有	有	
38	うす青・半透明	0.350	0.250	0.03	有	有	
39	群青・半透明	0.355	0.285	0.04	有	—	
40	群青・半透明	0.465	0.220	0.05	有	有	
41	帯緑青・透明	0.550	0.310	0.10	有	有	
42	青・透明	—	—	0.06	有	—	破損
43	青・透明	0.540	0.355	0.12	有	—	破損
44	紺・半透明	0.510	0.325	0.09	有	有	
45	青・透明	0.500	0.320	0.10	有	有	
46	群青・半透明	0.510	0.285	0.10	有	有	
47	群青・半透明	0.535	0.340	0.13	有	有	
48	帯緑青・透明	0.560	0.270	0.09	有	有	
49	紺・半透明	0.460	0.390	0.09	有	有	
50	青・半透明	0.470	0.265	0.07	有	有	
51	うす青緑・透明	0.435	0.160	0.03	有	有	
52	うす青・半透明	0.400	0.250	0.04	有	有	
53	濃群青・半透明	0.400	0.240	0.04	有	無	
54	濃群青・透明	0.460	0.325	0.07	有	有	
55	濃群青・半透明	0.320	0.245	0.04	有	無	
56	濃群青・半透明	0.485	0.335	0.10	有	有	
57	濃群青・半透明	0.460	0.250	0.07	有	有	
58	黄・不透明	0.440	0.345	0.08	有	—	

59	うす青緑・半透明	0.470	0.315	0.07	有	有	
60	うす緑・透明	0.390	0.270	0.04	有	有	
61	濃群青・半透明	0.425	0.300	0.06	有	有	
62	青・透明	0.445	0.320	0.06	有	有	
63	青・透明	0.415	0.290	0.05	有	無	
64	うす群青・透明	0.415	0.255	0.05	有	有	
65	うす青・透明	—	—	0.02	有	—	破片
66	緑・透明	0.460	0.240	0.06	有	有	
67	うす群青・透明	0.430	0.215	0.05	有	有	
68	青・透明	0.430	0.245	0.05	有	有	
69	青・透明	0.535	0.355	0.11	有	—	
70	青・透明	0.530	0.295	0.11	有	有	
71	乳明緑・不透明	0.440	0.280	0.07	有	—	
72	青・透明	0.475	0.300	0.09	有	有	
73	群青・透明	0.390	0.270	0.06	有	有	
74	うす青・透明	0.430	0.290	0.02	有	無	破片
75	群青・透明	0.415	0.380	0.15	有	有	
76	乳明緑・不透明	0.325	0.200	0.02	有	—	
77	青・透明	0.330	0.210	0.01	有	有	
78	うす群青・透明	0.425	0.265	0.04	有	有	
79	緑・透明	0.440	0.265	0.04	有	有	
80	群青・半透明	0.400	0.230	0.03	有	有	
81	群青・半透明	0.430	0.330	0.07	有	—	
82	青・透明	0.435	0.290	0.04	有	有	
83	うす青・半透明	0.385	0.370	0.08	有	有	
84	青・透明	0.460	0.290	0.06	有	有	
85	うす青・透明	—	—	0.01	—	—	破片
86	うす青・半透明	0.415	0.225	0.05	有	有	
87	うす青・透明	0.430	0.320	0.05	有	有	
88	うす青・透明	0.310	0.190	0.04	有	—	破片
89	群青・半透明	0.410	0.270	0.06	有	有	
90	うす青・透明	0.480	0.290	0.06	有	有	
91	うす青・半透明	0.400	0.245	0.05	有	有	
92	うす青・半透明	0.370	0.290	0.09	有	—	破片
93	濃群青・半透明	0.510	0.380	0.11	有	有	
94	青・透明	0.560	0.360	0.12	有	有	
95	群青・半透明	0.460	0.300	0.07	有	有	
96	群青・半透明	0.460	0.400	0.06	有	有	
97	群青・半透明	0.410	0.240	0.04	有	有	
98	うす青・透明	0.500	0.290	0.10	有	有	
99	帯緑青・半透明	0.565	0.320	0.12	有	有	
100	群青・透明	0.405	0.340	0.05	有	有	
101	群青・半透明	0.405	0.295	0.06	有	有	
102	帯緑青・半透明	0.505	0.340	0.11	有	有	
103	うす青・透明	0.465	0.245	0.06	有	有	
104	うす青・透明	0.410	0.235	0.03	有	有	
105	うす緑・半透明	0.310	0.315	0.02	有	有	

106	極うす緑・半透明	0.370	0.160	0.02	有	有	
107	群青・半透明	0.440	0.310	0.07	有	有	
108	うす青・透明	0.410	0.240	0.04	有	有	
109	極うす緑・透明	—	—	—	有	—	破片
110	うす青・透明	0.360	0.300	0.05	有	有	
111	群青・半透明	0.400	0.290	0.05	有	有	
112	うす青・透明	0.430	0.255	0.09	有	有	破損
113	青・透明	0.500	0.310	0.09	有	有	
114	うす青・半透明	0.450	0.240	0.03	有	—	
115	うす帯青緑・透明	0.550	0.375	0.14	有	有	
116	帯青緑・透明	0.620	0.440	0.24	有	有	
117	青・透明	0.505	0.400	0.13	有	有	
118	乳青・半透明	0.560	0.480	0.16	有	有	
119	群青・半透明	0.500	0.300	0.10	有	有	
120	帯緑青・透明	0.510	0.360	0.14	有	有	
121	うす青・透明	0.430	0.290	0.05	有	有	
122	帯緑青・透明	0.500	0.320	0.12	有	有	
123	うす緑・透明	0.380	0.240	0.01	有	有	
124	群青・半透明	0.540	0.300	0.11	有	有	
125	群青・半透明	0.460	0.230	0.04	有	有	
126	群青・半透明	0.455	0.340	0.08	有	有	
127	うす緑・透明	—	—	0.03	有	—	破片
128	群青・半透明	0.400	0.250	0.04	有	—	
129	うす青・半透明	0.575	0.470	0.19	有	有	
130	群青・半透明	0.450	0.310	0.08	有	有	
131	乳明緑・半透明	0.410	0.395	0.09	有	有	
132	群青・半透明	0.430	0.300	0.06	有	有	
133	群青・半透明	0.380	0.290	0.05	有	有	
134	群青・半透明	0.460	0.285	0.07	有	有	
135	群青・半透明	0.415	0.280	0.04	有	有	
136	うす青・半透明	0.475	0.265	0.06	有	有	
137	うす群青・半透明	0.500	0.370	0.12	有	—	
138	青・透明	0.500	0.270	0.12	有	有	
139	群青・半透明	0.370	0.290	0.05	有	有	
140	うす群青・半透明	0.360	0.220	0.02	有	有	
141	群青・透明	0.400	0.240	0.04	有	有	
142	うす帯緑青・透明	0.475	0.280	0.05	有	有	
143	群青・透明	0.430	0.415	0.11	有	有	
144	うす群青・半透明	0.420	0.245	0.04	有	有	
145	うす帯緑青・透明	0.355	0.200	0.02	有	有	
146	群青・透明	0.415	0.255	0.04	有	有	
147	群青・半透明	0.470	0.335	0.08	有	有	
148	群青・半透明	0.350	0.290	0.04	有	有	
149	うす青・半透明	0.330	0.320	0.05	有	有	
150	濃群青・半透明	0.480	0.310	0.09	有	有	
151	青・透明	0.380	0.275	0.05	有	有	
152	うす青・半透明	0.425	0.265	0.06	有	有	
153	うす群青・半透明	0.415	0.320	0.06	有	有	

154	乳明緑うす青・半透明	0.415	0.275	0.05	有	有	
155	うす群青・半透明	0.460	0.315	0.08	有	—	
156	うす群青・半透明	0.520	0.340	0.11	有	有	
157	うす青・透明	0.445	0.280	0.05	有	有	
158	うす青・透明	0.375	0.255	0.04	有	有	
159	群青・半透明	0.375	0.215	0.05	有	有	
160	うす青・透明	0.510	0.280	0.08	有	有	
161	群青・半透明	0.430	0.255	0.06	有	有	
162	青・透明	0.370	0.310	0.05	有	有	
163	青・透明	0.420	0.300	0.04	有	有	
164	うす青・透明	0.375	0.160	0.02	有	有	
165	うす青・透明	0.355	0.270	0.03	有	有	
166	うす青・透明	0.360	0.195	0.02	有	有	
167	青・透明	0.360	0.220	0.04	有	有	
168	群青・透明	0.300	0.170	—	有	—	
169	群青・透明	0.285	0.180	0.01	—	—	
170	乳明緑・半透明	0.255	0.200	0.01	有	有	
171	うす青・透明	0.345	0.225	0.01	有	無	
172	乳明緑・半透明	0.265	0.180	0.01	有	—	
173	帯緑青・透明	0.520	0.260	0.07	有	有	位置不明
174	青・透明	0.585	0.285	0.10	有	有	位置不明
175	青・透明	0.400	0.420	0.06	有	有	位置不明
176	帯緑青・透明	0.435	0.200	0.06	有	有	位置不明
177	青・透明	0.400	0.360	0.06	有	有	位置不明
178	群青・半透明	0.525	0.390	0.10	有	無	位置不明
179	群青・半透明	0.370	0.280	0.03	有	有	位置不明
180	うす青・透明	0.435	0.295	0.06	有	有	位置不明
181	うす青・透明	0.440	0.200	0.03	有	無	位置不明
182	群青・半透明	0.405	0.290	0.03	有	無	位置不明
183	帯緑青・透明	0.570	0.265	0.09	有	有	位置不明
184	帯緑青・透明	0.500	0.420	0.16	有	有	位置不明
185	うす青・透明	0.430	0.240	0.05	有	有	位置不明
186	帯緑青・透明	0.460	0.360	0.09	有	有	位置不明
187	帯緑青・透明	0.455	0.400	0.12	有	有	位置不明
188	うす緑・半透明	0.300	0.280	0.02	有	有	位置不明
189	群青・半透明	0.395	0.265	0.05	有	—	位置不明
190	群青・半透明	0.400	0.240	0.03	有	有	位置不明
191	うす緑・半透明	0.360	0.210	0.03	有	有	位置不明
192	うす青・透明	0.360	0.230	0.05	有	有	位置不明
193	群青・半透明	0.375	0.260	0.06	有	無	位置不明
194	うす群青・半透明	0.290	0.160	0.01	有	無	位置不明
195	うす群青・半透明	0.330	0.215	—	有	無	位置不明
196	群青・半透明	0.540	0.290	0.11	有	無	位置不明
197	帯緑青・透明	0.490	0.295	0.08	有	有	位置不明
198	帯緑青・透明	0.525	0.265	0.08	有	—	位置不明
199	帯緑青・透明	0.520	0.260	0.09	有	有	位置不明
200	うす青・透明	0.385	0.180	0.02	有	有	位置不明
201	青・透明	0.470	0.225	0.05	有	有	位置不明

d．直刀（第13・14図、図版13・14）

本古墳から出土した直刀は２振で，いずれも南東長側壁際の北東寄りの位置から鋒を南西に向けて出土している。

１は側壁とほぼ平行に刃をやや上にした状態で出土した。茎尻が少々欠けているほかはほぼ完形で，遺存状態は極めて良好である。

鉄製で平棟平造りであり，鋒はふくらを有する。刀身には木質が少量ではあるが残存しており，断面は二等辺三角形状を呈する。棟関はなく，刃関は斜角に約70度の角度を持ちながら茎へと接続する。鎺の近くには刃関孔が存在する。茎尻から8.8cm及び3.6cmの位置には目釘孔が確認されており，茎全体に木質が残存している。目釘孔の中には目釘が遺存しているが，これは鉄製ではなく木製であると思われる。茎尻の形状は一部欠損しているため定かではないが，おそらく隅抉尻であろうと考えられる。

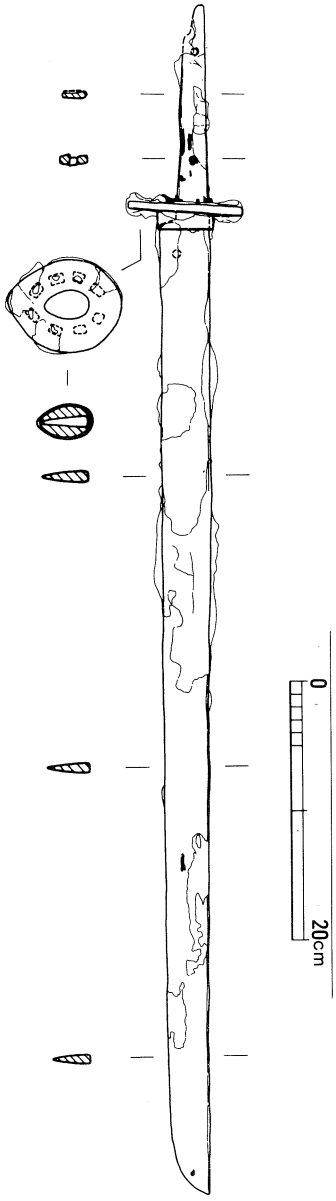
鐔は倒卵形で，八窓を有する。鐔の内側にはやはり倒卵形の鎺が銹着している。

各部の計測値は以下の通りである。

全長91.94cm，刀身長74.26cm，刀身幅は鋒に近い位置で3.04cm，関付近で3.76cm，棟幅は鋒に近い位置で0.82cm，関付近で0.84cmを測る。刃関の深さは1.33cmで，刃関孔の径は0.64cm，茎長17.68cm，茎幅は茎のほぼ中央で2.09cm，目釘孔の径は茎尻に近いものから0.42cm，0.46cmを測る。

鐔は長径8.76cm，短径7.37cm，内側で長径3.30cm，短径2.36cm，厚さは縁辺部で0.47cmを測る。鎺は長径で4.20cm，短径で2.81cmを測る。

２は南東長側壁に沿った北東寄りの位置で，１の直刀に沿うように出土した。茎部の先端を欠損しているほかは，遺存状態は極めて良好である。

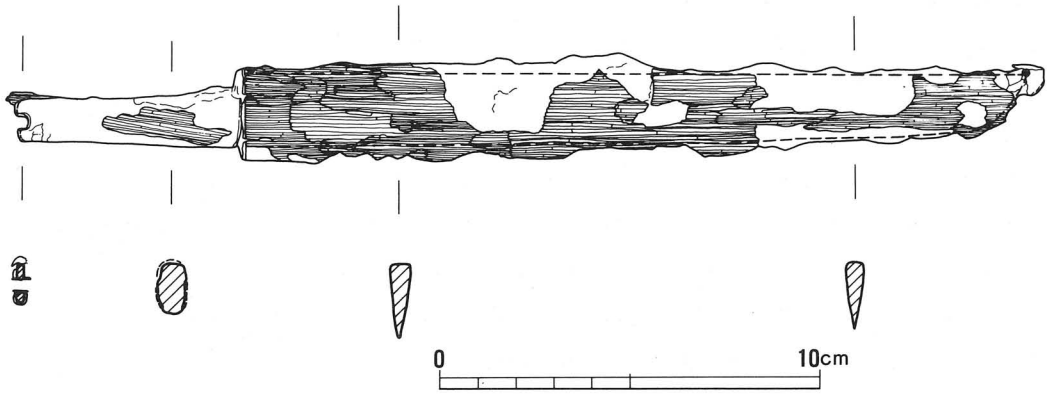


第13図　直刀実測図Ⅰ（１：６）

鉄製で平棟平造りであり、鋒はわずかなふくらを有する。刀身の断面形は二等辺三角形を呈し、全面に木質が残存している。両関で棟関の方が深く，棟関・刃関とも直角である。茎部には把の木質が良好に残存しており，把の表面は木材を丁寧に整形してあることが知られる。目釘孔は茎尻に一箇所確認されているが目釘は遺存していない。

各部の計測値は以下の通りである。

現存長26.77cm，刀身長21.87cm，刀身幅は関付近で1.99cm，棟幅は関付近で0.48cmを測る。茎の



第14図　直刀実測図II（１：２）

現存部長は4.90cm，茎幅は関付近で1.68cm，茎尻近くで0.98cm，目釘孔の径は0.32cmを測る。

e．鉄　鏃（第15～18図，第６表，図版15・16）

鉄鏃は総数105点出土しており，その出土状態から３群に分けることができる。

a群（第15図１・２，第６表）

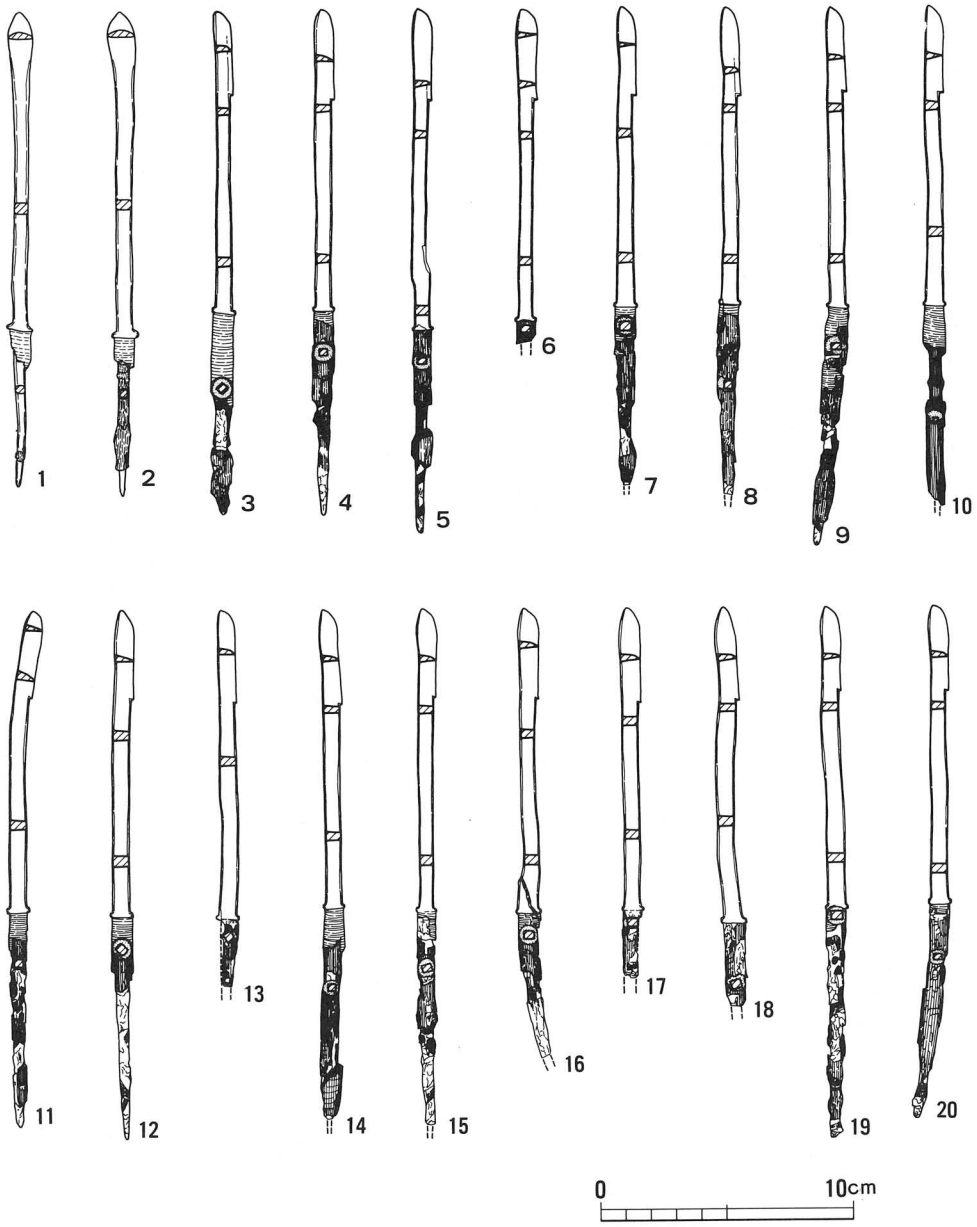
北西長側壁に沿った北東寄りの位置で出土した一群である。計2本の鉄鏃が側壁と平行に，鋒を北東に向けて床面からやや浮いた状態で出土した。２本とも完形で同じ拵えの長頸鏃であり，後藤守一氏による分類では「棘箆被鑿箭式」とされるものである。鏃身部は片丸造であり，刃は鏃身の両側につけられているがその範囲は明確ではない。箆被部は細い四角柱状で棘状突起を持つ。鏃身部と箆被部の境目は明瞭でない。茎には矢柄とそれを固定した樹皮の一部が残存している。全長は190㎜前後である。

b群（第15・16図３～40，第６表）

石棺のほぼ中央南東長側壁寄りの位置で出土した一群であり，総数38点ある。すべて南東長側壁に沿って鋒を北東に向け，そのほとんどが一括して束ねられた状態で出土した。すべて片刃式の長頸鏃で同じ拵えであり，後藤守一氏による分類では「棘箆被片関片刃箭式」とされるものである。鏃身部は片切刃造とわかるもの（第15～16図3･8･30）が３本ある。他の鏃も同様と思われるが錆化のため詳細は不明である。関は直角で深さは1.1㎜～2.0㎜である。箆被部は棘状突起を有し，細い四角柱状を呈するが，断面は関のある側がやや狭い台形になっている。茎部には矢柄とそれを固定した樹皮が比較的良く残っている。全長は完形のもので201～214㎜程度である。

c群（第17・18図41～105，第６表）

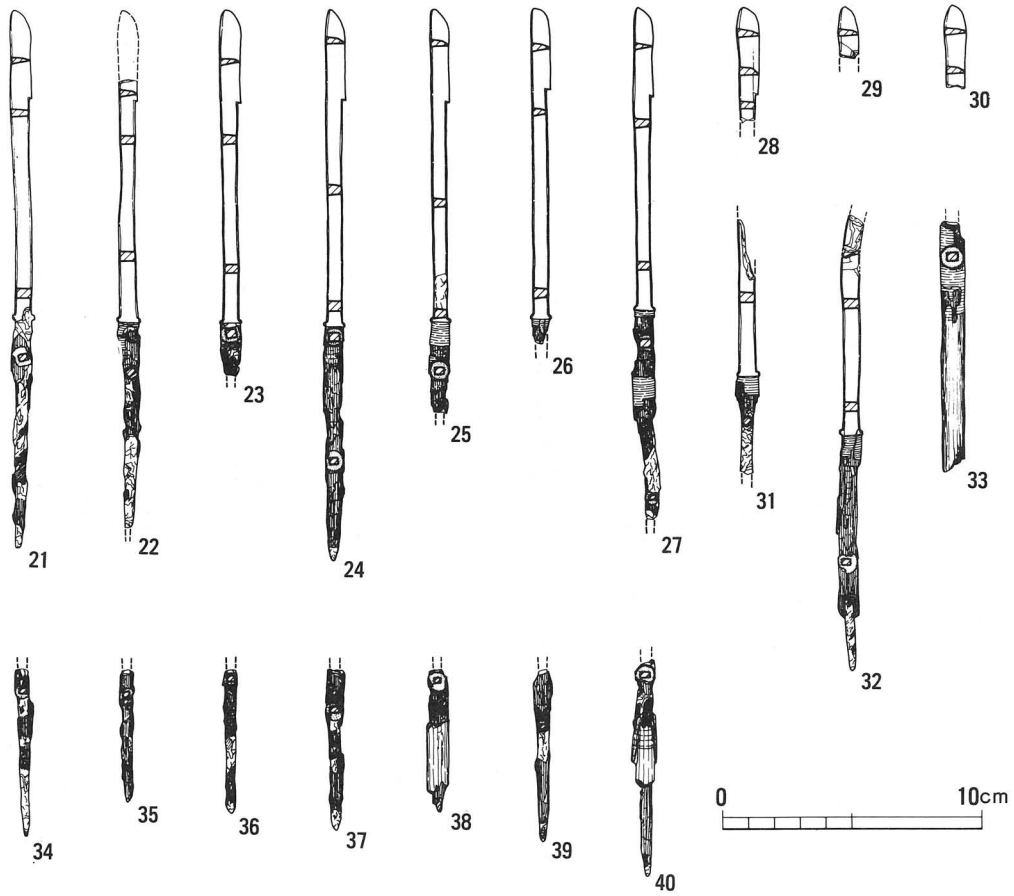
石棺南西側の南東長側壁寄りの位置で出土した一群であり，総数65点ある。攪乱のため鋒の向く方向はまちまちであったが，概ね南西側に向いていることが看取された。出土した鉄鏃は長頸鏃を主体としているが，短頸の鏃も数本ある。また長頸鏃も鏃身部のつくりの違いにより，片刃式のものと両刃



第15図　鉄鏃実測図Ⅰ（1：3）

式のものとに大別できる。

短頸の鏃は5本あり，c群のなかでも南東長側壁寄りの位置からまとまって出土している。いずれもほぼ同じ拵えで，後藤守一氏の分類では「箆被広鋒三角形式」とされるものである。鏃身部は両丸造で長さは55㎜前後であるが，鏃身の下端において脹らみを持つもの（第17図42～45）と直線的に

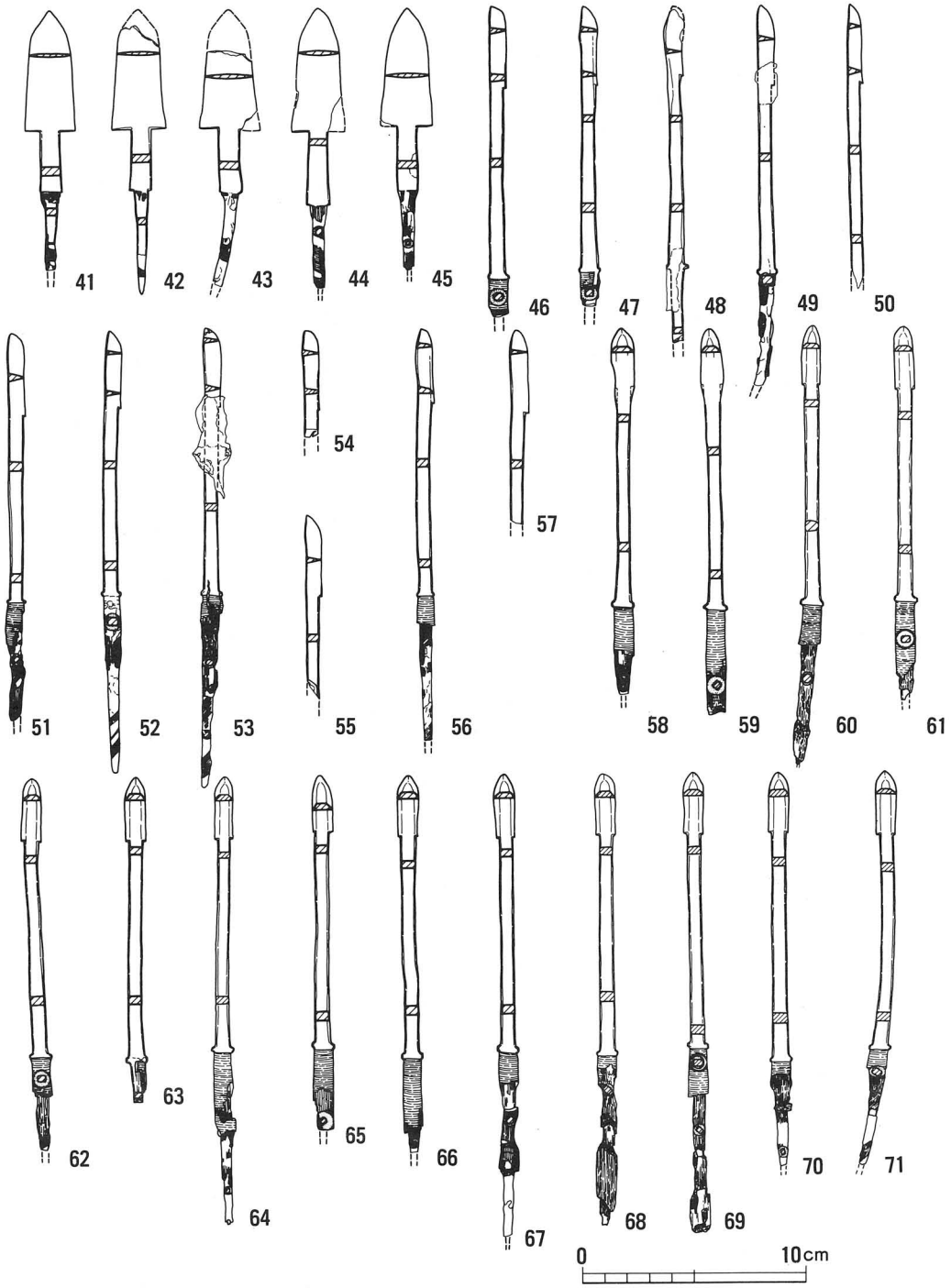


第16図　鉄鏃実測図II（１：３）

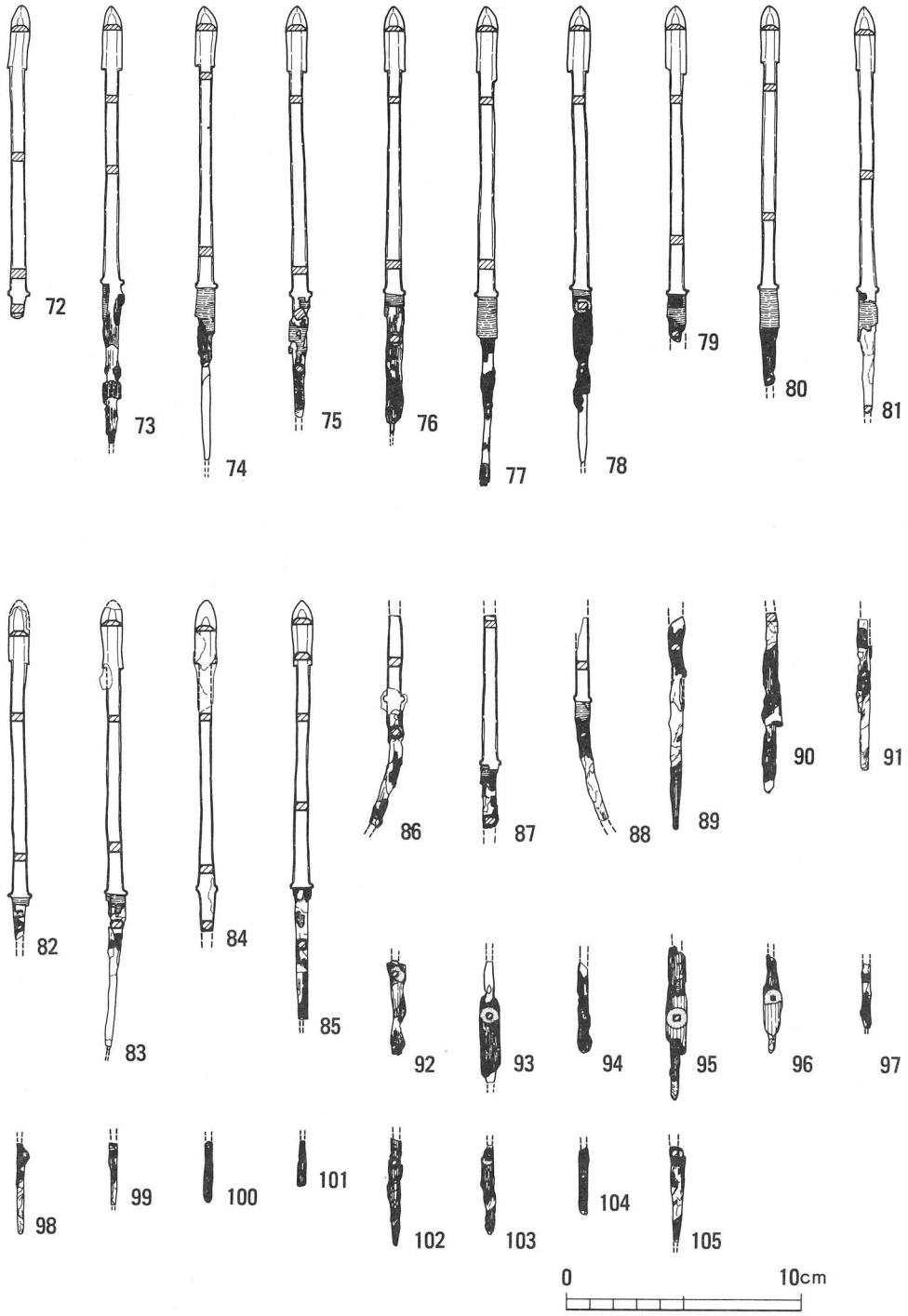
かえりへとつながるもの（第17図41）とがある。箆被部は３cmに満たないほどの短いもので，断面長方形の四角柱状を呈する。茎部もその基部においては断面は長方形で，先端に行くにしたがって正方形に近くなる。茎には矢柄の木質がわずかに残存している。

長頸鏃のうち片刃式のものは12本あり，c群のなかでも南東長側壁寄りに多く出土している。後藤氏の分類では「棘箆被片関片刃箭式」とされるものである。鏃身部の造りは平刃のもの（46・50・51）が多く，片切刃造とわかるものは二本のみであるが，錆化が激しく判別が困難なものもある。刃は鋒から関部までつけられているものが大部分を占めるが，関部に近い位置に刃が付けられていないもの（46・54）がいくつか見られる。47および48は鋒に近い背の部分にやや脹らみを持っている。鏃身の最大幅は関部にあるものが多い。箆被部は細い四角柱状を呈するが，断面形は関のある側がやや狭い台形になっている。茎には矢柄とそれを固定した樹皮が残存している。

両刃式の鉄鏃は28点あり，c群のなかでは主流を占めている。すべて同じ型式で，鏃身部はいわゆる「剣身形」を呈し，後藤氏の分類では「棘箆被柳葉式」とされるものである。鏃身部の造りは錆化のため判別が困難なものもあったが，片切刃造を基調としている。鏃身の最大幅は関部にある



第17図　鉄鏃実測図Ⅲ（１：３）



第18図　鉄鏃実測図Ⅳ（１：３）

第6表　鉄鏃計測表

(cm)

番号	全長(遺存長)	かえり(関)	鏃身部			箆被部			(a)+(b)	茎部			備考
			長さ(a)	副	厚さ	長さ(b)	副	厚さ		長さ	副	厚さ	
1	18.88	—	1.98	0.98	0.29	10.67	0.57	0.41	12.65	6.23	0.39	0.34	
2	19.34	—	2.00	1.02	0.32	10.94	0.57	0.45	12.94	6.40	0.32	0.30	
3	20.13	0.13	3.41	0.76	0.34	8.72	0.55	0.41	12.13	8.00	0.47	0.43	
4	20.16	0.13	3.68	0.79	0.45	8.41	0.59	0.44	12.09	8.07	0.34	0.30	
5	20.88	0.15	3.77	0.78	0.33	9.10	0.52	0.41	12.87	8.01	0.40	0.41	
6	(13.29)	0.15	3.70	0.79	0.41	8.84	0.57	0.39	12.54	(0.75)	0.39	0.30	
7	(19.03)	0.14	3.54	0.70	0.31	8.29	0.55	0.53	11.83	(7.20)	0.37	0.37	
8	(19.43)	0.15	3.53	0.76	0.34	8.36	0.54	0.44	11.89	(7.54)	0.38	0.33	
9	21.58	0.20	3.54	0.77	0.34	8.51	0.57	0.50	12.05	9.53	0.40	0.26	
10	(19.93)	0.13	3.59	0.76	0.36	8.50	0.63	0.48	12.09	(7.84)	0.24	0.19	
11	20.55	0.12	3.54	0.74	0.47	8.41	0.60	0.48	11.95	8.60	0.39	0.36	
12	21.10	0.16	3.60	0.77	0.33	8.56	0.61	0.45	12.16	8.94	0.43	0.36	
13	(15.00)	0.11	3.68	0.69	0.26	8.67	0.58	0.48	12.35	(2.65)	0.46	0.34	
14	(20.28)	0.13	3.82	0.79	0.31	8.10	0.62	0.39	11.92	(8.36)	0.33	0.31	
15	(20.51)	0.14	3.50	0.68	0.36	8.51	0.54	0.48	12.01	(8.50)	0.41	0.29	
16	(18.00)	0.17	3.68	0.77	0.36	8.42	0.60	0.44	12.10	(5.90)	0.43	0.32	
17	(14.73)	0.16	3.90	0.79	0.39	8.07	0.63	0.49	11.97	(2.76)	0.46	0.32	
18	(15.94)	0.16	3.77	0.77	0.36	8.90	0.61	0.48	12.67	(3.27)	0.49	0.43	
19	21.15	0.14	3.41	0.76	0.38	8.63	0.62	0.54	12.04	9.11	0.47	0.36	
20	20.65	0.15	3.48	0.76	0.38	8.48	0.59	0.44	11.96	8.69	0.35	0.27	
21	20.89	0.14	3.52	0.76	0.38	8.50	0.62	0.50	12.02	8.87	0.36	0.23	
22	(17.37)	0.11	(0.97)	0.75	0.36	8.54	0.64	0.41	(9.51)	(7.86)	0.44	0.28	
23	(14.16)	0.14	3.71	0.79	0.30	8.36	0.61	0.44	12.07	(2.09)	0.42	0.36	
24	21.34	0.12	3.50	0.74	0.33	8.82	0.62	0.44	12.32	9.02	0.34	0.29	
25	(15.61)	0.16	3.63	0.70	0.29	8.42	0.54	0.38	12.05	(3.56)	0.37	0.30	
26	(13.02)	0.13	3.34	0.73	0.36	8.74	0.60	0.42	12.08	(0.94)	0.48	0.36	
27	(19.85)	0.12	3.50	0.80	0.37	8.30	0.68	0.43	11.80	(8.05)	0.48	0.37	
28	(4.42)	0.15	3.43	0.84	0.36	(0.99)	0.60	0.46	(4.42)	—	—	—	
29	(2.00)	—	(2.00)	0.81	0.37	—	—	—	(2.00)	—	—	—	
30	(3.23)	—	(3.23)	0.92	0.41	—	—	—	(3.23)	—	—	—	
31	(9.97)	—	—	—	—	(5.69)	0.54	0.40	(5.69)	(4.28)	0.36	0.31	
32	(17.64)	—	—	—	—	(8.34)	0.63	0.49	(8.34)	9.30	0.37	0.23	
33	(7.95)	—	—	—	—	—	—	—	—	(7.95)	0.44	0.34	矢柄の遺存度良好
34	(6.48)	—	—	—	—	—	—	—	—	(6.48)	0.50	0.34	
35	(5.09)	—	—	—	—	—	—	—	—	(5.09)	0.39	0.32	
36	(5.50)	—	—	—	—	—	—	—	—	(5.50)	0.42	0.36	
37	(6.24)	—	—	—	—	—	—	—	—	(6.24)	0.38	0.30	
38	(5.54)	—	—	—	—	—	—	—	—	(5.54)	0.33	0.30	
39	(6.64)	—	—	—	—	—	—	—	—	(6.64)	0.39	0.35	
40	(8.41)	—	—	—	—	—	—	—	—	(8.41)	0.49	0.42	

(cm)

番号	全長(遺存表)	かえり(関)	鏃身部			箆被部			(a)+(b)	茎部			備考
			長さ(a)	幅	厚さ	長さ(b)	幅	厚さ		長さ	幅	厚さ	
41	(11.64)	0.67	5.43	2.27	0.30	2.61	1.11	0.61	8.04	(3.60)	0.55	0.45	
42	(12.03)	0.72	(4.79)	2.56	0.27	2.71	0.93	0.64	(7.50)	4.53	0.62	0.55	
43	(10.52)	0.82	(3.54)	(2.65)	0.32	2.74	1.07	0.58	(6.28)	(4.24)	0.49	0.45	
44	(12.54)	0.74	5.57	(2.30)	0.21	3.07	0.85	0.53	8.64	(3.90)	0.49	0.48	
45	(11.72)	0.75	5.33	(2.40)	0.29	2.79	0.93	0.50	8.12	(3.60)	0.69	0.50	
46	(13.94)	0.17	3.78	0.74	0.28	8.44	0.57	0.46	12.22	(1.72)	0.46	0.46	
47	(13.42)	0.15	3.51	0.76	0.34	8.31	0.61	0.47	11.82	1.60	0.43	0.46	
48	(14.96)	0.17	(3.01)	0.74	0.34	8.63	0.57	0.43	(11.64)	(3.32)	0.47	0.26	
49	(17.14)	0.13	3.58	0.77	0.38	8.51	0.56	0.45	12.09	(5.05)	0.53	0.40	
50	(12.77)	0.12	3.56	0.73	0.38	(9.21)	0.61	0.45	(12.77)	—	—	—	
51	(17.40)	0.11	3.67	0.73	0.35	8.39	0.62	0.47	12.06	(5.34)	0.31	0.29	
52	19.83	0.11	3.52	0.70	0.29	8.32	0.59	0.40	11.84	7.99	0.49	0.34	
53	20.51	0.13	3.48	0.79	0.40	8.47	0.56	0.47	11.95	8.56	0.32	0.27	
54	(4.74)	0.09	3.51	0.76	0.32	(1.23)	0.67	0.45	(4.74)	—	—	—	
55	(8.26)	0.12	3.57	0.67	0.28	(4.69)	0.55	0.51	(8.26)	—	—	—	
56	(18.45)	0.19	3.31	0.78	0.39	8.36	0.59	0.45	11.67	(6.78)	0.44	0.22	
57	(8.72)	0.16	3.70	0.76	0.35	(5.02)	0.60	0.50	(8.72)	—	—	—	
58	(16.25)	0.18	2.66	0.93	0.32	9.73	0.69	0.45	12.39	(3.86)	0.23	0.25	
59	(17.24)	0.24	2.60	0.95	0.32	10.03	0.57	0.38	12.63	(4.61)	0.35	0.33	
60	(19.67)	0.11	2.69	0.85	0.29	9.84	0.53	0.41	12.53	(7.14)	0.20	0.16	
61	(16.66)	0.14	2.80	0.88	0.27	9.50	0.60	0.41	12.30	(4.36)	0.33	0.29	
62	(16.64)	0.13	2.88	0.92	0.32	9.62	0.66	0.41	12.50	(4.14)	0.33	0.34	
63	(14.52)	0.15	2.91	0.94	0.29	9.86	0.65	0.53	12.77	(1.75)	0.44	0.31	
64	20.20	0.12	2.83	0.82	0.33	9.66	0.58	0.42	12.49	7.71	0.21	0.23	
65	(15.92)	0.12	2.69	0.91	0.30	9.63	0.67	0.47	12.32	(3.60)	0.31	0.27	
66	(16.81)	0.16	2.78	0.90	0.32	9.89	0.58	0.49	12.67	(4.14)	0.37	0.33	
67	20.61	0.13	2.94	0.81	0.31	9.49	0.55	0.44	12.43	8.18	0.38	0.33	
68	20.20	0.15	2.77	0.88	0.31	9.84	0.54	0.38	12.61	7.59	0.36	0.32	
69	20.60	0.16	2.76	0.88	0.35	9.59	0.53	0.37	12.35	8.25	0.34	0.35	
70	(17.62)	0.13	2.74	0.93	0.32	10.31	0.60	0.49	13.05	(4.57)	0.26	0.33	
71	(17.68)	0.11	2.82	0.91	0.26	9.63	0.63	0.45	12.45	(5.23)	0.25	0.26	
72	(13.40)	0.16	2.75	0.87	0.26	9.83	0.53	0.48	12.58	(0.82)	0.50	0.35	
73	(18.67)	0.11	2.70	0.82	0.25	9.18	0.59	0.35	11.88	(6.79)	0.25	0.22	
74	(19.39)	0.16	2.65	0.95	0.31	9.43	0.54	0.44	12.08	(7.31)	0.34	0.31	
75	(17.55)	0.13	2.85	0.92	0.31	9.61	0.56	0.43	12.46	(5.09)	0.44	0.40	
76	(18.24)	0.13	2.74	0.86	0.22	9.50	0.49	0.29	12.24	(6.00)	0.44	0.30	
77	20.41	0.15	3.10	0.90	0.30	9.31	0.59	0.41	12.41	8.00	0.27	0.19	左右の関の差0.38
78	(19.44)	0.18	2.85	0.86	0.21	9.30	0.50	0.41	12.15	(7.29)	0.36	0.36	
79	(14.33)	0.18	2.92	0.86	0.26	9.38	0.50	0.40	12.30	(2.03)	0.36	0.30	左右の関の差0.17
80	(16.21)	0.11	2.48	0.81	0.26	9.69	0.53	0.33	12.17	(4.04)	0.31	0.31	

(cm)

番号	全長(遺存長)	かえり(関)	鏃身部			箆被部			(a)+(b)	茎部			備考
			長さ(a)	幅	厚さ	長さ(b)	副	厚さ		長さ	副	厚さ	
81	(17.36)	0.14	2.84	0.86	0.29	9.42	0.54	0.46	12.26	(5.10)	0.45	0.34	
82	(14.20)	0.15	(2.43)	0.89	0.25	10.00	0.53	0.45	(12.43)	(1.77)	0.44	0.35	
83	(18.94)	0.12	(2.66)	0.93	0.26	9.64	0.60	0.41	12.30	(6.64)	0.50	0.30	
84	(14.16)	0.18	2.66	0.91	0.21	9.76	0.49	0.44	12.42	(1.74)	0.43	0.38	
85	(18.10)	0.16	2.81	0.88	0.30	9.47	0.52	0.40	12.28	(5.82)	0.39	0.29	
86	(9.19)	—	—	—	—	(3.83)	0.69	0.53	(3.83)	(5.36)	0.40	0.39	
87	(9.17)	—	—	—	—	(6.42)	0.56	0.42	(6.42)	(2.75)	0.46	0.33	
88	(8.70)	—	—	—	—	(3.54)	0.53	0.38	(3.54)	(5.16)	0.37	0.28	
89	(9.09)	—	—	—	—	—	—	—	—	(9.09)	0.50	0.36	
90	(7.70)	—	—	—	—	—	—	—	—	(7.70)	0.39	0.36	
91	(6.50)	—	—	—	—	—	—	—	—	(6.50)	0.32	0.29	
92	(4.07)	—	—	—	—	—	—	—	—	(4.07)	0.28	0.19	
93	(5.16)	—	—	—	—	—	—	—	—	(5.16)	0.34	0.34	
94	(3.87)	—	—	—	—	—	—	—	—	(3.87)	0.39	0.32	
95	(6.60)	—	—	—	—	—	—	—	—	(6.60)	0.42	0.38	
96	(4.24)	—	—	—	—	—	—	—	—	(4.24)	0.37	0.36	
97	(2.72)	—	—	—	—	—	—	—	—	(2.72)	0.34	0.34	
98	(3.89)	—	—	—	—	—	—	—	—	(3.89)	0.39	0.30	
99	(2.70)	—	—	—	—	—	—	—	—	(2.70)	0.39	0.36	
100	(2.61)	—	—	—	—	—	—	—	—	(2.61)	0.32	0.30	
101	(1.95)	—	—	—	—	—	—	—	—	(1.95)	0.20	0.16	
102	(4.61)	—	—	—	—	—	—	—	—	(4.61)	0.43	0.41	
103	(3.86)	—	—	—	—	—	—	—	—	(3.86)	0.30	0.27	
104	(2.92)	—	—	—	—	—	—	—	—	(2.92)	0.19	0.12	
105	(4.17)	—	—	—	—	—	—	—	—	(4.17)	0.43	0.42	

ものが多い。関の深さは1.1～2.4mmであるが1.1～1.6mm程度のものが大部分を占める。箆被部は細い四角柱状を呈しており，棘状突起を有する。茎部には矢柄とそれを固定した樹皮が残存しているものもある。茎の先端を欠損しているものが多いが，いくつかの完形と見られるものは全長202～206mm程度である。

f．刀子（第19図，図版14）

石棺中央付近と南東長側壁際から計3振出土している。

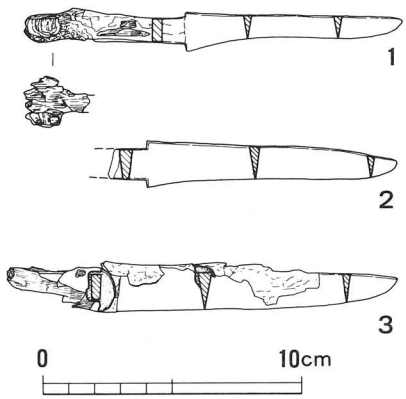
1は南東長側壁際から，側壁と直刀に挟まれるように鋒を南西に向けて出土した。柄に鹿角を使用している鹿角装刀子である。遺存状態は良好である。平棟平造りで鋒はふくらを有する。断面二等辺三角形を呈する刀身はかなり研ぎ減りしており，鋒の近くと関の付近では刀身幅に大きな差がある。関は両関であるが棟関の方がやや浅い。茎には木質が残存しているが，茎尻から2.4cmの範囲には鹿角が残存している。目釘孔は茎尻から1cmほどの位置に一箇所確認されており，長さ1.8cm程度

の鉄製の目釘が遺存している。茎の断面は長方形を呈する。

各部の計測値は以下の通りである。

全長14.65cm，刀身長8.38cm，刀身幅は刀身の中央で0.85cm，関付近で1.76cmを測り，棟幅は刀身の中央で0.38cmを測る。茎長は6.31cm，茎幅は関付近で1.01cmを測る。

2は石棺の中央東寄りの位置で鋒を南西に向けて出土した。茎の先端を欠損している上に全体に錆化が著しく，遺存状態は良好とは言えない。平棟平造りで鋒はふくらを有し，刀身は研ぎ減りしていることが看取された。関は両関で，棟関は直角であるが刃関は若干斜角になっている。茎の断面は棟側が広い台形を呈している。



第19図　刀子実測図（1：3）

各部の計測値は以下の通りである。

現存長11.23cm，刀身長9.72cm，刀身幅は刀身のほぼ中央で1.25cm，関付近で1.78cm，棟幅は刀身の中央で0.40cmを測る。茎の現存部長は2.51cm，茎幅は関付近で1.14cmを測る。

3は石棺の中央東寄り，2の刀子の東側に沿った位置から鋒をほぼ南西に向けて出土した。平棟平造りで鋒はふくらを有する。刀身の特に棟側には鞘木が遺存しており，把木の一部を呑み込んでいる。関は棟側のみで，刃側は内曲線を描きながら茎へと接続する。茎部には把木が遺存しており，茎の断面は刃側がやや狭い台形を呈する。

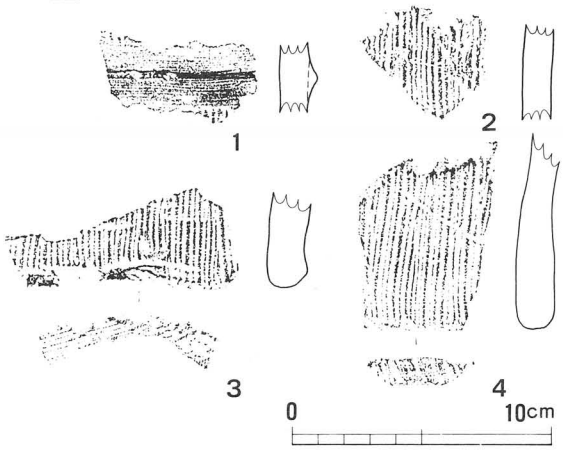
各部の計測値は以下の通りである。

全長15.14cm，刀身長10.81cm，刀身幅は刀身の中央付近で1.55cm，関付近で1.87cm，棟幅は刀身の中央で0.38cmを測る。茎長は4.33cmで，茎幅は関付近で1.08cmを測る。

g．埴輪（第20図，図版17）

各トレンチ内から出土したものである。計85片の埴輪が出土しているがいずれも細片であり，図示できたのは4点のみである。表土上においても，古墳周辺で埴輪の小片が認められている。なお，破片はすべて円筒埴輪片であり，形象埴輪と考えられるものは認められなかった。

1は凸帯部の破片である。凸帯は胴部に貼りつけられており，断面三角形のかなり退化



第20図　トレンチ内出土埴輪拓影（1：3）

した形状である。

2は胴部で，他のものと同様調整はタテハケのみである。

3，4はいずれも底部の破片で，下面には埴輪製作時のものと思われる木目痕がある。3は復元径約11.6cmを測る。

（谷中　隆）

第Ⅲ章　考　察

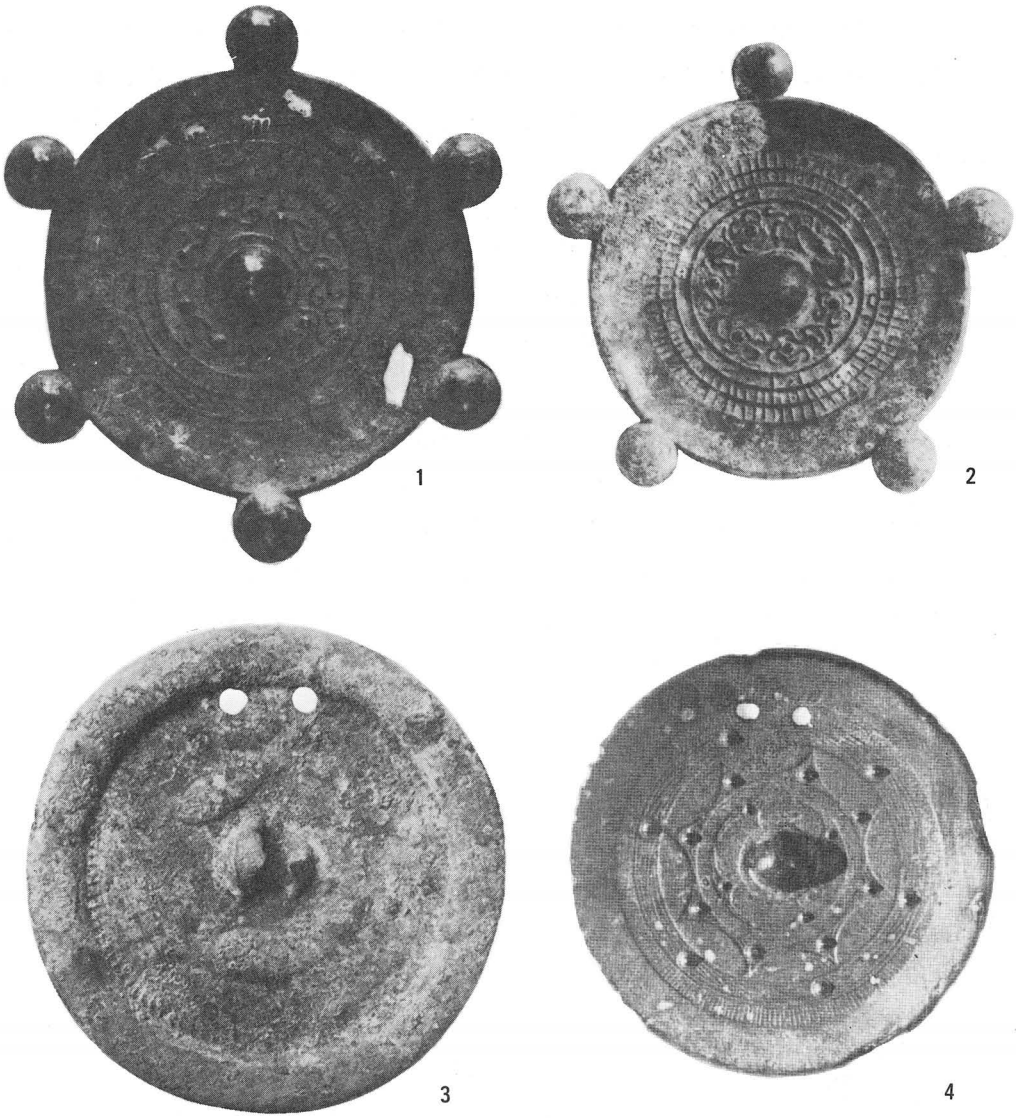
1．鏡について

背面に獣形を鋳出した鏡は，数多くある古墳時代鏡のなかでもとくに多い。太田古墳出土鏡は，乳とその周囲の細線によって主文様を構成しているが，蕨手文と呼称されるその文様は獣形を表現したもののなかでもとくに退化したものと捉えることができよう。ただし，乳文鏡の中にも類似した文様を持つものがいくつかみられることが示すように，この種の鏡は文様の系譜を重視して，獣文鏡のグループに加える場合と，連続的に並ぶ乳を主文様と考えて乳文鏡のうちに加える場合とがあるようである。本報告書では，前者の立場を選択した。

太田古墳出土鏡の文様にやや類似したものには，群馬県白石出土例〔乳文鏡〕(後藤守一：1942)，茨城県三昧塚古墳例〔変形乳文鏡〕（斎藤　忠ほか：1959）などがあるが，内区・外区を通じて強い類似性を示すものはむしろ鈴鏡類に多く見いだすことができる。すなわち福岡県コウモリ塚古墳例，岐阜県小山古墳例，長野県神送塚古墳例，長野県正清寺古墳例，伝静岡県出土例，埼玉県神川村新里出土例，茨城県上野古墳例など（後藤守一：1942）である。いずれの鏡も背文は蕨手文に類するもので，その周囲に二重あるいは三重の文様帯をめぐらして外区としており，ほとんどが斜縁を有している。特に静岡県出土とされる鏡は，外区の文様構成がほぼ同様となっている。鈴鏡に文様が類似する鏡の中には，細部のくせなどから鈴鏡と共通する型で製作された可能性があるものや，同じ工房で作られたと考えられるものがいくつか見られる（岩崎卓也：1984)。本古墳出土鏡も，文様などの点から鈴鏡と相関関係にある公算は強く，あるいは鈴鏡と同じ工房で製作されたものである可能性も考慮しておく必要があろう。

なお，本古墳出土の鏡には縁に近い位置に小孔があけられていることが知られた。小孔は径約0.1cmで，外側の櫛歯文帯の外縁円圏上に存在するものであり，鋳出後に穿孔されたと思われる。鏡に穿孔がある例は，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡においていくつか見られるが，多くの場合それらは破損した破片を修復するための穿孔で，本古墳出土鏡と同列に考えることはできない。それらの中で五島美術館所蔵の内行花文偽銘帯鏡（樋口隆康：1979）には，外区の外側寄りに２つの小孔が開けられている。樋口隆康氏は，この鏡が懸鏡として使われたとしている。つまり鏡を懸垂するためにこの孔が開けられたとするのである。その孔の位置からすれば，ほぼ垂直に近い状態で懸垂することができようが，ただしこの鏡は鈕が破損しているので，その代用としてこのような孔が設けられたとも考えられよう。鈕が破損しておらず，しかも孔を有している例としては愛知県吉根出土と伝える観音寺蔵の内行花文鏡（田中　琢：1977）がある。これは前例と同様の

位置に，同じく２つの小孔が開けられているものであり，やはり懸鏡として使用されたものと思われる。この小孔について，久永春男氏は，拾得後の穿孔と断じられた（久永春男ほか：1963)。だがとくに根拠は示されていない。これらからすれば，本古墳出土鏡は孔が１つのみであるが，おそら



第21図　太田古墳出土鏡に文様の類似する
鈴鏡と，小孔を有する鏡

１．神送塚古墳（面径10.0cm）　２．正清寺古墳（面径9.67cm）
３．五島美術館蔵（面径7.8cm，樋口隆康：1979より）
４．観音寺蔵（面径14.1cm，久永春男ほか：1963より）

くは小孔に紐を通し，吊るしたものであったのであろう。

それでは，本古墳出土鏡が小孔をもって吊るされたことがあったとして，どのような用途に使用されたものであったのか。今それを明らかにはしえないが，懸仏がひとつの示唆を与える（景山春樹：1974）。 懸仏は通常銅製円板の中央に仏像あるいは神像などを線刻したり取付けたりして，これを仏堂や神社の本殿に懸け礼拝の対象としたものであり，円板の縁に１・２個の小孔を有している。懸仏は平安時代末期から鎌倉時代にかけて盛行したとされているが，その起源は神社の御神体として祀られていた鏡に本地仏などを朱墨描，彫刻して礼拝した掛鏡にはじまるといわれている。ただ，本古墳の年代が古墳時代後期にあることを考えれば，これらと系譜的につながるとは断じがたいだろう。また御神体たるべき神聖な品が，なぜ一小古墳に納められるに至ったのかを合理的に証明せねばならないなど，懸鏡との関連を考えるうえでの問題は少なくない。そこで，これを解明することは困難ではあるが，いまひとつの可能性も念頭に入れておきたい。

さきに挙げた吉根出土の内行花文鏡と本古墳出土鏡は，いずれも吊るして使用されたと推測したが，ここで注目したいのは，この二つの鏡が鈴鏡の多く分布する地域の古墳から出土していることである。鈴鏡は，巫女の埴輪における着装例から垂下して使用された可能性が高いとされており，本古墳出土鏡とあわせ，吉根出土鏡も鈴鏡と似た使われ方をしたという推測も成り立つのではないかと考える。もちろんこのことのみから，本古墳出土鏡と鈴鏡をその意味において同一視するということはできないが，いちおう本古墳出土鏡が宗教的，あるいは呪術的な意味で懸垂されることがあったと推察しておきたい。今後類例の増加をまって，再度考察すべき問題である。

２．追葬について

前述したように本古墳においては，墓壙内の土層観察から追葬のためと思われる掘り込みが認められた。掘り込みの規模は南西側の２枚の蓋石と北東端との接合部にある小石１枚におよぶもので，これにより少なくとも一回の追葬があることが確認された。

石棺内における人骨の出土状況を見てみると，そのほとんどは石棺東寄りに集中している。人骨は発見当初の壁体欠損による攪乱を受けたためか，原位置を動いているものがほとんどで粉化しているものも多く，遺存状態は総じてあまり良くはない。石棺内から確認された人骨は少なくとも５体分で，１～４号人骨は北東短側壁寄りにそれぞれ頭骨のみが発見されている。また，５号人骨は石棺のほぼ中央南東長側壁際に，集積した状態で検出されたものである。その出土状態から，５号人骨は追葬時の片付け行為がなされたものと推察されるが，他の４体の人骨に関しては頭骨を除いてほとんど遺存していないこともあり，追葬がどのように行なわれたかについての充分な手掛かりは得ることができない。

そこで，１～４号人骨の出土状態を詳細に観察すると，２号人骨が石棺のほぼ中央にあり，頭骨を上にして１号人骨が右，３・４号人骨が左に存在していることがわかる。また，中央にある２号人骨は別として，１・３・４号人骨はあまりにも長側壁に近い位置にあることが知られよう。石棺の規模を考えてみると，１人を埋葬するのが限界と思われるほどの広さであり，４人が同時に埋葬されたとは到底考えがたい。さらに３・４号人骨はその頭骨が重複しているなど，埋葬状態に不自然な点もある。このようにみてくると，２号人骨はほぼ埋葬当時の状態を保っていると思われるものの，その他３体の人骨は追葬時に長側壁際へ移動させられたと考えることができる。

だが，１・３・４号人骨が追葬時に改変されたものとして，それらは出土状態から５号人骨のように集積した状況を看取することはできない。追葬時の改変がなされた人骨にこのような差異が見られるのはどのような理由によるものなのか。ここで副葬品に目を向けてみると，それら比較的豊富な副葬品は，各人骨に共伴するとみられる遺物があることや，鉄鏃が３群に分かれて出土していることなどから，数次にわたる副葬の結果と考えるのは可能である。また次節に述べるように，各遺物間，あるいは鉄鏃の各群間には，ほとんど時期差は認められない。これらのことから，追葬はごく限られた時間の中でそれほど時をおかずに行われたと思われるのである。その場合，追葬が行われる際に，前回埋葬された遺体が完全に骨化していなかったことも充分考えられ，一箇所に集積できず，長側壁際に寄せることもあったのではなかろうか。３体の人骨が両長側壁沿いに位置するのは，このような事情によるものと思われる。つまり，本古墳の主体部である石棺内から発見された５体の人骨のうち，４体は追葬時に改変されていることが看取されるのである。

次にそれらの埋葬順序について考えてみると，確かなのは人為的な移動を受けていないと思われる２号人骨が最後であるとみられるだけだが，他の人骨に関してもある程度は推定できよう。３・４号人骨は，その頭骨が重複しており，前後関係は明らかではないが，頸部付近からは玉類が攪乱されていない状態で集中して出土している。玉類は勾玉15，管玉６に加え，ガラス製の丸玉および小玉などで構成され，復元した総長から二重の頸飾りであった可能性がある。関東地方の形象埴輪に見られる玉類の着装状態からすると，このような頸飾りは女性に限られるようであり（橋本博文ほか：1981），それからすれば４号人骨は女性で，しかも玉類の出土状態から３号人骨より後に埋葬されたと考えることができよう。また，初葬人骨を知る手だてはないが，形質人類学的所見からは，１・２号人骨が男性，３号人骨が男児，４・５号人骨が女性であるとされている。人骨の出土状態からすれば，鏃束の上に集積した状況で発見された５号人骨を初葬とすることが妥当であろうが，もし初葬だとすればこの人骨に鉄鏃が伴う公算も生じることになる。女性に鉄鏃が伴うかどうかについては不明な点が多いが，ここでは１号あるいは３号人骨を初葬と考えておきたい。つまり，１号もしくは３号被葬者の死をもって本古墳が築造されたと推察されるわけである。このように，各人骨の部分的な前後関係については指摘することが可能である。だが，現時点では５体それぞれの埋葬順序を明らかにし得る積極的な資料はなく，今後後期古墳における追葬の状況，あるいは鉄鏃と人骨との共伴関係などの検討を深めるなかで解明する必要があると考える。

ところで，常総地域においては，本古墳のように主体部である石棺を地表下に構築する例が多く見られる。このような古墳は多くの場合複数の人骨が埋葬され，それらは石棺内の人骨，あるいは副葬品の出土状態から，追葬によるものと説明されてきた。しかしそれらの古墳においては，追葬が行われたことを示す掘り込みなどが検出されたものは，管見に触れるかぎり例を見ず，石棺内の状況の観察結果から，それとしているものがほとんどである。その意味では，水道敷設工事に伴う緊急調査にもかかわらず，それが不十分ながらも検出できたことは，今回の調査における一つの成果と言えるであろう。

しかし，主体部を地下に有する古墳の中には，明らかに改葬されたと考えられる例がある。また本古墳の場合は，それぞれの人骨が随時追葬されたものと考えたが，少なくとも５体の埋葬に対し，追葬のための掘り込みが同数確認できたわけではない。つまり多数の人骨が埋葬されていることに対し，追葬という理由のみで説明できるようになったとはいえず，依然として当時の墓制における改葬，あるいは同時多葬の問題がのこってしまったといえよう。

３．太田古墳の年代について

古墳の年代を探る際，須恵器あるいは土師器などの土器類が有力な手がかりとなる場合が多いが，すでに明らかなように，それらの土器は太田古墳からは出土していない。しかし，主体部からは比較的多くの鉄鏃が出土している。鉄鏃の編年研究は，現在までのところ茨城県内で出土した鉄鏃を対象としたものはないが，隣接する埼玉県や栃木県においてなされた研究（田中正夫ほか：1983，小森哲也：1984）があり，また全国的視野に立ったものとしては，関義則氏の論考（関義則：1986）がある。それぞれの編年には若干の相違が認められるものの，大筋ではほぼ一致しており，それらをもとにした鉄鏃の検討から，本古墳の築造年代をある程度推定することが可能であろう。

鉄鏃は多数出土しているが，短頸と長頸のものに大別できる。長頸鏃にはさらに両刃式と片刃式があり，両刃式は関の有無からさらに細分できる。鏃身部の形状が明らかなものは75点あるが，そのうち短頸の鉄鏃は５点のみで数の上では少なく，長頸鏃が主体となっている。短頸の鏃は鏃身の長さ55㎜前後で鏃身部は両丸造であり，直角に近い逆刺を持っているものである。鏃身部の形状はさほど角張ってはおらず，６世紀後半頃の年代が考えられる。長頸鏃のうち，関を持たない両刃式の鉄鏃は２点あり，一般に鑿箭式とされるものである。鏃身部の幅は約10㎜で片丸造となっており，棘箆被を持つ。鏃身部の最大幅は鋒に近い位置にあり，緩やかに箆被部へとつながるもので，刃は先端から両側面にまで付けられている。鑿箭式のなかではやや古い様相を示すもので，６世紀末から７世紀にかかる時期に比定されよう。片刃式の鉄鏃は40点で，直角の関を有しているがそれほど深くはなく，1.4㎜程度のものが多い。鏃身長は35㎜前後で片切刃造のものと平刃造のものがあり，棘箆被を持つ。鏃身部は，最大幅を関部付近に有し，その形状が直線的ではないなどの

点で関が退化して撫角あるいは無関となるものに先行すると考えられ，また片切刃造は須恵器編年でのＴＫ43型式期から出現するものとされていることから，６世紀後半代を中心とした時期が考えられる。関を有する両刃式の鉄鏃は，いわゆる剣身形の長頸鏃で，28点ある。鏃身部は片切刃造のものが主体で，直角の関は両側とも1.4㎜前後の深さであり，棘箆被を持っている。片切刃造は，片刃式と同様ＴＫ43型式期からとされており，６世紀後半に比定されよう。

以上本古墳出土鉄鏃の検討からそれらの示す年代を追ってみたが，総合してみると，いわゆる鑿箭式の鏃にやや新しい様相がみられるものの，全体としては６世紀後半代の中で捉えることができるものである。

前述のように，本古墳では追葬が行われたと考えられる。したがって３群に分かれて出土した鉄鏃は，複数回にわたって副葬された可能性もあるが，各形式間あるいは各群の間にいちじるしい時期差は認められず，その年代が本古墳の築造・追葬年代の幅をおよそ示すものとしてよかろう。

ところで，鉄鏃のほかに本古墳の年代を知りうる遺物としては，八窓鍔を有する直刀がある。直刀は平棟平造りで，関は片関で斜角となっている。関の付近には刃関孔があり，２つの目釘孔を有している。茎尻は一部欠損しているため，その形状は明らかではないが，隅抉尻であろうと思われる。直刀の編年研究としては，特に茎の形状に注目して分類，編年をした臼杵勲氏の論考（臼杵勲：1984）があるが，氏の分類によると本古墳出土の直刀は斜角片関隅抉尻細茎となり，６世紀代という年代が与えられる。

また，周辺から出土した埴輪片から，本古墳には埴輪が伴う可能性がある。それらは無黒斑で，外面が一次調整のタテハケのみであり，いわゆる川西編年のＶ期に相当する（川西宏幸：1978）。小片のため，全体の形状や底部調整の有無は不明であるが，断面三角形をなす偏平な突帯をもつなど，Ｖ期のなかでも後出的な要素がみられる。

このように，直刀や埴輪から得られた年代も，鉄鏃によって導き出された年代と齟齬をきたすものではないことが知られよう。ここで注意したいのは，全体的にこれらの遺物にはさほど新しい要素がみられず，比較的古い時期を示すもので統一されていることである。片関の直刀は古墳時代前期からみられるものであるが，６世紀の後半頃から棟関を持つ両関の直刀が出現してくるとされている。７世紀以降盛行する両関の直刀は片関のものから派生したと推定されており，また，埴輪は７世紀初頭，須恵器編年で言うＴＫ209型式期には消滅するとされ，群馬・栃木県下では先行するＴＫ43型式期にこれを欠くものが目立つともいう（川西宏幸：1978）。さらに漢式鏡を副葬した例は，７世紀以降の古墳にはほとんど見ることはできないことなどからしても，本古墳の年代を７世紀代にまで下らせることはできまい。

（谷中　隆）

後　論

太田古墳の調査結果については，すでに詳細に報告されており，また２，３の留意点も論じ尽くされているので，ここで屋上屋を重ねる必要は全く認められない。そこで本稿では，太田古墳の歴史的な位置について思うところを述べ責をはたしたい。

太田古墳は，いわゆる変則的古墳である。命名者の市毛勲氏は「変則的古墳」の特性を以下のように要約している。

1．内部施設が墳丘裾部に位置すること
2．内部施設は通常偏平な板石を用いた箱式石棺であること
3．合葬（追葬）を普通とすること
4．群集墳を形成していること
5．東関東中央部に分布すること

すなわち，これらを一見しただけで，すべての点において上記は太田古墳を説明したものといってもおかしくはない。太田古墳は，「変則的古墳」の典型といえるのである。

ところで市毛氏は，このような「変則的古墳」出現の経緯を，

被葬者の増大→追葬の出現→墳丘の権威象徴の失格→墳丘の墓碑化

という変遷としてとらえている。つまり古墳であるかぎり，墳丘中央のそれも地表面よりも高位置に設けられるべき埋葬施設が，墳丘裾に移行したのは，追葬の便をはかり，また横穴式石室を築造するような労力を省いた結果だというのである。

市毛氏の「変則的」という，いかにも変則的な名称は，氏も断っているように暫定的な呼び名だったので，近ごろでは若手研究者の間では「常総型古墳」の語が代替しているようである。これらの古墳は，古利根川（江戸川）そして鬼怒川以東，涸沼川以南，養老川以北という，文字どおり常総二地域にまたがって分布するという，市毛氏の分布観が容認されて，この新名称となったのであろう。市毛氏が挙げた諸属性についても，とくに批判点は指摘されてはいないから，単なる名称変更の域にとどまるものと考えられる。

だが私は，別稿で論じたことだが，この種の古墳の分布域は，もっと拡大して考えるべきだと思っている。関東地方の東部，栃木，茨城両県と千葉県の北半部では，古墳時代後期の群集墳を構成する古墳の埋葬施設が，墳丘中央を離れるとともに，地下深くに設けられるという共通点をもっている。ただ同じ地下でも，栃木県では広い意味での横穴式石室の形態をとるのに，霞ヶ浦周辺地区では，絹雲母片岩を主材とする箱式石棺が顕著であるという差異はある。さきの「変則的古墳」あるいは「常総型古墳」は，私見からすれば特異な位置の地下に埋葬を行う古墳分布域の，一地方色

にすぎないのである。

ところで，墳丘中央の高位置に埋葬する在来の古墳とは，首長あるいはそれに準じる「高貴」な人物の墓であった。そして同じころ，庶民が葬られたのは地下であった。当時のヤマト王権は，在地の一握りにすぎない首長層を介して，間接的に民衆支配を行ってきた。古墳は，王権への参加の象徴だったのである。

ところが5世紀代を通じて力を貯え，王権の基礎を固めた畿内の勢力は，民衆をより直接的に把握しようと志向しはじめた。そしてまた，中央の有力首長層も各地の民衆を自己の影響下に組みこもうと図るようになった。こうして形づくられた新たな地方行政組織の末端に登場した数多くの農民が，古墳づくりに加わることになった。群集墳形成のはじまりである。

だが東関東地方では，他地域と異なり，在来首長層がなお一定の力を保ち続けていた。そして王権中枢もまた，この地に根強い共同体的諸関係への配慮を怠らなかった。おそらく，首長の眠るべき位置が古墳の中央部，地表面上であったのに対し，新たに古墳づくりに加わった層には，民衆本来の墓のあり方，つまり墳丘外そして地下という条件が課されたのではなかろうか。

このような古墳は，5世紀のうちに単次葬の形で早くも築かれていたが，やがて血縁意識の高揚と深くかかわりながら，多葬へのみちを歩み始めた。多葬化の傾向は，全列島的規模で指摘されるもので，決してこの地方の特異な古墳だけのことではない。

太田古墳が、このような流れの中に位置づけられることになると，ここから出土した銅鏡が重要な意味をもってくる。かつて鏡は，ヤマト王権のもと首長達に連帯の証しとして下賜されるという，政治的性格を保持していた。だが，首長の死とともに埋納された前期のそれには，副葬したというよりも，これに内包されると信じられていた呪的な力こそが期待されたと思えるのである。

ところで太田古墳の鏡には，縁辺ちかくに小孔が穿たれていた。鏡の中央にある鈕孔に紐を通して下げたなら，鏡面が下向きつまり地面と平行になるだろう。もし鏡面が垂直になるように吊り下げようと思えば，この鈕孔は利用できない。おそらく太田古墳鏡の小孔は，垂直に垂下するために穿たれたものであろう。そして垂直に吊り下げた鏡というと，ただちに連想するのは，青木に鏡・剣・玉を垂下するという記紀の記述である。アマテラスの天岩戸ごもりの場で，アマテラスを迎えようと神々が集まった折，これが樹立された。また仲哀紀では，天皇の軍あるいは使者を迎えいれる折に，これを立てた等々の記述である。これらは史実といえないだろうが，高貴な人を迎える際の儀礼の形態を示しているとは推測できる。この場合，青木に垂下した鏡面が下を向いていたとは考えにくい。

青木に鏡・剣・玉を吊るして高貴な人物を迎えるという儀礼は，カミの来臨を願う折の依代に由来すると想定できそうである。5世紀のころ，祭祀遺跡から多量の滑石製鏡・剣・玉が出土するようになるからである。これらは，すべて孔があるから垂下したものと考えられている。

このように思いめぐらしてくると，太田古墳鏡もまた，そのような用途に供された可能性を否定できなくなる。神まつりに長じた人物の死と共に，祭器としての鏡も使命を終えたのか，あるいは

生前にすでに司祭者的な機能を放棄していたとみるべきかは速断できない。ただ，いわばムラの首長ほどの，民衆の中に埋もれた人物がカミまつりを執行していたといえるなら，その事実は無視しがたい。

かつて司祭者として，民衆をリードした大首長は遠い存在となり，民衆の日常的なカミへの願望を叶えようとする存在ではなくなるような情況下で，民衆との共同体的関係をしっかりと維持しつづけている中・小首長が，ムラの日常的なマツリを執行するような形態がとられてきたのだろう。かつてマツリを媒介に首長のもとに結集していた民衆は，小首長を中心に共同体的結集をしていたのであろう。ヤマト王権がそのような実態に着目しつつ，中・小首長の把握を試みたことは，十分に想定できる。5世紀後半期以降，関東の各地に小規模古墳が目立ちはじめたのは，そのような社会状況に立脚していたのではなかろうか。そうして6世紀後半期のころ，太田古墳の被葬者の誰かが，その衝にあたっていたと考えたいのである。

群集墳は多くが消滅してしまったが，八千代町域にはまだまだ残存している。そして律令体制成立に向けてひた走る6，7世紀の政治過程把握には，大古墳ならぬこれらの小古墳の解析が不可欠なのである。小古墳だから破壊もやむなし，というのではなく，代え難い郷土の文化財としてこれらが保全されることを期待しつつ，筆を擱きたい。

（岩崎　卓也）

付篇１　太田古墳出土人骨について

聖マリアンナ医科大学　森　本　岩太郎

Ⅰ．はじめに

茨城県結城郡八千代町大字太田所在の太田古墳出土人骨につき，筑波大学岩崎卓也氏および八千代町教育委員会から鑑定の委嘱があったので，ここにその結果を報告する。発掘調査では，太田古墳は取り崩されて現在畑となっているため，その正確な形状は不明であるという。この古墳に属する箱式石棺は，現在の地表から30cm足らず下方の地中で発見され，その内部に人骨片があったという。箱式石棺の年代は６世紀後半に属すると思われ，石棺内には銅鏡１，青銅製耳環２対，勾玉15，管玉６，土製丸玉２，ガラス製丸玉20，ガラス製小玉201，直刀２，鉄鏃多数，刀子３が副葬されていたとのことである。

Ⅱ．人骨所見

人骨の保存状態は極めて不良で，腐食が甚だしく，残量もごく少ない。残った人骨片は，触れれば壊れる程度の強度をようやく保持しているものが大部分を占める。したがって，取り上げた骨片はその後の乾燥のためひび割れたり，捩じれたりして，歪みが著しい。

残存するのは，若干の成人骨片と多数の遊離歯片とである。骨片の主要なものは，頭蓋片については右側頭骨の外耳道から乳様突起にかけての細片が１個と，前歯と第１小臼歯の付いた下顎体の正中部付近の破片とが存在するだけである。後者の歯については下記の歯の所見（ａ）で述べる。また頭蓋以外のものとしては右肩甲棘片１個，短い上腕骨片数個，右大坐骨切痕片１個，比較的長い左右不明の大腿骨体片１個と短い大腿骨体片数個，左右の脛骨体片各１個，小さい腓骨体片１個，上腕骨頭（または大腿骨頭）片２個および同定不可能の骨片数個が認められるに過ぎない。当然ながら，人骨片からは埋葬個体数や性別などを推定することが著しく困難である。

幸いに，人骨片のほかに遊離歯の破片が100個余りある。そのうち識別不能な数個の歯片を除き，これらの歯についてその形態・大きさ・色調・磨耗の程度・石棺内における分布などを参考に個体識別を試みると，次の５個体分になる（写真１～２）。

（ａ）熟年期～壮年期後半男性

８７６５××２１	１２３×５６×８
×××○４３２１	１２３４●○××

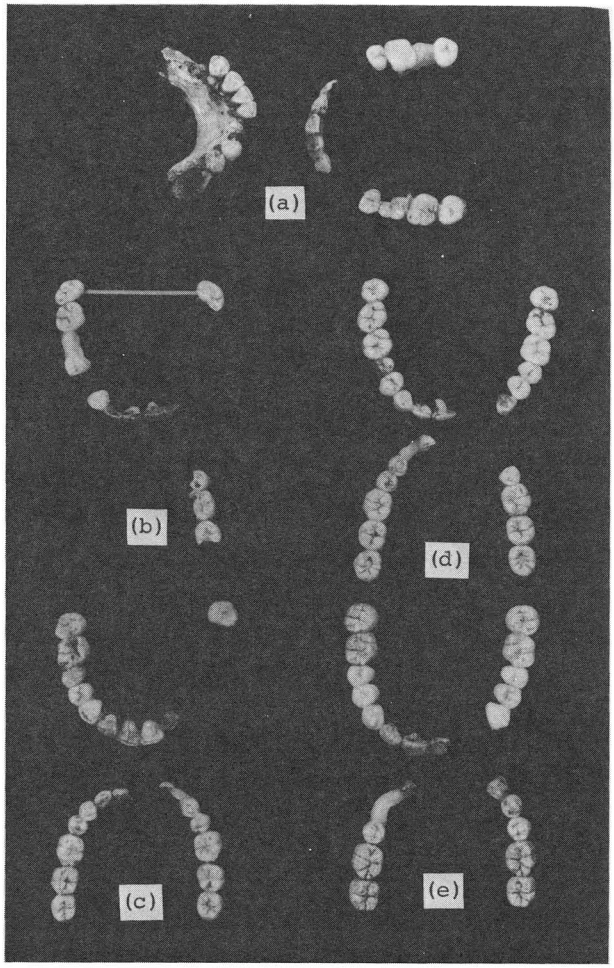


写真１．各人骨の歯　（ａ）熟年期～壮年期後半男性，
（ｂ）壮年期女性，　（ｃ）壮年期後半男性，
（ｄ）壮年期前半女性，　（ｅ）男性小児の歯

ただし，アラビア数字は残存する永久歯を，○印は歯槽開放を，●印は歯槽閉鎖を，また×印は欠損のため状況不明のことを，それぞれ示す（以下も同様）。下顎右の中・側切歯は歯根だけが残っている。歯の咬合様式は鋏状型で，咬耗度は前歯がBroca２度，後歯が同１度である。上顎左智歯の咬合面に軽度の齲蝕が認められる。上顎の両側中切歯と左側切歯の唇側面には深紅の赤色物が付着しており，死後顔面に赤色顔料（ベンガラ？）を施したものと思われる。

（ｂ）壮年期女性

８××××××２１	１２３×５×７８
×７６５××××	××××××××

歯の咬合様式は鋏状型で，咬耗度は前歯がBroca 2度，後歯が同1度である。

（c）壮年期後半男性

×7××××21	1234567×
87654×2×	×2345678

歯の咬合様式は鋏状型で咬耗度は前歯がBroca 2度，後歯が同1度である。上顎左側切歯の唇面に深紅の赤色物の付着があり，死後顔面に赤色顔料を施したものと思われる。

（d）壮年期前半女性

876543××	12345678
8765××××	×2×45678

歯の咬合様式は鋏状型で，咬耗度は前歯がBroca 2度，後歯が同1度である。

（e）男児（7～11歳）

76543×1	1234567
76543××	×2××567

歯の咬耗度は切歯・第1大臼歯がBroca 1度，他は同0度である。歯冠は比較的大きく，ほぼ完成している。

上記の歯の所見から，この石棺内には少なくとも男性2体・女性2体・男児1体，計5体が埋葬されたと考えられる。このうち男性2体の上顎切歯唇側面には赤色物の付着が認められるので，これらの男性は死後顔面に赤色顔料（ベンガラと思われる）を施され，僅かにほころびた上下の唇の間から赤色顔料がこぼれ落ちて上顎切歯に付いたか，あるいは軟部組織の腐食後に顔面口唇部の皮膚の上にあった赤色顔料が歯に落ちて移ったかして，このような赤色物の上顎切歯への付着を見るに至ったと推測できる。

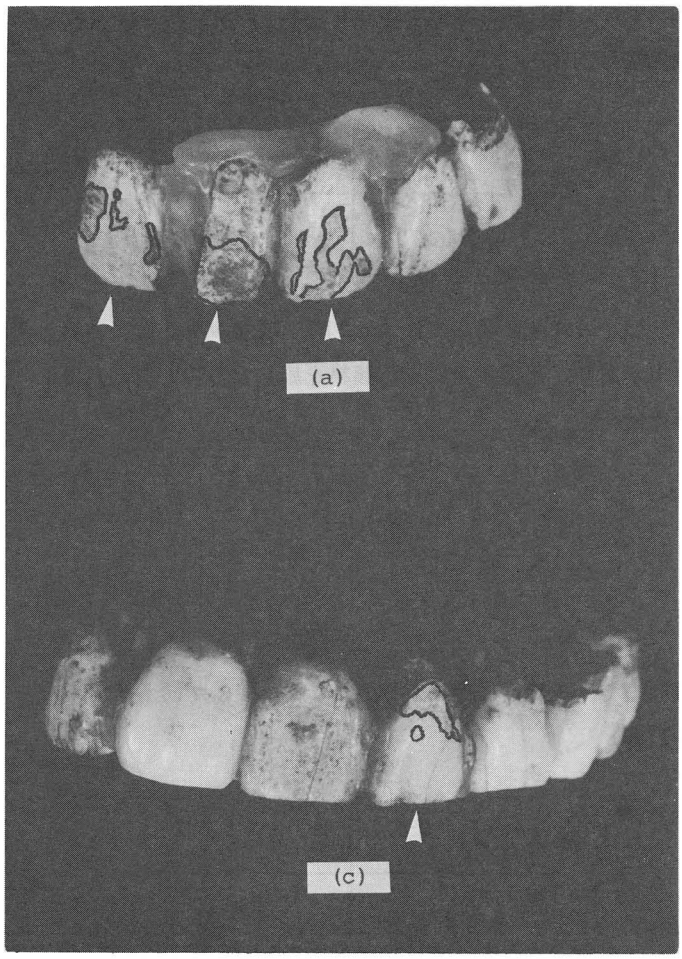


写真２．（ａ）・（ｃ）両男性の上顎前歯唇側面　（ａ）では21|1に，また（ｃ）では|2に，施朱の痕跡と思われる赤色物の付着（矢印の歯の線で囲んだ部分）が見られる。

Ⅲ．まとめ

八千代町太田古墳箱式石棺内出土の６世紀後半に属する人骨片は少なくとも５個体分（男性２・女性２・男児１）であると推定される。そのうち男性２体は死後顔面に赤色顔料を施されたものと思われる。

〈文　献〉

（50音順）

阿久津　久　1981『尾崎前山－茨城県結城郡八千代町尾崎前山－』八千代町教育委員会

市毛　勲　1963「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」古代41

市毛　勲　1973「変則的古墳覚え書」古代56

茨城県史編さん原始・古代史部会　1974『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』茨城県

岩崎　卓也　1984「後期古墳が築かれるころ」土曜考古９

臼杵　勲　1984「古墳時代の鉄刀について」日本古代文化研究　創刊号

小瀬　康行　1987「管切り法によるガラス小玉の成形」考古学雑誌73-2

景山　春樹　1974「御正体と曼荼羅」神道考古学講座４　雄山閣

亀井　正道　1966「衣服と装身具」日本の考古学Ⅴ　古墳時代　下　河出書房新社

川西　宏幸　1978「円筒埴輪総論」考古学雑誌64-2

後藤　守一　1942『古鏡聚英　上篇(秦鏡と漢六朝鏡)』東京堂出版

後藤　守一　1942「上古時代鉄鏃の年代研究」日本古代文化研究

小林　三郎　1983「古墳時代倣製鏡の鏡式について」明治大学人文科学研究所紀要21

小森　哲也　1984「栃木県内古墳出土遺物考(Ⅰ)－鉄鏃の変遷－」栃木県考古学会誌８

斉藤　忠ほか　1960『三昧塚古墳』茨城県教育委員会

杉山　晋作　1969「所謂『変則的古墳』の分類について」茨城考古学２

杉山　晋作　1974「変則的古墳の一解釈(その一)」古代57

関城町史編さん委員会　1988『関城町史　別冊資料編－関城町の遺跡－』関城町

関　義則　1986「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」日本古代文化研究３

田中　正夫ほか　1983「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ－鉄鏃について－」研究紀要'83　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中　琢　1977『鐸剣鏡』日本原始美術大系４　講談社

田辺　昭三　1981『須恵器大成』角川書店

長野県史刊行会　1988『長野県史　考古資料編全１巻(４)遺構・遺物』長野県

橋本　博文ほか　1981『梶山古墳』大洋村教育委員会

樋口　隆康　1979『古鏡・古鏡図録』新潮社

久永　春男ほか　1963『守山の古墳』守山市教育委員会

茂木　雅博　1966「箱式石棺の編年に関する一試論－霞ヶ浦沿岸を中心として－」上代文化36

森　浩一　1978『鏡』日本古代文化の探究　社会思想社

八千代町史編さん委員会　1985『和歌(島)城跡確認調査報告書』八千代町埋蔵文化財調査報告書３　八千代町教育委員会

八千代町史編さん委員会　1987『八千代町史(通史編)』八千代町

八千代町史編さん委員会　1988『八千代町史(資料編Ⅰ)考古』八千代町

図　　版

図版1

古墳周辺航空写真（1：太田古墳，2：太田城跡，3：和歌(島)城跡）

図版2

1．遺跡の遠景

2．遺跡の近景

1．石棺の全景

2．石棺内への土砂流入状況

図版4

遺物出土状況

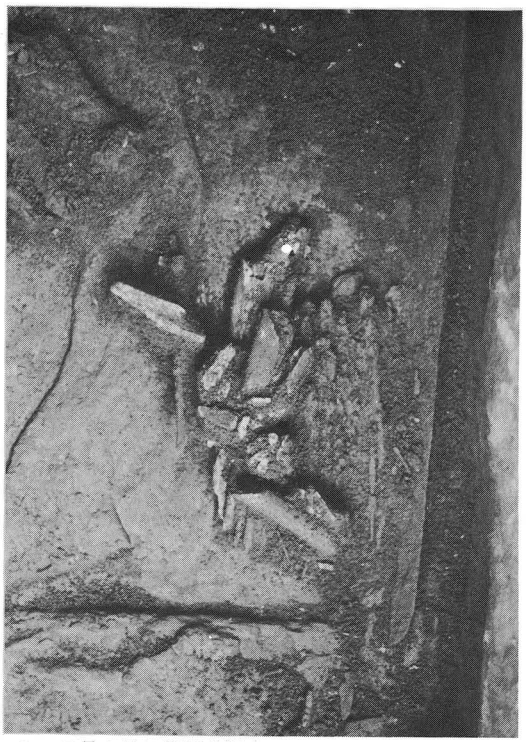
1．石棺北東部の遺物

2．石棺北東部の遺物（拡大）

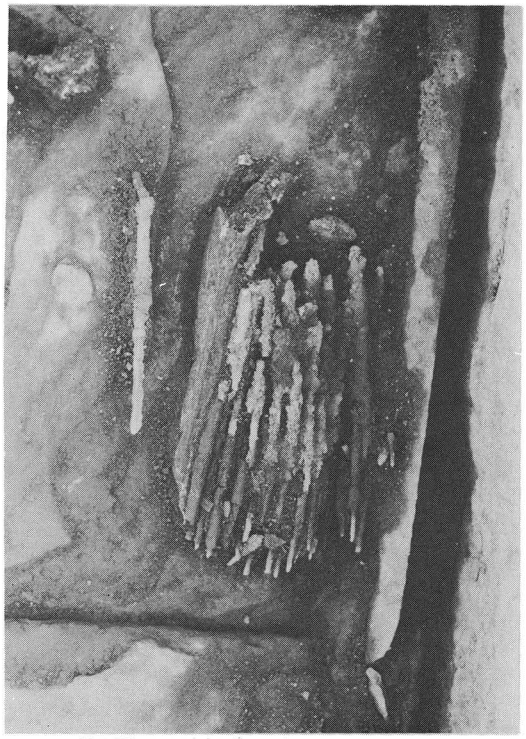
3．玉類の出土状況

4．1号人骨（下顎骨）

図版6

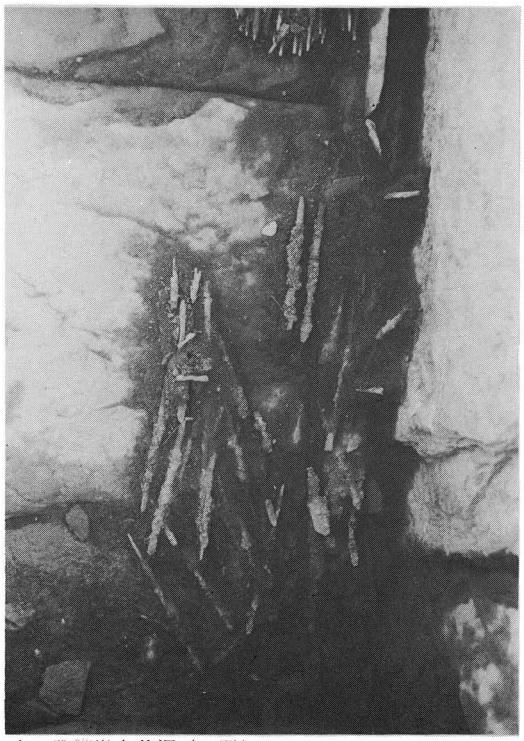


1．5号人骨の集積状況



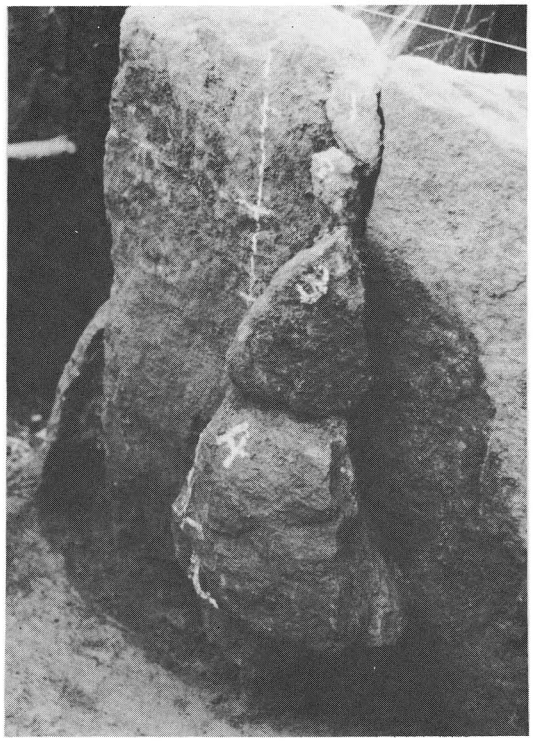
2．5号人骨下の鉄鏃（b群）

3．南東長側壁際の遺物

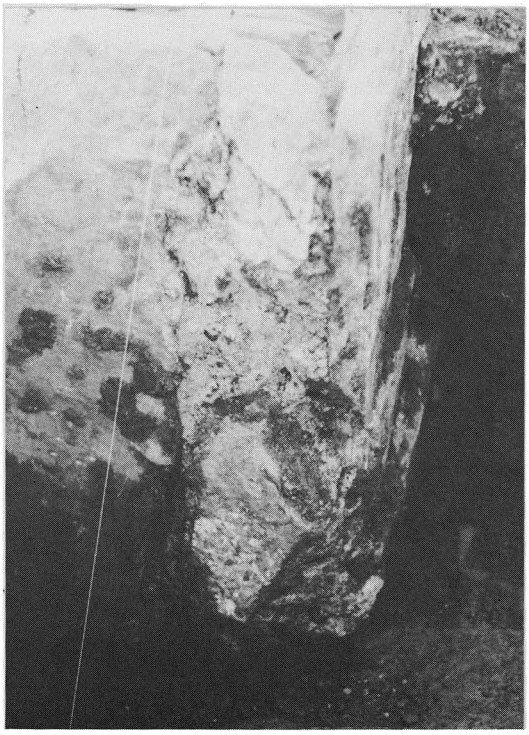


4．鉄鏃出土状況（c群）

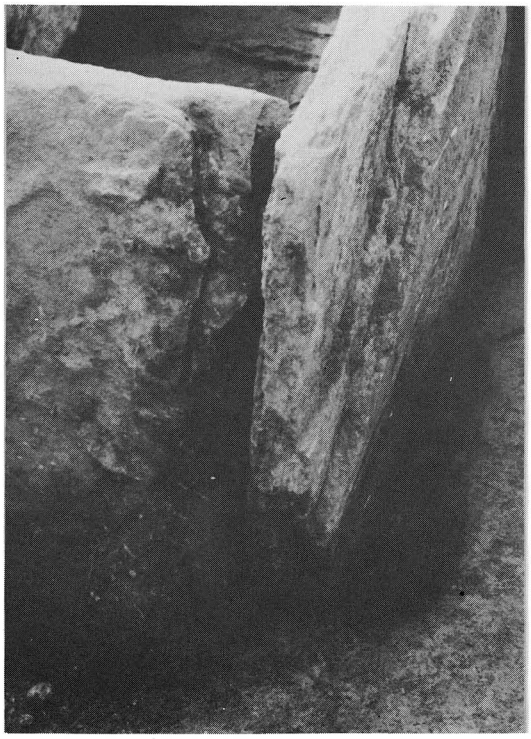
1．南東長側壁の接合部（粘土除去前）



2．南東長側壁の接合部（粘土除去後）



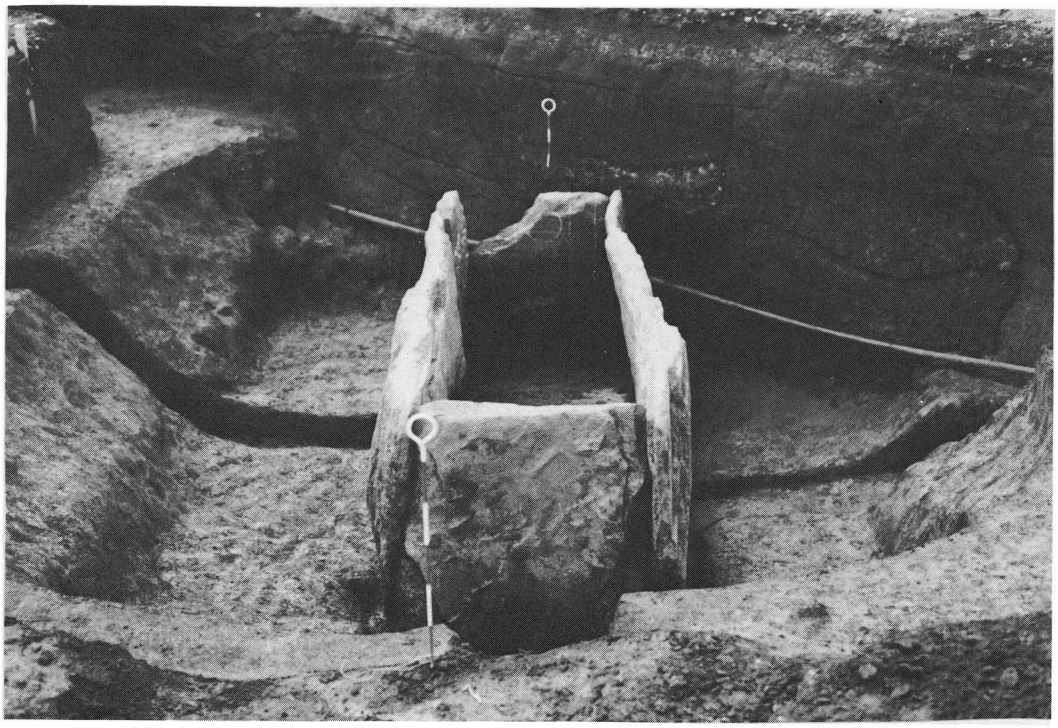
3．石棺北隅の接合部（粘土除去前）



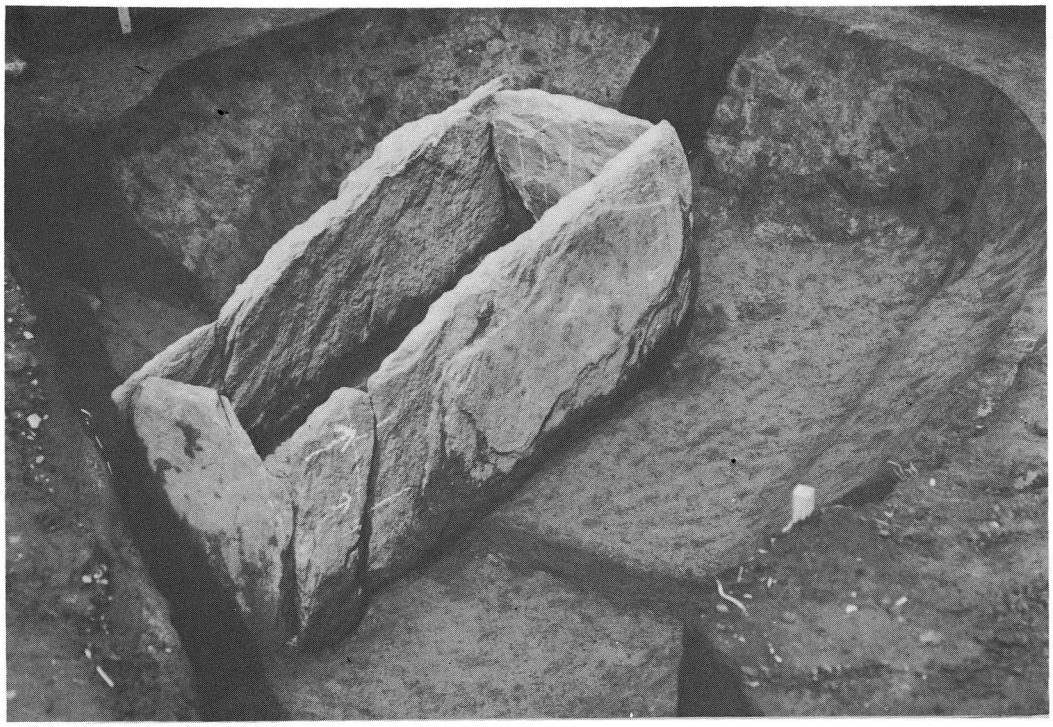
4．石棺北隅の接合部（粘土除去後）

図版8

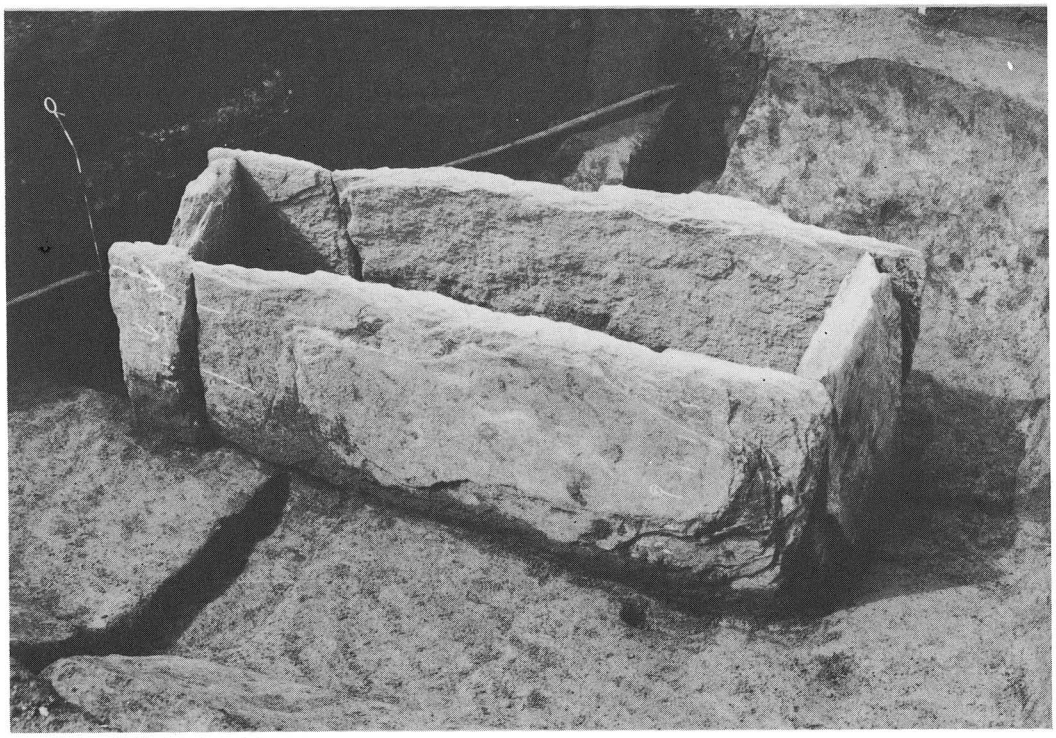
1．土壙内埋土の断面



2．棺身の状況（北東から）

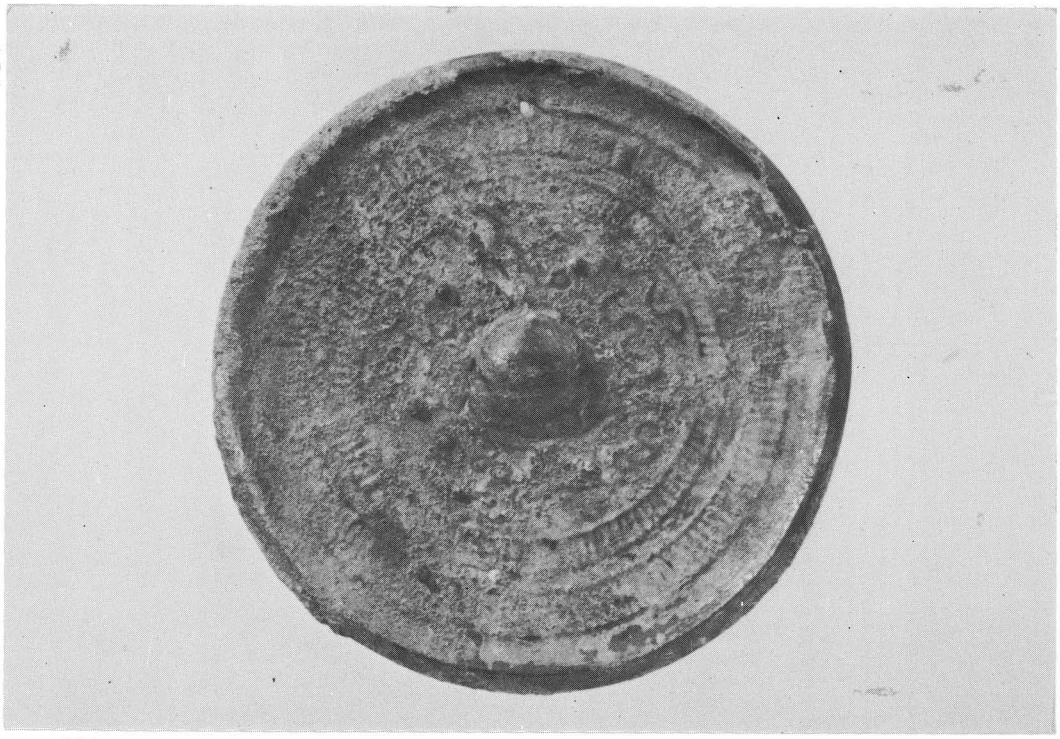


1．棺身の状況（南から）

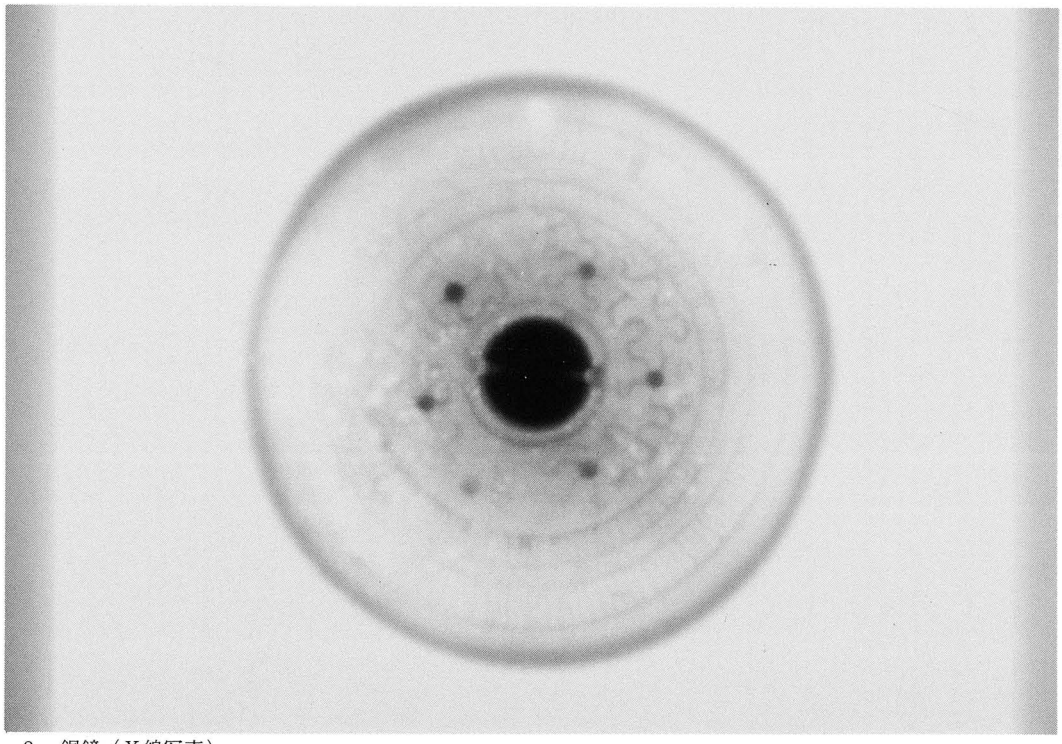


2．棺身の状況（南東から）

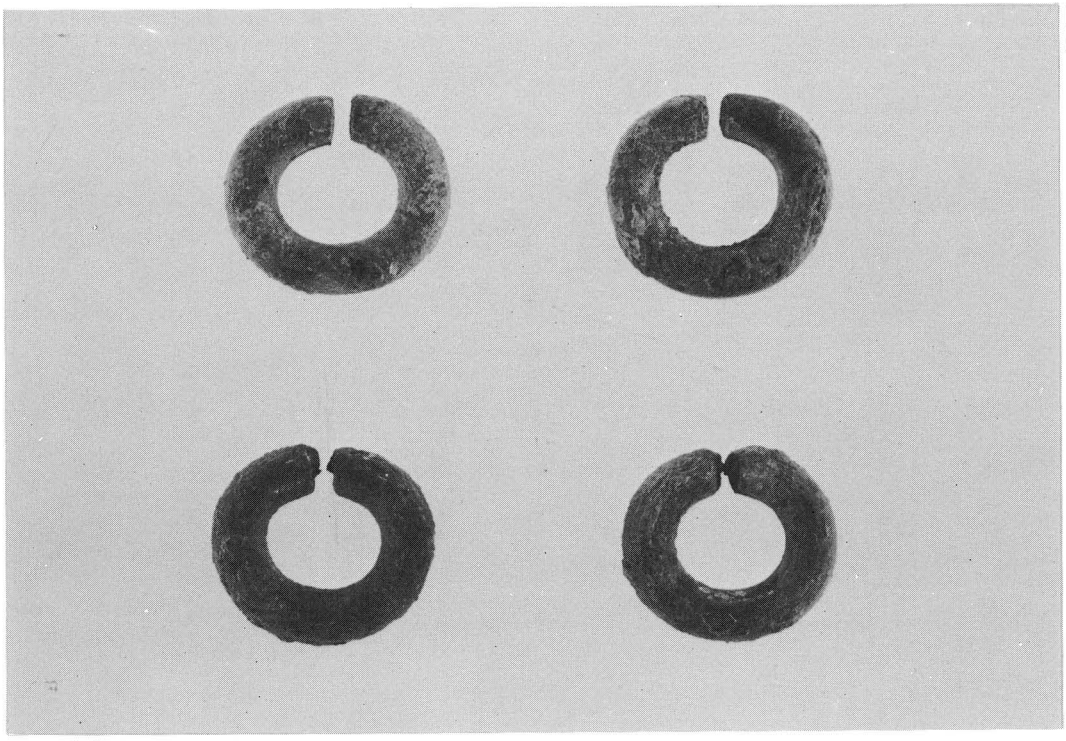
図版10



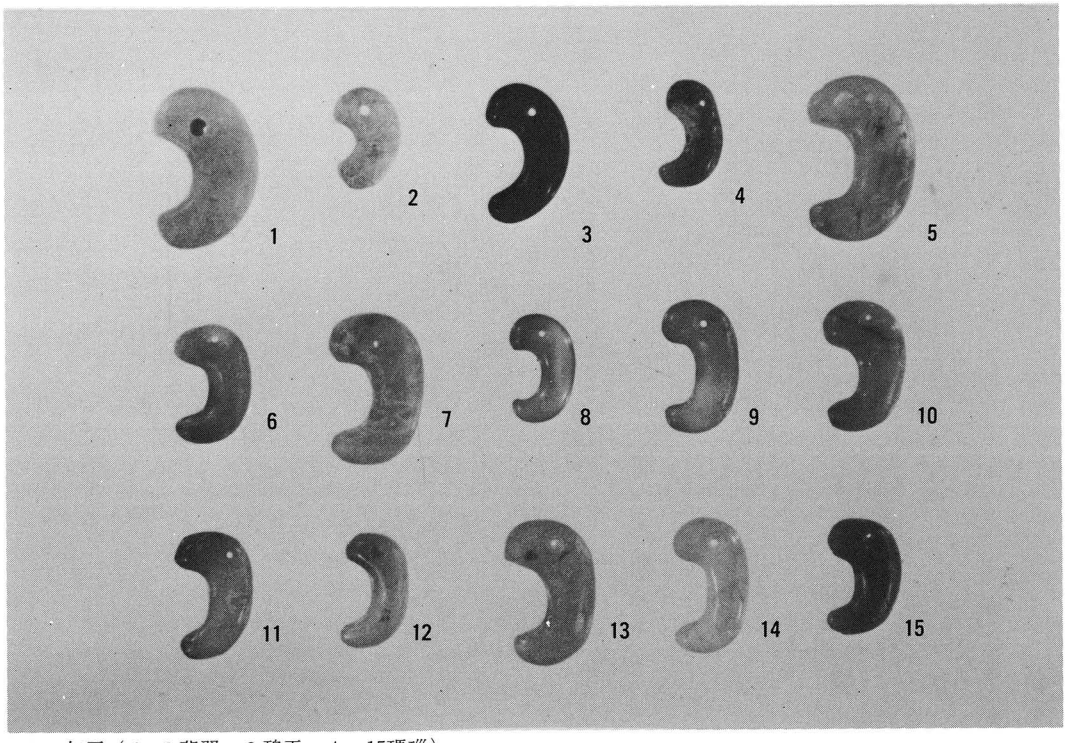
1．銅鏡



2．銅鏡（X線写真）

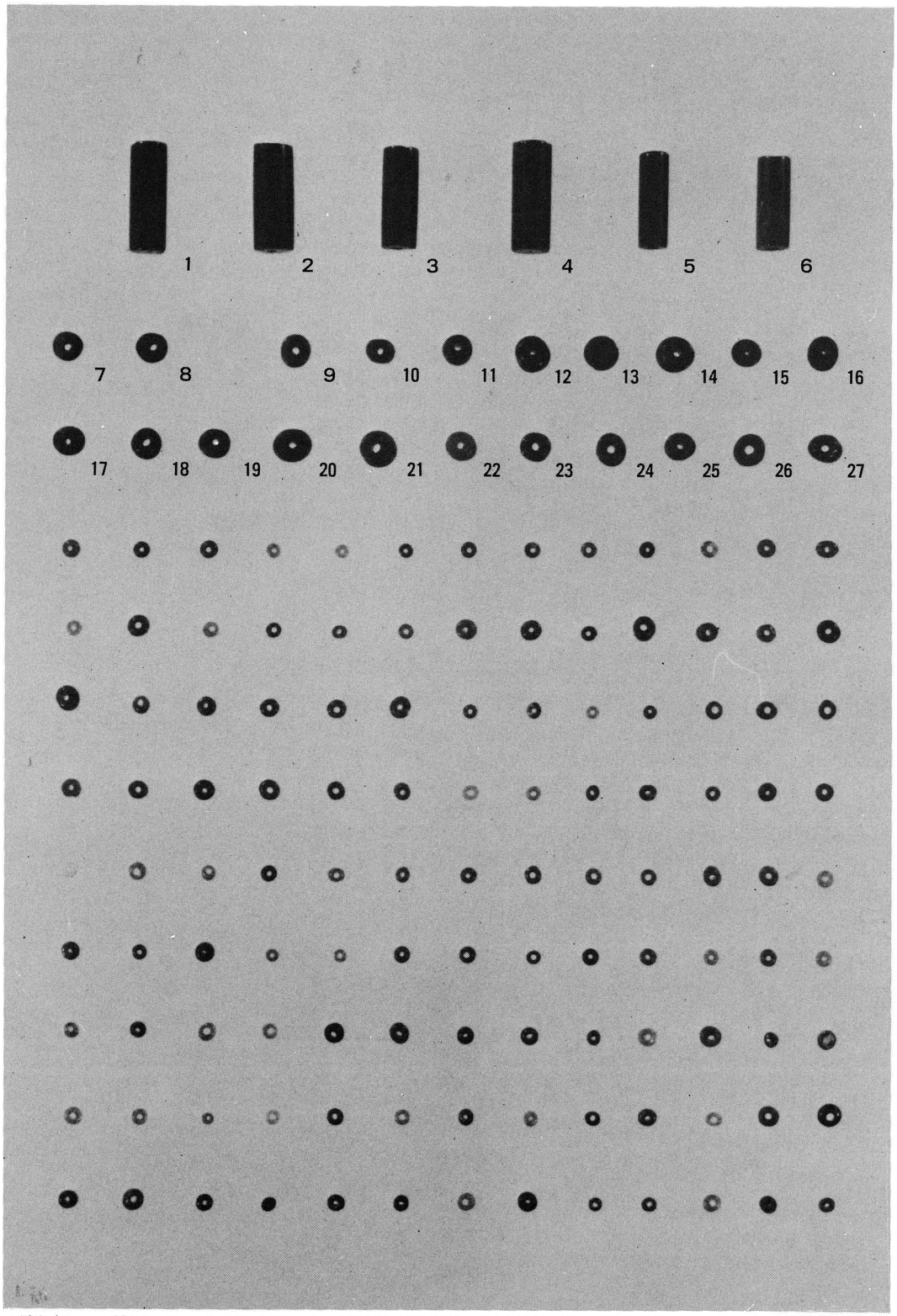


1．金環

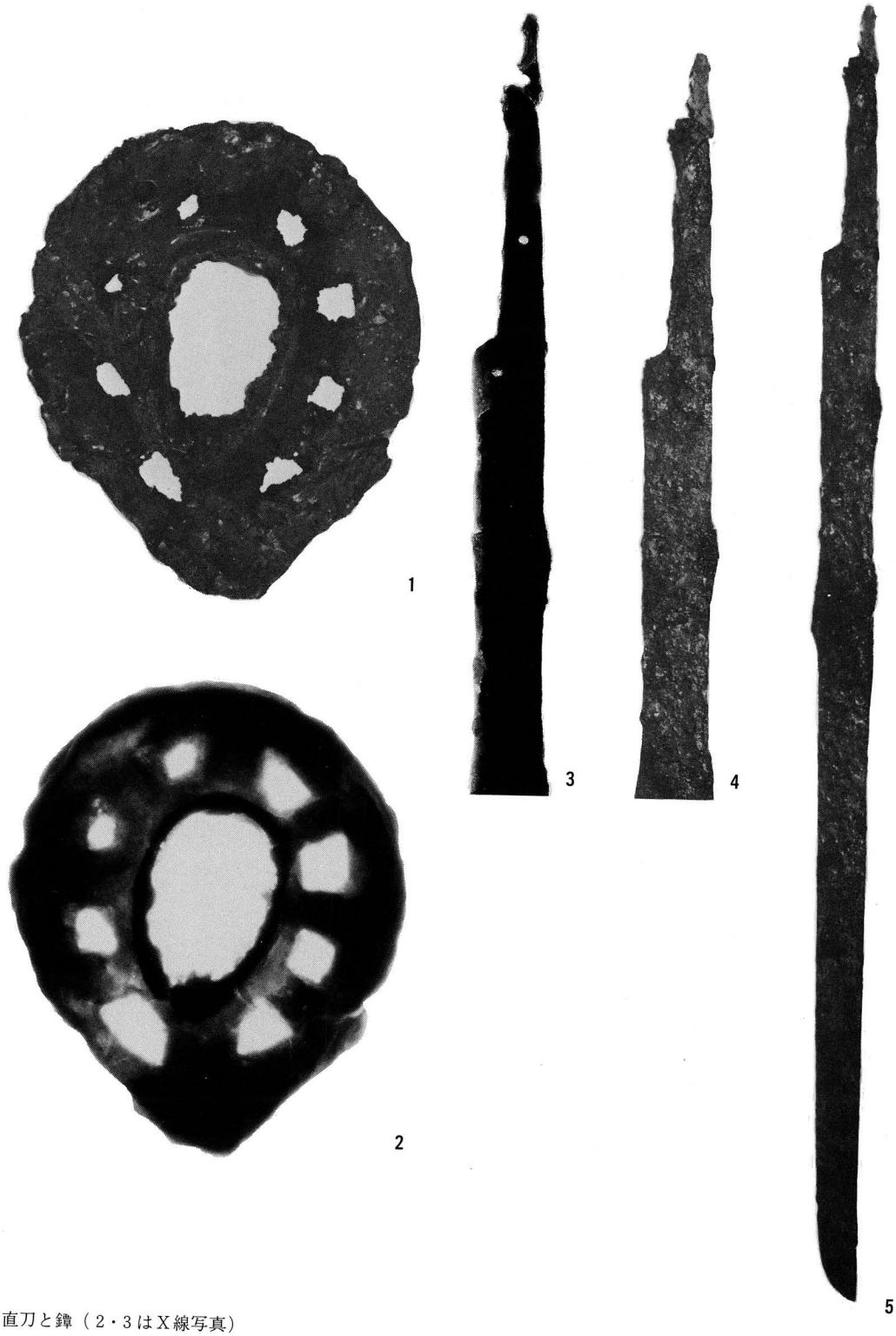


2．勾玉（1・2翡翠，3碧玉，4～15瑪瑙）

図版12

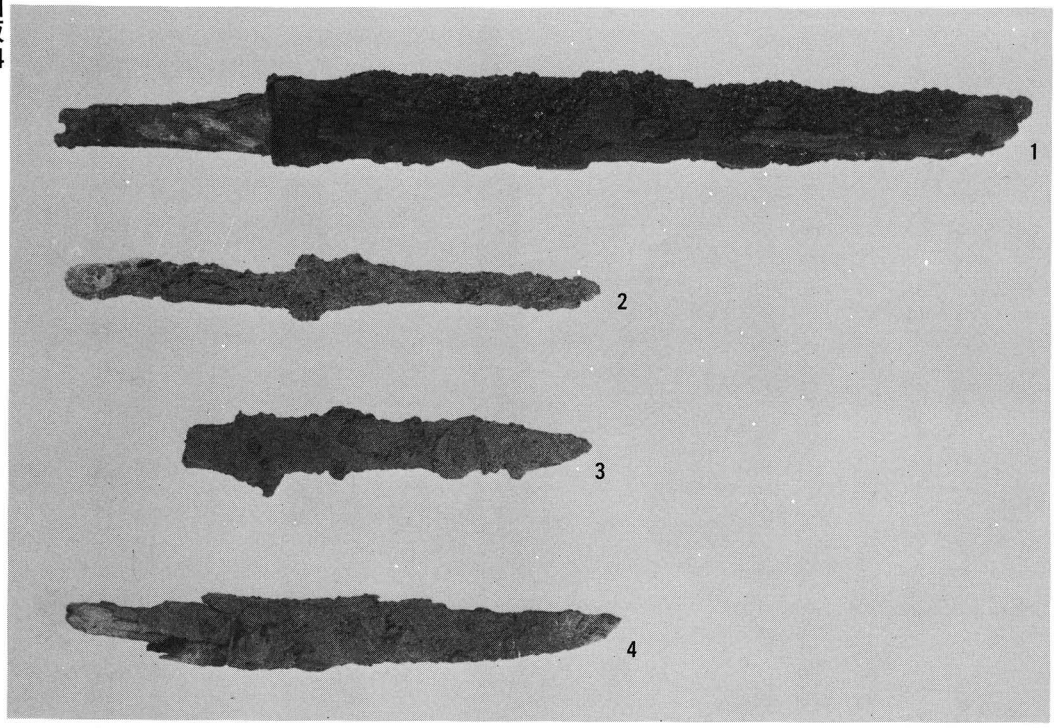


玉類（1～6管玉，7・8土製丸玉，9～27ガラス製丸玉，無番号はガラス製小玉）

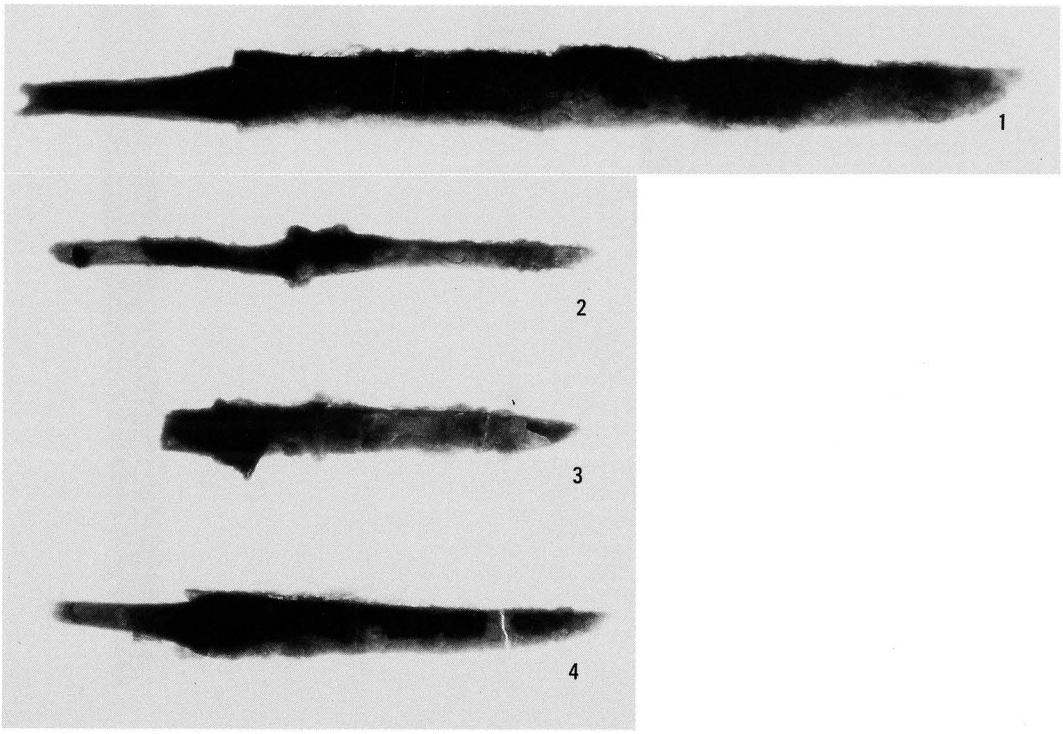


直刀と鐔（2・3はX線写真）

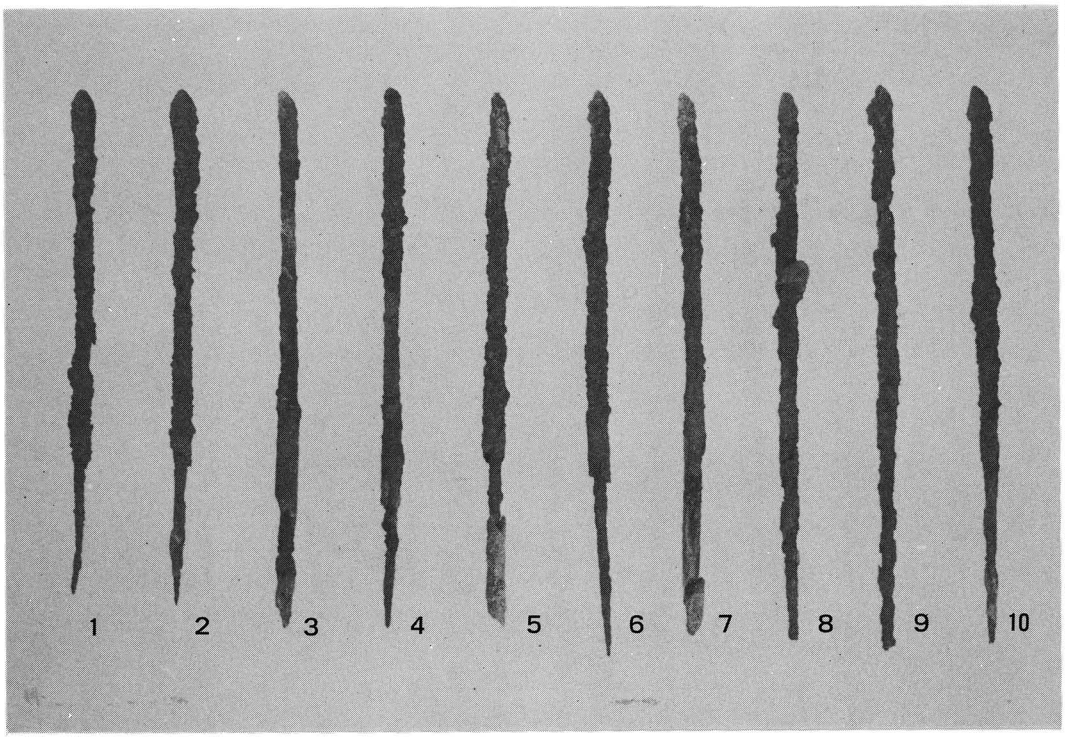
図版14



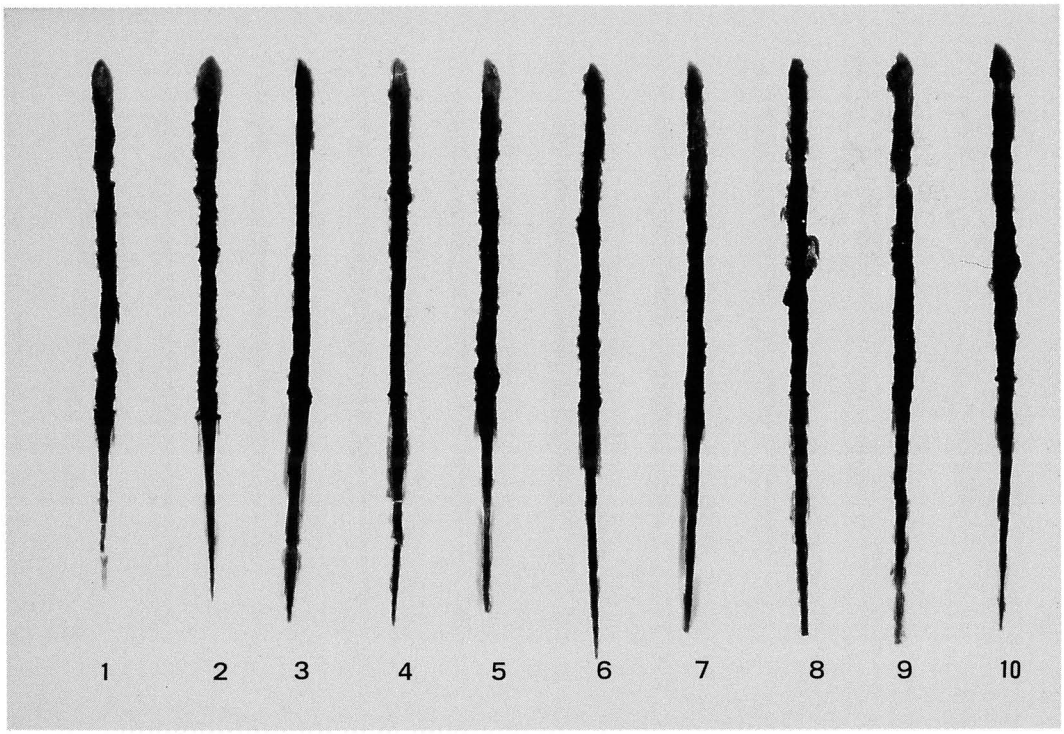
1．直刀及び刀子（1直刀，2～4刀子）



2．直刀及び刀子（X線写真）

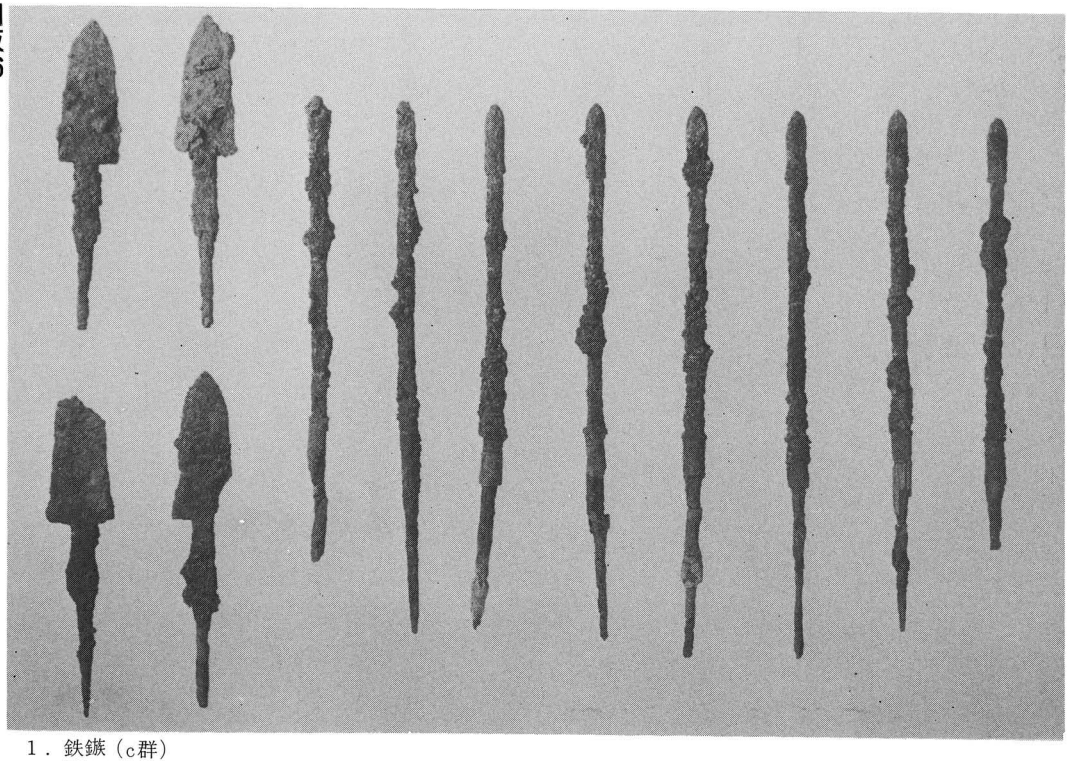


1．鉄鏃（1・2a群，3～10b群）

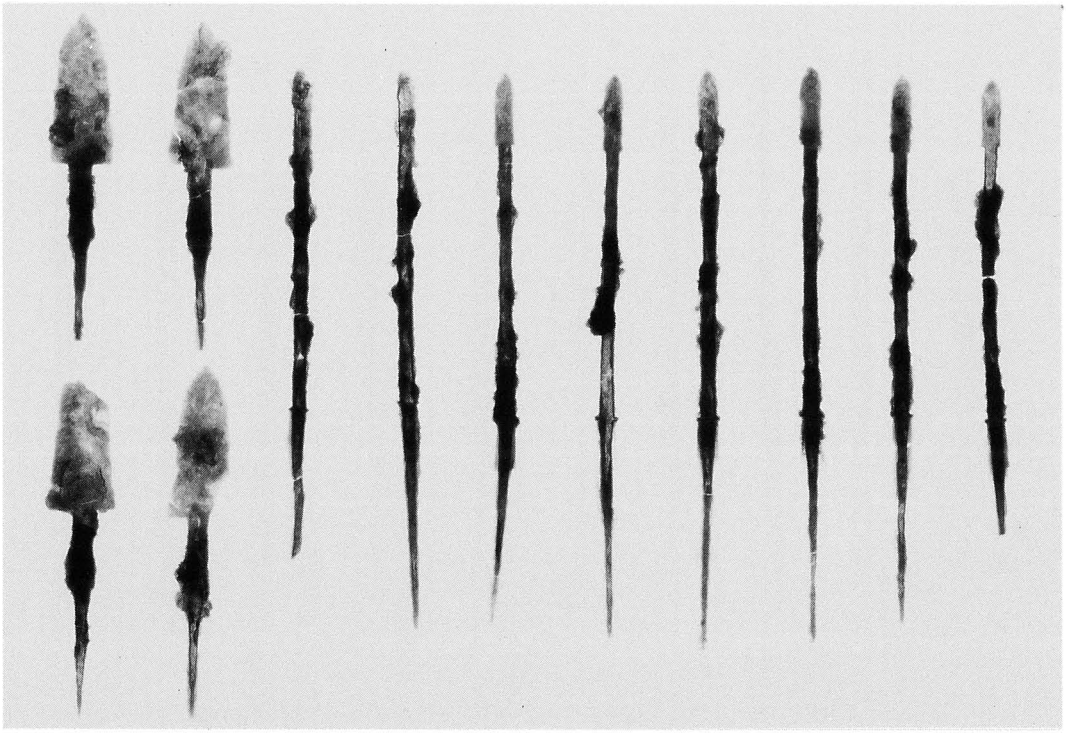


2．鉄鏃（X線写真）

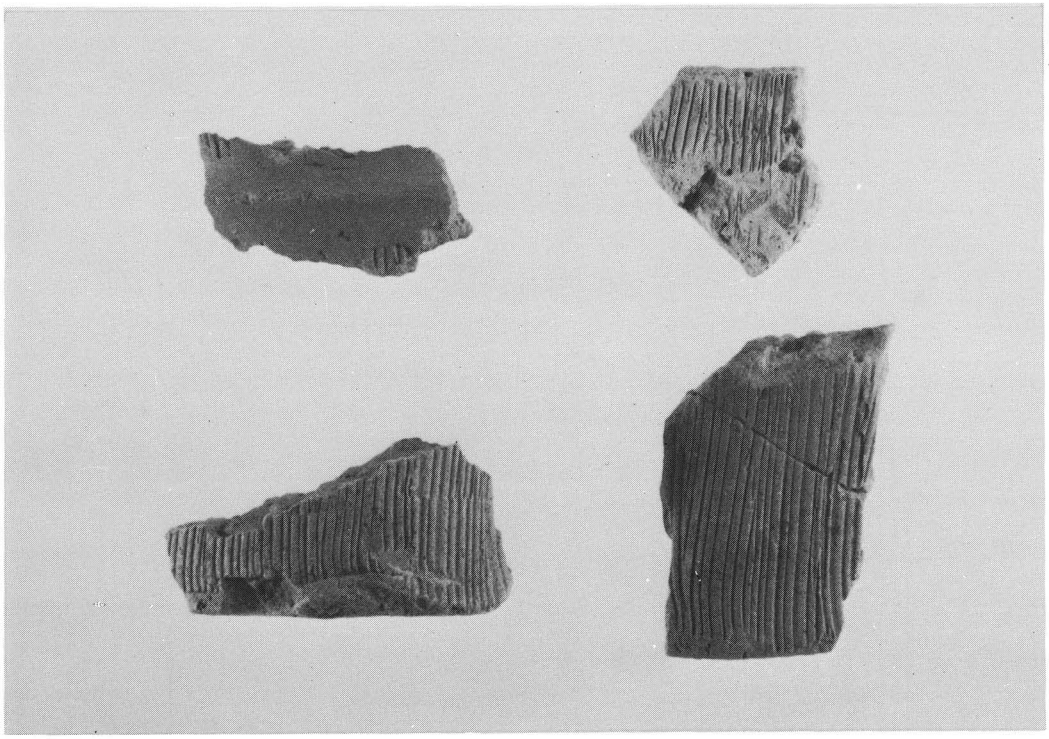
図版16



1．鉄鏃（c群）



2．鉄鏃（X線写真）



1．円筒埴輪片

八千代町埋蔵文化財調査報告書　4

太　田　古　墳

平成元年３月31日　発行

編　集　者　太田古墳調査団
代表岩崎卓也

発　行　者　八千代町教育委員会
〒300-35 茨城県結城郡八千代町
菅谷1,170

印　刷　者　八千代印刷有限会社
〒300-35 茨城県結城郡八千代町
若天神前746-3